
アックス・プレデター

竜鬚虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アックス・プレデター

【Nコード】

N2269F

【作者名】

竜鬚虎

【あらすじ】

米映画「プレデター」の二次創作。宇宙のどこかに存在する、とある世界に戦乱とは無縁の平和な王国があった。だがある日、その国に謎の軍勢が攻め寄せてきた。突然の出来事に、王国はなすすべもなく追い詰められていく。だがその一方で、その軍勢とは別の更なる脅威が、血の匂いを求めて王国に降り立っていた。

プロローグ

とうに日が落ちて、暗くなった山林の中を、一人の少年がトボトボと歩いていった。

年齢は十五、六歳だろう。身長はおおよそ百六十センチを僅かに超えた辺りで、黒髪黒眼で肌の色は黄色く、髪型はボサボサの短髪である。

身なりは半袖に短パンの涼しげで、尚且つ質素な旅人の服を着ている。背には小柄な体格には、やや不釣り合いな大き目の鞆を背負っており、腰には全長約一メートル、黒塗りで僅かに銀色の装飾が施された片刃式と思われる剣が差されていた。

随分大きな荷物を抱えているにも関わらず、足取りはさほど重くない。恐らく相当な距離を歩いてきただろうから、見かけによらず、かなりの体力の持ち主なのだろう。

少年は黙々と道といえるものなど全く無い山の中を、草を掻き分けながら歩いてしたが、表情は徐々に不安を感じさせるものを出してきている。

「あゝあ、本当に方向あってんのか？　こんな心配になるんだったら、きちんと道のほうを歩いてくればよかったよ……。まあ今更遅いけどさ……」

少年はそう独り言を呟き、深く溜息をついた。

少年はある目的があつて、この国の王都に向かう途中だった。

さほど急ぐ旅ではないのだが、心情的に早く到着したかった少年は、山脈のため少し遠回りになっている道筋を外れ、真っ直ぐ山の中を突っ切ることにしたのだ。

だが所詮標識など何も無い林の中、よもや遭難したのではないかと

いう嫌な予感にかられた今となつては、己の判断を深く後悔していた。

少年は力無く上空を見上げた。空には満天の星と、間もなく満月になるであろう月が、夜にも関わらず明るく世界を照らしていた。

（星があゝ。確かあれで方角とか、時間を知れる人もいるんだっけ？ 本当に羨ましいな）

少年はしばらくぼんやりと星々を眺めていたが、突然何かに目覚めたように、目を大きく開けた。

「なつ、何だ！ 今の！？」

少年はほんの一瞬だが、上空を“何か”が物凄い速さで落下していったのを見たのだ。瞬き一つだけで見逃してしまったかもしれない、驚異的な速度だった。

（ぜつ、絶対鳥じゃねえよな、あれ！？ 隕石つてやつ！？）

自分が見たものを上手く判別できない少年は混乱して、先程とは別の理由でそこに立ち尽くしていた。

少年がいる場所とは大分離れた森林の中に、それはあった。少年は隕石ではないかとも思っていたそれは、明らかに隕石とは異なるものであった。

形状は例えるなら注射器であろうか？ その物体の上部は円筒上の大型の銀色の物体で、何かの入れ物のようにも見える。その物体の上部にはクローバーのように三つに分かれた傘が被さるようつい

ている。下部には太い針のようなものがついており、それが大地に深々と突き刺さっていた。

その物体を中心に、周りの木々は大きくなぎ倒されている。この様子から見て、かなりの威力で落下し、地面に突き立ったようだ。

突如その未知の物体から、ウィーン！という奇妙な音が聞こえたかと思うと、唐突に物体上部の側面が、開き戸のように開いた！

中から現れたのは人間のようなものであった。

いや、よく見るとそれは人間ではなかった。

その人物（？）は身長二メートルを超える大柄で屈強な肉体の持ち主で、銀色の軽装の鎧を纏っていた。腹部等の鎧の無い部分からは、爬虫類や水棲生物を思わせる模様が見えている。そしてその上から網目状の服が着付けられていた。

左肩部には銀色の筒状のものが取り付けられている。形状を見ると銃器のようにも見えるが、それには引き金らしきものは何もついていない。そもそも銃を肩に差す戦士などあまり聞かない。

剥き出しになっている手や足の指は、人間と同じ形の五本指であったが、肌は先程と同じく異質なもので、指先には肉食獣のような鋭い爪が伸びている。

背には武器と思われるものが、いくつも装着されており、顔面には鎧同様の銀色の仮面が素顔を隠している。その仮面は髑髏を思わせる奇抜な形で、額の面積が広く平らになっており、顎部が少し前方に突き出ている。目の辺りには穴は無く、楕円形の窪みのような形になっていた。眼鏡のようなガラス張りで、中から視界を広げる構造なのであるのか？

仮面の縁からはドレッドヘアのような先が尖った太い線が、何十本と生えていた。相手が異形の存在なだけに、それが頭髮であるのか、それとも装飾であるのかは、外見からは判別不可能である。

その謎の怪人は、先程の少年と同じような形で空を見上げた。

ただ怪人は少年と違って、不安に駆られているわけではなく、むしろに喜びに満ち溢れているような雰囲気で、腕を広げ、背を大きく伸ばした。

同時に表情の判らない怪人は「ウオオオオーーーー！」と凄まじい雄叫びを上げた。

「こつ、今度は何だ！」

山脈一帯を鳴り響くような雄叫びに、少年はすっかり腰を抜かしていた。

（狼か！？ それともなにかの魔獣！？ そんな話し聞いてねえぞ！ 待て、落ち着け。こういう時は……）

少年は目を瞑り、少しの間何かを考え込むような動作をする。だが直ぐに瞼を開けて意を決したかのように結論を口にした。

「何かやばそうだから逃げよう。」 うん、名案だ！」

そうごく普通の答えを口にして、少年は飛び出すようにして森の中を駆け巡った。

雄叫びの主の正体は誰なのかとか。その主は何処にいるのかとか。どの方向に行けば逃げることになるのか。そういうことは一切考えず、ただひたすらに、懸命に、かつ適当に、森の中を猛烈な速度で走る。その速さは本当に人間なのかと疑うほどの驚異的なものであった。

この日、この世界に狩人^{フレデター}が舞い降りた。

第一話 怪人

怪人と少年がいた山の、すぐ近くにその街はあった。

いくつもの赤い煉瓦造りの建造物が立ち並び、同じ赤煉瓦で建てられた大きな城壁に囲まれている。上空から見れば、城壁は正確な五角形に描かれており、各々五方向に大きな城門が建てられている。街の南側にはとてつもなく広い人工池が存在している。そこは公園や農場関係でのものではなく、この国の兵達が利用している、ある“乗り物”を置くための施設であった。

人口約十二万人。南部の池と中央の王宮以外では赤一色の都市。ここがこの“エルダー王国”の王都“ケルティック”である。

何事も無い平和な時間が再び始まるであろうこの日の昼頃、南東の城壁の門に一人の旅人がやってきた。太陽が昇る前の時刻に、山の中を歩いていたあの少年であった。

門番の兵達はその少年の状態を見て呆然とした。

その少年の目は虚ろで、激しく息を切らしていた。全身汗で濡れており、フラフラと今にも転びそうな危険な足取りで、こちらに向かってきている。とても無事な状態とは思えない。

少年は兵達のすぐ側まで寄ると、通行証とおぼしき札を兵達に差し出した。

「父さ……、いやデイロン・アマミヤの紹介でエルダー近衛隊への入隊を申し込みに来た、クシュウ・アマミヤと申します……。通行の許可を頂きたい……」

「あつ、ああ。それはいいんだが……、お前大丈夫なのか？」

息苦しい声で言葉を並べる少年　クシュウの姿に、兵士は心配そうに声をかける。

「だ、大丈夫です！　ただちょっと山の中を走ってきたので少し疲れてるだけで」

言い終わる前に、クシユウは紙切れのようにフラフラと揺れて、パタリとうつ伏せに倒れた。

「おっ、おい！　大丈夫かお前！　おい！」

クシユウは倒れた自分に驚いた兵士達の声を、おぼろげな意識で聞きながら、クシユウはゆっくりと眠りについた。

「はっはっはっはっ！　ははははははっ！」

ケルティックの大型病院の一室に高らかな笑い声が上がっていた。
「それで？　その変な鳴き声にビビッて、ずっと山の中を走り回って、ぶっ倒れたてのかあ？」

部屋には笑い声の主である色黒の肌の青年と、青年の前のベッドに座っているクシユウがいた。

「本当にすみませんダッチさん。入隊前にこんな醜態晒してしまつて……」

相手が目上の人物であるため、本人はあまり好まない丁寧語でクシユウは答え、力なくうな垂れた。

先日クシユウは、空から山に入り込んだと思われる謎の存在からいち早く離れようと、山林の中を走った。だが向かう先に見当がついていたわけではなく。ただ思いつくままに走ったため、元々不安に駆られていた方向感覚が完全に判らなくなった。

そして夜間ずっと迷路に入り込んだかのように林の中をグルグル

回り、朝日が昇り始めた頃になって幸運にも、王都の見える位置に辿りついたのだ。

誰が聞いても、とんだ笑い話である。

「ああ、別に気にするな。確かに可笑しかったが、思いつめるほどでもないさ」

クシュウは目の前にいる、今日から自分の上官になるというこの男の、にこやかな笑顔に首を傾げた。

「怒らないんですか？ 『王室の護衛を任されるものがそんな腰抜けでどうするんだ！』とか言われると思ったんですけど？」

「怒ることでもない。別に今は戦乱中でもないし、異界魔もいない。きな臭いものなど何も無いから、気軽な気持ちでいっても充分さ」

ダッチの言葉にクシュウは啞然とした。仮にも国の中核を守護する近衛兵がこんなもので良いのだろうか？ 父だったら、一時間近くは怒声を浴びせるものだった。それに“異界魔”とはいいたい……？

ダッチはそんなクシュウの様子など気にかけず、隣に置いてあるクシュウの荷物をまじまじと見詰めた。そして不思議そうな顔でクシュウのほうに首を向けた。

「しかしお前本当にディロン殿の子息か？ 随分ボロイなりじゃないか？ しかも共も連れずに、一人で歩いてここまで来たとはな……」

「父さんの言いつけなんです。『軍人たるもの、日常から自分を鍛えるべし』とのことで」

「えらく堅物なんだな。まあいい、とりあえず今日は休んでろ。詳しいことは明日だ。それまでに手続きは済ませてやる」

そう言って、ダッチは手を振って病室を出て行った。

クシュウはベッドに寝転がり、今後のことに思案を寄せた。自分は明日から近衛隊である。そのために今日まで一生懸命、剣と魔法の鍛錬を行ってきたのだ。

だが先程のダッチの言葉に、少々不安が浮かんできた。もしかしたら近衛隊は、今まで自分が想像していた質実剛健とは違うのかもしれない。

まあ考えても仕方がない。全ては明日判ることだ。それよりクシュウはもっと気になることがあった。

（あの変な鳴き声、結局何だったんだろ？）

その夜、ケルティックの街の、人口の極端に少ない片隅の市街地で、白いマントに身を包んだ五人の奇妙な男女が、薄暗く僅かに不気味さすら感じさせる歩道を臆面なく歩いていた。

彼らは街中を下調べするように見回し、ふうんとならなような声を上げる。やがて近くに恐らくは無人であろう、古い倉庫の姿を見ると、真っ直ぐそちらの方を歩いていった。

すると突如、片側の小さな歩道から二人の男が、姿を現した。彼らは白マントの者たちの前に立ちふさがり、手にナイフを握り締め、やや引きつった作り笑顔を見せていた。

「誰だ、お前ら？」

先頭に立っていた女が不機嫌な表情で、ナイフを突き出してきた男に問いかける。

「誰だつていい。金出せこら」

男の一人が僅かに息を切らしながら答え、女のすぐ目の前まで近づき、首元にナイフ突きつけた。かくいう突きつけてきた男自身も緊張している様子で、こういった行いは初めてであることが容易に想像できた。

よく見ると男の顔の右半分は、赤黒い染みのようなものが、薄っすらと浮き出ている。これは火傷の痕である。重度の火傷を負った後に、魔法で回復させると、このような染みが残るのだ。この男は過去に大火事にでもあつたのだろうか？

喉に凶器を向けられているにも関わらず、女は恐怖に震えている様子は全く無かった。氷のように冷たい表情で、自分より背丈の高い男に見下すような目線を向けている

「意外だな。この国は治安が優れていると聞いていたのだが……」

「うるせえ！ こっちはもう一日以上何も食ってねえんだよ！ さつさと出せ！ これでも俺たち元軍人だ！ あんまなめんなよ！」

怒りの琴線にでも触れたのか、ただ緊張して融通が利かないだけか、男は唐突に女達に対して喚き立てる。

「そうか。何だか知らんが訳ありのようだな。だが私達も訳ありだな、あまり目立つようなことは出来ないのだ。だからあまり騒ぎになることはしたくない。悪いが引いてくれるか？」

「おいおい何を言つて」

男の言葉は最後まで続かなかった。いきなり“トスッ”という小気味良い音が聞こえると、急激に身体から力が抜け始めたからだ。

一瞬何が起こったのか判らなかつた男は、恐る恐る自分の腹部に

視線を向ける。そこには凶悪なほど鋭さを感じさせる一本の細身の両刃剣が、自分の腹を深々と突き刺していた。

血を滴らせた剣は、目の前の女のマントの隙間から生えていた。女はマントの中に剣を隠していたのだ。

「て、てめえ」

男は苦しげに怒りの声を放ったが、事はそれだけでは終わらなかった。

男の身体と一体化していた剣の刀身が、突如白く発光したのだ。そして直後に白い冷気が剣から大量に放たれた。

腹から強力な凍える魔力を注ぎこまれた男は、一瞬にして全身の感覚を失い、次に意識を失った。身体は石像のように硬直し、瞬間に白く染まっていく。やがて各部から“ビシッ、ビシッ”と小さなヒビが入り始める。

「お前！ ウエイランドの騎士か！？」

もう一人の男が、目の前の現象に驚き、声を上げた。

女はその男の方に振り向き、冷たい笑みを浮かべると、剣を大きく右横に振った。男の腹はガラス細工のように脆く砕け、上半身が地面に落ち、粉々に砕け散る。

「ああそうだ。よく判ったな」

そう言って女は剣を一振り回転させ、男の方に剣を向き直した。

「う、うわあああああああ！」

半狂乱になって男が逃げ出す。女はマントを翻し、白く光る剣先

を、駆ける男の背中の方に真っ直ぐに向けた。翻したマントの裏からは、青い鎧に身を包んだ女の全身が見えた。

「凍風」

女が静かにそう唱えると、切っ先の光が急に強くなり、そこから強力な吹雪が発生した。それは光線のように直線状に放たれ、逃げる男に猛烈な速度で迫っていく。

「ぎゃあああ！」

冷風は男の背に直撃し、強烈な悲鳴が上がった。だが直ぐに静かになった。男は一瞬のうちに先程の男と同様、白く固まったからだ。

この世界に古くから伝わる人間の特殊能力“魔法”の力によるものである。

女は気持ちよさそうに笑みを浮かべ、剣を鞘に納めた。

「大丈夫か、これ？ 変な騒ぎにならないだろうな？」

同じ白マントを着た男の一人が、心配げに声をかけた。

「このくらいどうということはない。それより早々にあの倉庫に隠れるぞ」

「ああ、そうだな。決行のときまで、あそこで暇をもてあそぶか……」

男は深い溜息をつき、目の前にある古倉庫に足を進めた。

「ん？」

最後尾を歩いている白マントの一人が、側にある廃屋と思われる家の屋上に、奇妙なものを見つけた。

一見すると、そこには何もないように見える。

だがよく見ると、その屋根上の空間の一部が奇妙に歪んでいることが認められた。それは透明なガラス瓶から、向こうの風景を眺めているようであった。だがそれはガラス瓶でないのは明らかだった。その歪みは人のような形をしていた。そして生き物のように、微妙に動いている。

「何だ！ お前は！」

危機感を感じた白マントの男は、即座にマントを脱ぎ、剣を抜き放つ。

すると、その人型の歪みから、“ドギョーン”という音と共に、青く光る何かが飛び出した。

一瞬だった。それは目にも止まらぬ速さで、男の身体を通り抜けた。すると頑丈な鎧に覆われた男の胸と、その後ろにある地面に、綺麗な丸い穴が出来上がっていた。男は何が起こったのか、何一つ理解できぬまま絶命し、倒れ付した。

「なんだ、あれは！」

前方を歩いていた残りの白マント達は、後方の事態に気付き、同時に屋上の透明人間を見て驚愕した。

「何だっていい！ 撃て！」

リーダー格であつたらしい女が、慌てて剣を抜き、透明人間の方角に切っ先を向けた。突然の事態に、先程ゴロツキを葬ったときの

余裕ぶりは微塵も無くなっていた。

他の白マント達も剣を抜き放ち、一斉に屋上の透明人間に向けて、ゴロツキに放たれたのと同じ氷の魔法を放つ。

その時だった。吹雪が命中する直前に、透明人間は屋上から飛び上がった。信じられない跳躍力で、道の向こうの家の屋根に着地し、吹雪を回避する。着地した衝撃にその家の屋根が大きな軋み音を立て、先程まで透明人間がいた屋根には吹雪が衝突し、大量の白い冷氣と突風が弾けるように発生した。

「逃がすか！」

白マントたちは構わず、標的に向けて魔法を放った。透明人間は家々の屋根を駆け抜け、攻撃から逃げる。見たところかなり大柄な体格であつたようだが、それにしてはとてつもない走力である。さっきの跳躍といい、小柄な猿でもこれほどのことはできないだろう。白マントたちは無我夢中で魔法を放ったが、それは過ちだった。いくつもの直線状の吹雪が家の屋根に命中した影響で、大量の冷気が発生し、白マントたちの頭上は、雲のような真っ白な気体で覆われて、何も見えなくなってしまった。

「に、逃げたのか？」

頭上を見上げる白マント達の表情は、悔しげながらも、どこかホツとしているように見える。

だがそれはつかの間のことであつた。

“ドスッ”という鈍い音が聞こえた直後に、一人の白マントの身体が宙に浮き上がった。

「なあ！？」

凝視すると、その白マントの胸、心臓の辺りを透明な二本の刃が突き抜けて、血を垂れ流していた。白マントの背後には彼を右腕で

持ち上げるようにして、さっきの透明人間が立っていた。

彼は背後から、透明人間に心臓を貫かれ、悲鳴を上げる暇もなく殺されたのだ。

「うっ、うわあああああああ！」

残りの三人は我を失って、魔法を放つ。透明人間は右手の刃で持ち上げた白マントを、盾にして魔法を受け止め、三人に向かってに突進してきた。

透明人間が彼らの至近距離まで近づいたのは、白マントの死体が凍り付けになり粉々に砕けると同時だった。

透明人間は死体を貫いていた右手の鉤爪を大きく振り、二人の白マントを一拳に切り裂いた。大量の血しぶきが上り、二人はあっけなく倒れた。

「馬鹿な！？ 何なんだっ、お前は！？ エルダーの兵なのか！？」

もはや一人だけになってしまったリーダー格の女は、透明人間に向かって強く叫んだ。

それに答えたのかどうかは判らないが、透明人間の様子が変わった。

不完全に透明な身体から、青い電流が不規則に発せられ、間もなく見えなかった姿が、徐々に映し出されてきた。

そこに現れた姿。透明人間の正体は、昨日の夜に、奇妙な物体に乗って、天空から山中に降り立った、あの怪人だった。

「化け物めええ！」

女の剣の刃の光が一段と強く光った。そしてその剣を怪人に向けて、女はがむしゃらになって突進した。魔力の剣で、直接敵を攻撃

するつもりのような。

迫ってくる魔法を纏った剣先に向けて、怪人は右腕の鉤爪を大きく払う。

するとどうだろう。相当な業物であるのであろう女の剣は、そこらの棒切れのようにあっけなく砕け散った。

「あつ、あああああ……」

剣からは光が消え、女は今までの人生で一度も味わったこともない恐怖に硬直する。

怪人はそんな女に容赦なく、鉤爪を突き出した。

静かな夜の街を、外の市街地にも届くほどの壮大な悲鳴が上がった。

第二話 竜騎兵

翌日、普段まばらにしか人がいないケルティック西方の市街地は、実に珍しいことに多くの人間、もっぱら衛兵達が右往左往していた。先日の夜が更けた時間に、妙な音がするという通報を受けて、数人の衛兵達が派遣された。

彼らが最初に発見したのは、氷漬けにされた二人の男の死体だった。これだけでも充分大事であったが、更に驚くべき物は、近くにあるもう十年以上も使われていない古倉庫の中にあつた。

氷漬けにされた男達のすぐ側には、どうも彼らのものとは異なるらしい血痕が見受けられた。それは何かに引きずられたように、その倉庫の破壊された入り口へと続いていたのだ。衛兵達は恐る恐る中を覗いたら、そこにあつた想像以上の光景に失神してしまった。

「うつつ……」

「おつ、おい吐くなよ！」

倉庫の中で、一人の衛兵が、隣にいる口に手を押さえ始めた同僚に説教気味に声をかけた。かくいう彼自身も顔色はかなり悪い。

倉庫の天井には、全身の皮を綺麗に剥ぎ取られた五人の人間の死体が、屠畜場のように逆さまに吊るされていた。死体からは大量の血が滴り、床は血の池ですっかり真っ赤である。

「何だよ、これ？ 前代未聞にも程があるぞ。ここで何があつたっていうんだ？」

衛兵達の隊長と思われる人物が、呆気に取られながらも何とか口を開く。すると入り口の方から検視書を携えた衛兵が入ってきた。

「こいつらの身元は判ったのか？」

「いえまだです。近くに魔道剣が発見されたので、それがこの者たちの物だとしたら、おそらく魔道士かと」

「それはもう聞いた。じゃあ、凍ってた奴らはどうだ？」

「はい！ 一人は死体の損傷が激しいので不明ですが、もう一人の方は判明しました。四日前アンナ姫に対する乱行で解雇された元近衛隊員です」

隊長は一言「そうか」とだけ言い、再び天井の残忍な光景に目をやる。

「ここで魔道士同士での、闘争があったということか？ しかし何だってこんな……」

現場の状況に、隊長はそれ以上の感想を口に出ることが出来なかった。

ケルティックの中央区、そこには町全体の赤一色の建造物郡とは異を放つ、真っ白な塀と、広大な庭園に囲まれた純白の宮殿が建てられていた。この国で一番偉い一族、エルダー王家の王宮である。

庭園は綺麗に整えられた芝生と林、小さな池が見渡され、それを円形に囲う塀には、いくつもの門が建てられていた。その中で一番

小さな門、宮殿の真後ろにある裏門にクシユウは立っていた。

昨日とは違って、クシユウは今朝方支給されたばかりの緑色の近衛兵の服を着ており、腰には故郷から持ってきた自前の剣をそのまま差している。

「ふああああ〜、だりい〜」

もう昼近いというのに、クシユウは盛大に欠伸を上げ、目を擦る。さつきからずつとこの調子である。

王宮の裏門の警備が、クシユウに与えられた初任務であった。本来ならばまだ新任である彼は何人かの先輩の近衛兵と一緒に仕事をするはずなのだが、現在門を警護するのはクシユウ一人しかない。一緒に裏門の見張りをする筈だった先輩達は、今日は無断休暇をとっていた。本来ならば王家を守る者としてとんだ自堕落である。だが聞けばここ数年ほど前からは、こういうことは日常茶飯事であり、誰もさほど深く気にとめなくなっているという。なんでも先輩達は先日「新しい奴が入るらしいから、そいつにやらせておけば大丈夫だろ」と言っていたそうだ。

近衛隊へ入ることに、強い覚悟を決めて王都にやってきたクシユウだが、この見事なまでの平和ボケにすっかり気が抜けてしまった。だがよくよく考えてみると、軍がこのような自堕落でいられるのは、この国がそれだけ平和だという証拠に他ならない。おそらくこういうのが国として一番良い形なのだろうと、クシユウは考え直した。馬鹿でいられることが人間にとって、一番の幸運なのだ。

クシユウはそんなことを思いながら、ボンヤリと人通りの少ない門前の路道を眺めていた。

「……うんしょつ、と」

どこからともなく聞こえてきたその声に、半分眠っていたクシュウの意識は瞬時に覚醒した。

最初は道中の通行人かとも思ったが、目の前の路道には生憎誰もいない。耳を澄ますと、先程と全く同じ声が再び聞こえてきた。子供と思しき高めの声であったが、重要なのはそれが直ぐ側の塀の上から聞こえたことであつた。

声のした方向をしばらく見ていると、案の定、塀の向こうから赤毛の一人の少女が姿を現した。

年齢は十一、二歳ぐらいだろうか？ 長い髪は綺麗に整えられており、纏っているちいさなドレスは、明らかに一般人が着れるような安いものではなかつた。

少女は塀を乗り越えたいらしく、危なっかしく足を表の塀の下に出そうとする。クシュウの存在には、まだ気付いていないようだ。

今の少女の体勢も充分に危険であつたが、それ以上に色々と面倒なことになりそうな、嫌な予感をクシュウは感じ取っていた。

「あつ！」

途端、少女がバランスを崩して、塀からずり落ちる。

だがこの事態をとくに想定していたクシュウは、素早く少女の真下に移動し、落下する少女を受け止めた。少女は「キャッ！」と小さな悲鳴を上げるが、特に怪我はしなかつた。

塀の高さはおおよそ六メートルある。どのようにして塀を登つたのか、そしてどうやって表に下りるつもりだったのかは不明だが、もしそのまま落下していたら、相応の怪我を負っていたかもしれない。

「だつ、大丈夫でございますか？」

少女の正体に大体感づいていたクシュウは、少女を横抱きしながら敬語で呼びかける。

少女は目をパチクリして、クシュウの顔をしばらく見詰めていたが……。

「どっ、どうしているのです！？　ここの見張りは全員サボりだと聞いていたのに！？」

「いや、どうしてと言われてもですね……」

急に怒鳴りつけられたクシュウは、もうどう答えたらいいか判らない。とりあえず今の体勢はまずいと考え、少女をゆっくりと地面の上に下ろします。

「私は先日近衛隊に入隊したクシュウと申します。あなたのお名前は？」

「あっ！」

少女の返答はそれだった。真っ直ぐクシュウの背後の空を指差している。随分原始的な手口だったが、クシュウはつい反射的に後ろを見てしまった。

当然少女はその隙に脱兎のごとく、街へと駆け出した。

「ああああっ！？　ちよつとお待ちを！」

大変なことになった。これでは門の警護どころではない。初日から面倒に巻き込まれた自分を憂いながらも、クシュウは少女を追って、街へと走っていった。

「おいあれは何だ？」

ケルティックを囲む、赤一色の巨大な城壁の上。その北方の一角で、見張りをしていた一人の衛兵が、北の方角の空から見える奇妙な影に気付いた。近くにいた他の衛兵達も次々とそれに気がつき、空を見上げる。

その影は横に細く伸びており、徐々に大きくなっているようだった。

一人の衛兵が、「どうれ」と声を上げ、手持ちの望遠鏡を取り出し、その影を除いた。

「竜騎士？」

確認されたのは白い竜だった。前足を持たず、代わりに大きな翼を持つ飛竜である。

そのワイバーンの背には人が乗っていた。ワイバーンの口元に繋がれた手綱を掴んだその人間達は、青い甲冑に身を包んでいる。それらは二十騎ほどおり、渡り鳥の群れのように綺麗なブイ字型の編隊を組んで、真っ直ぐにこちらに近づいてきている。

竜騎兵であるのは間違いないのだが、どこの国の所属なのか、衛兵には判別できなかった。

ただどう見ても穏和な目的で向かってきているとは思えづらい、だが衛兵はそういう風には考えなかった。

「おい！ あれは竜騎兵の編隊だ！ なんだか凄いぞ！」
「本当か！ 俺にも見せる！」

衛兵達は、取り合うようにして望遠鏡を譲り合い、始めて見る竜の姿に感嘆した。

やがて竜騎兵達は、肉眼でもはっきり見える距離まで近づいてきた。街に近づくうちに少しずつ速度を下げていく。

その姿に衛兵達は、子供のように竜騎兵に手を振った。

するとどうだろう。先方にいた三頭のワイバーンが、衛兵達に向けて大きく口を開いた。騎兵がバチツ！とワイバーンの喉に鞭を打つと、口から真っ白な氷の息吹が放たれた。アイスブレス

衛兵達のいる城壁は、その息を一齐に受け、大量の冷気が弾け、部分的に視界がゼロになる。

竜たちがその城壁の上を通り抜けると、その風圧で冷気が掻き消える。するとそこには、手を振った体勢で冷たく固まった衛兵達の姿が現れた。

少女とクシュウはケルティックの大型図書館で、熾烈なのか滑稽なのか、よく判らない鬼ごっこを繰り広げていた。

何故図書館にいるのかというと、少女が図書館に逃げ込んだから、クシュウもそれを追って入ったということ。

今日は随分空いている図書館を、少女は鼠のようにすばしこく逃げ回る。クシュウは懸命に追うが、中々捕まえられない。身体能力にはかなりの自身があるクシュウだが、少女の方も熟練の兵士も顔負けの相当な体力であった。しかもここは図書館だ。下手に乱暴に走り回ると、中をひどく荒らして、館員や客達に迷惑をかけてしまう。

馬鹿みたいに高い本棚が並ぶ部屋で、とうとう少女を見失ってしまった。

クシュウは焦った。このまま逃がしてしまったら、折角入った近衛隊をクビにされかねない。期待外れの腑抜けな隊であったが、こ

んなことで失職したら、更なるいい笑いものである。

クシユウはとにかく必死で、本棚の森の中を探し回った。ここに来る途中、外が妙に騒がしかったが、そんなことを気にする暇は無い。何やら銃声のような物騒な音が聞こえた気もしたが、それは多分気のせいだろう。

「クシユン！」

どこからか、くしゃみの声が聞こえてきて、クシユウは即座にその方向に走り込む。だがそこには誰もいなかった。

おかしい。確かに気配はすぐ近くに感じるのに……。

「どこにいらっしやるんですか！ いい加減にしましょ……クシヤン！」

言葉途中でクシユウも思わずくしゃみをしてしまった。ここに来て初めて妙だな、と思い始める。図書館の中が冬のように冷え込んでいるのだ。

別に冷房がかけられている様子は無い。もう秋に入り始めた季節であるが、この寒さはいえぬはずだ。

「キャッ！」

まあそれも後で考えようと決めた矢先に、不意にそんな声が聞こえたと思ったら、すぐ後ろでドカン！という音が聞こえた。

「ちよっ！ どうされました！」

振り向くと、そこには少女が右足の肘に両手をかけて蹲っていた。

「本棚から落ちました。しかし大丈夫です。すぐ立ちますから、心配なさらずそれまでお待ちを！」

少女が幼い声で、気丈に言い放つ。だがクシュウは少女の望み通りには動かなかった。

「残念ながらお断りします」

「あああ！ 何を！」

クシュウは今まで本棚の上に隠れていたらしい少女を掴み上げ、右脇に抱えた。少女は猫のようにジタバタと暴れたが、当然その程度のことでクシュウは放したりしない。

この程度の小細工で気配を読み違えるとは自分も修行不足だな、と感じながらクシュウは出口の方に向かっていった。

「放して！ 放さないと『人攫いだ！』と大声で叫びますよ！」
「なあ！？」

クシュウは慌てて、現在自分のいる通路の周りを見渡した。だが……。

「誰もいませんね……」

「ええ今日は閉館日だったんでしょうか？」

二人は呆然とした。

なぜなら今の図書館は空き家のように誰もいなかったのだ。客はおろか、受付席も本来警備員が立っている場所も無人である。

だが閉館日なら入り口は閉まっているはずである。それにさつきここに入ってきた時には、一瞬であったが受付席に誰かが座っているのを見た気がした。

「どうなっているんです？　なんでこんなに静かなのです？　さっきまでは何人か人がいたのに！？」

「やっぱりそうなのですか？　私も見たような気がするんです。あなたを追うのに無我夢中で少し判らなかつたのですが……」

少女は少しふてくされた様子でクシュウを見る。

ふと二人はさっき自分達が入ってきた入り口の門を眺める。すると扉の隙間からビュオオオオー！と冷たい風が入り込んできた。おかしい。何か判らないが、確かに何かがおかしい。

「申し訳ありません。すこし外の様子を見てきます」
「はっ、はい！　お任せします」

クシュウはゆっくりと少女を降ろす。今度は逃げたりはしなかつた。心配げに入口に向かうクシュウを見詰める。

クシュウは警戒しながら入り口に近づき、中途半端に開けられた扉の取っ手に手をかける。金属製の取っ手は氷のように冷たくなっていた。意を決して扉を開け放つ。

「わあ！？」

クシュウは驚きのあまり、それ以上の言葉が出なかつた。

赤き街は、美しい銀世界と化していた。

ケルティックの街は、本当に唐突な攻撃に、大混乱に陥っていた。
アイスワイバーン
突如出現した氷絶飛竜の氷の息吹に、アイスプレス
街の三割が氷漬けになり、
道中には錯乱して逃げ惑う姿勢で固まった人間の氷像が所狭しに並んでいる。

現在アイスワイバーンに跨る謎の竜騎兵部隊は、王宮の周囲を旋回していた。

王宮は今、塀に沿うような形で発生している、半球状の結界に覆われている。宮殿の近衛隊員達の魔法に生み出されている半透明の緑色の結界が、かろうじて竜騎兵達の攻撃から宮殿を守っていた。

王宮の中で、力を振り絞って結界を張り続ける近衛兵達を見渡しながら、王の護衛をする仲間達が、応援を待っていた。

すると遠方の風景を映し出す魔道具『千里鏡』を監視していた一人の兵士が、王の側にいる隊長に、顔を青くしながら呼びかけた。

「ほ、報告です！」

「どうした！？ ダック部隊はまだ動かないのか！？」

「それが……、既に全滅していました！」

その言葉に隊長の眉が吊り上る。

「そんな馬鹿な！？ もう奴らにやられたというのか！？」

「いえ。それが、竜騎兵が現れる直前に攻撃されたらしいのです。どうやらあらかじめ街の中に敵兵が潜伏していたようで……」

兵士は自分が持っている千里鏡の映像を、その場にいる全員に見せた。

飾り付けの無い質素な鏡の表面には、スケート場へと変貌した人工池の上で、コチコチになって凍死した巨大カルガモの姿が映し出されている。

それを見た全員が、絶望の底へと追い落とされた。

「なっ、何をしとるんだ！？ お前らは近衛隊であろっ！？ さっさと何とかせんか！」

「申し訳ありません。すぐ手を考えますので、なんとか落ち着いて

「くださいませ」

泣き面で近衛兵達を怒鳴りつける国王キース・エルダーを隊長は何とか宥めるが、正直考えたところで打つ手がわいてくるとは思えなかった。

王道ならば隠し通路なりなんなりで、脱出するのだが、生憎この街にも王宮にもそのようなもの存在しない。万事休すである。

王宮の上空を、円を描きながら飛行する竜騎兵は、あまりの手応えの無さに呆れていた。

今でこそ結界で防護しているが、それも長くは続かないであろう。魔力切れで結界が消えたときに、一気にアイスブレスを吹きかけてやれば勝負はつく。

国一つをこうも簡単に落とせてしまうとは、これまでの気苦労は何だったのか。

事前にこの国の王女を押さえ込んでおこうとする動きもあったが、実に無意味な策であった。

やがて王宮を囲う結界が弱まっているのに気がついた。緑色の魔力の膜がどんどん薄くなっていく。

竜騎兵達は一斉攻撃の構えを取り始めた。

その直後であった。

何の前触れも無く、突然に、一騎の竜が撃墜された。

頭部の両横から、血液が混じって桃色になった脳漿と、白い煙が噴き出て空中で拡散する。悲鳴を上げる暇もなく逝ったようだ。

騎乗している本人はもちろん、周りの騎兵達も一瞬何が起こったのか理解できなかった。

息絶えたアイスワイバーンが、空中で身体を踊るように二転三転させながら墜落していく。それは王宮の結界に衝突し、半円球の結

界の上を転がりながら、地面に格好の悪い体制で着地した。

二度目が起きたのはそれと同時だった。

どこからかドギョーン！という音が微かに聞こえたと思ったら、一騎の竜騎兵の身体を、青く発光する何かが、弾丸のごとく凄まじい速さで衝突した。

それはアイスワイバーンと騎兵の二分分の肉体を、紙のようにたやすくぶち抜き、腹に綺麗な風穴を作る。即死した竜騎兵は、ついさっきやられた者と同じように墜落していった。

「て、敵襲っ！」

突然の事態に、竜騎兵達は一斉に飛行方法を変更し、青い光が飛んできたと思われる方向に向き直る。

すると再び魔法攻撃とおぼしき、青い光弾が二発目、三発目と次々と発射された。

それらは空中をホバリングする竜騎兵達を、恐ろしいほどの命中精度で撃ち抜いていく。光弾の速度は物凄く、体長八メートル、体重四トンの巨体ではとても避けられるものではなかった。

そしてもう一つ、撃ち落された竜の身体には、撃たれる直前に必ず三点の小さな赤い光印がどこかしらに当てられていた。だがそのあまりに小さい印に気付くものはいなかった。

「くそ！？ 誰なんだ！？」

発射位置と思われる場所は、王宮の南方ここから七百メートルは離れた大きな建物の屋根だった。距離の所為か敵の姿は見えない。そしてそこはアイスワイバーンのアイスプレスも、騎兵達の魔法も到底届かない場所だった。

最も射程距離にいたとしても、敵に狙いを定めるのかなり難しいであろう。何故なら敵は、原理不明の不思議な力で、その姿を風景

に溶け込ませている透明人間だったからだ。

（一体何者だ！？ エルダーの兵か！？ しかしこれほどの射程・速度でこんな強力な魔法を撃てる魔道士など……、ああっ！）

気がつくとも三人の竜騎兵が有効射程に入ろうと、発射位置に真っ直ぐ突っ込んでいた。実に愚かな判断である。

「馬鹿者！ やめろ！」

竜騎兵の隊長の言葉は、空しくも届かなかった。

恐ろしい狙撃能力を持つ敵に、急速に接近していった三騎は、続けざまに放たれた光弾に、瞬く間に撃ち落されていく。

攻撃は尚も止まず、竜騎兵達は虫のごとくたやすく倒されていく。二十一騎いた竜騎兵隊は今や九騎にまで減っていた。

「退却だ！ 一旦ここから離れ」

このままでは全滅と判断し、隊長が退却命令を叫んだ直後。隊長の頭が青い光と共に、果実のように粉々に砕け散った。

これに恐れ戦いた残りの竜騎兵達は、隊列など無視してバラバラに逃げ去っていった。

図書館の屋根の上に、散らばっていく標的を見据える透明人間が立っていた。彼の左肩の部分からは、何故か薄く白い煙が上がっている。

不意に“キュイーン”と奇妙な音が聞こえると、透明人間は屋根を蹴り上げ、前方の建物へ向かって飛び上がった。

街道を挟んだそこは、六メートルもの距離はあるのだが、彼の脚力はとてつもなく、その距離を難なく乗り越え、無事に着地する。その後も建物の屋上を走り、飛び上がり、道など無視して真っ直ぐ街の中を駆けて行く。

その先には既に結界が消滅している王宮が存在していた。

そしてもう一つ。透明人間のいた屋根の真下には、ガラス窓の向こうから、外の光景を見て呆然としている新任近衛兵と少女が立っていた。

第三話 王宮

「一体何なの！？ 何がどうなっているの！？」

少女は叫んだ。だがそれはクシユウも叫びたい言葉だった。

追いかけてここに明け暮れ、ようやく終わって外を見たら、何と街が氷漬けになっていた。しかも上空には多勢のワイバーンが舞っているではないか。

街が凍った原因は直ぐに判った。ワイバーンが白い息吹を真下の王宮に吹きかけているのだから、彼らが犯人であることは疑いようもない。問題なのは、あのワイバーンが何なのか、であった。

ともかく今外に出るのは危険と考えたクシユウは、扉をがっちり閉めて図書館内部に戻った。中で身を隠そうと行動に出たのだが、少女が外の様子を見ようと、図書館の窓の方に向かっていった。

止めようとした矢先、突如天井のほうからドギョーン！という、銃声とは微妙に違う、奇怪な音が響いてきたのだ。

音は二度、三度と続き、尋常でないもの感じたクシユウは少女と同じく、図書館の大きなガラス窓の方に急いで向かった。

外を見ると、王宮上空を飛んでいたワイバーンが、一匹一匹と次々と墜落しているではないか。そしてそれは上からの形容しがたい音が聞こえる度に、起こっていた。

集中してよく見ると、窓の上から、すなわち図書館の屋上から青い何かが放たれているのが視認できた。そう、ワイバーンを撃墜している者は、自分達のすぐ側にいるのだ。

二人は自分達のすぐ真上にいる、未知の存在に息を呑んだ。詳しく確認したくても、はたして安易に近づいていいものかどうか判らない。敵の敵が味方とは限らないのだ。

やがてワイバーンは数が減っていき、残りは蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていった。

するとクシュウは、緊張が一気に解けた様子で肩を落とした。

「どうやら上にいる奴も行ったみたいですよ」

「え？ 何故判るの？」

少女が首を傾げる。

「こちらの屋根から、向こうの屋根に何か飛び乗ったのが見えました。こちらには気付いていなかったようです……」

「見えた？ 私には何も見えませんでしたよ？」

「はい。実を言うと、私にもはつきりとは見えませんでした。ですが確かに人型の何かが動いていたんです」

クシュウは剣に手をかけ、顔を引き締めて少女に顔を向けた。

「奴が向かった先はおそらく王宮です。何か嫌な予感がするので、今から私は王宮の方に向かいます。あなたはここに隠れていて下さい」

「何を！？ だったら私もいきますよ！？」

「駄目です！ あなたに何かあったら、私がただじゃすみませんよ！ おてんば姫を気取るのもう止めて下さい！」

「ではここが安全だという保証がどこにあるんですか！ あなたが置き去りにしてる間に、私に何かあったら、もっと責められますよ！」

少女の言葉にクシュウは考え込んだ。そして少し間を置いてから深く息を吐いた。

「判りましたよ……。ですが絶対に私から離れなideくさいね」

「了解しました。……後、すみません。新任なのにいきなりこんな大変な目に遭わせてしまって」

「新任で無ければいい、というものでもないと思いますけど？」

クシュウの少し怒気の入った口調に、少女は気まずそうに首を縦に振る。

「それときちんと確認しておきたいんですが、あなたのお名前は？」

少女はしばらく無言だったが、やがて恐る恐るクシュウの方に首を上げた。

「……アンナ・エルダーです」

エルダー王国の王女は、気弱にそう答えた。

王宮に立て籠もっていた者たちは、突然の事態に困惑していた。

平和だったこの街に、突然身元不明の竜騎兵が奇襲してきたかと思ったら、その竜騎兵をこれもまた正体不明の何者かの攻撃に撃退されてしまったのだ。当然のことである。兵士も口々に憶測を言い合っている。

「何なんでしょう隊長。応援が来たのでしょうか？」

「判らんが、まだ油断しない方がいい。この街にあらかじめ潜んで

いたという奴も気になるしな」

王宮の周囲には、既に結界は張られていない。結界を張っていた兵士たちも、既に体力的に限界に達していたからだ。するとまたもや三度目の異変が起こった。

混乱していた兵達のだ真ん中に、何者が降り立ったのだ。どこから飛び降りたのかは判らない。まさかここから少し距離がある塀から、跳んできたとは誰も考えなかった。

突然の闖入者に、兵士達は心臓が止まる程動揺したが、すぐに気を取り直し、闖入者の周りを囲って剣を向ける。

その闖入者はまさに、先程竜騎兵を撃ち落した透明人間であった。透明人間の身体から、バチバチと青い電流が放出されると共に、徐々にその姿が現れてくる。言わずもがな、正体は昨夜の奇怪殺人事件の犯人である、銀の鎧の怪人であった。

「何者だ！ 貴様！」

近くにいたダッチが怪人に対し、全く恐れることなく、訓練で使い慣れた大きな蛮刀を突きつけて叫んだ。

だが怪人は答えない。ただ無言で背中から武器を引き抜いた。それは斧であった。片刃式で、鎧と同じ銀一色の戦斧である。

「くたばれ！」

眼前の怪人を敵と認識したダッチが、素早く踏み込み、蛮刀を振った。蛮刀はダッチの魔法によって強化されており、刀身全体が白く発光している。これに対し怪人も、手持ちの斧を右横から力強く蛮刀に打ち付けた。

ガキイイイイイイン！

強い金属音と共に、ダッチの蛮刀が後方へと飛ぶ。怪人の攻撃はダッチの一撃をいともたやすく弾き返したのだ。

「しまっ！」

怪人はダッチに避ける余裕を与えずに、二撃目を放つ。

一瞬の後に、ダッチの首が、ビンから開け放たれたコルク栓のよう
に宙を舞った。

兵士達にどよめきが走り、冷静な四人の近衛兵が剣を抜き放つ。
刀身は先程のダッチの物とは違い、風の魔力で緑色に光っていた。

「風よ！ 斬り刻め！」

兵達は怪人の方向に一齐に剣を振った。一見ただ空を切っただけ
のように見えた。だが振られた瞬間に、剣筋から強力な風の刃が、
弾丸のように高速で放たれた。

四つの刃は正面から一齐に怪人に向かっていったが、怪人は避け
ようともせず、刃が接触する寸前に右手に抱えた斧をブオン！と豪
快に振るう。

すると四風の刃はカミソリのようにたやすく砕かれ、消滅してし
まった。

怪人は、更に動揺する兵士達に向けて、斧を振り回しながら突進
した。

「何だ！？ お前らは！」

王宮に向かおうとした図書館から出たクシュウとアンナは、その直後に二人の不審な男に道を立ち塞がれた。

二人はどこかの国の兵士のようにであった。全身を重厚な青い甲冑・鉄仮面で身を包み、魔道剣と思しき細身の剣を装備している。そして現在、堂々と図書館前の広場に突っ立っている。

クシュウはこの甲冑に見覚えがあった。

確か父がコレクションしていて、目障りなくらい屋敷中に飾られていた武具の中に、このような甲冑があったはずだ。はたして一体どこの品であったであろうか？

クシュウは何とか記憶を掘り起こそうしたが、その前に二人の男がこちらに剣を向けてきた。そして明らかに敵意のある口調で話しかける。

「その服装。お前は近衛隊の者だな？」

「はい。まだ新入りですけど、それが何か？」

「では我らの同胞を、奇怪な魔法で撃ち落したのはお前らか！？」

おぞましい獣と相対しているかのように怯えた口調で放たれた問いに、クシュウは「はあ！？」と素っ頓狂な声を上げた。

“同胞”というのはあの竜騎兵のことであろうか？ だとしたらとんだ勘違いだ。魔法の腕にも自身のあるクシュウであったが、一発で竜を撃ち落せるような魔法を、あんな連続して撃つことなど不可能だ。

「ちっ、違う！」

「ならばあれは何だ！ エルダーの秘密兵器か！」

「知らねえよ！ こっちが聞きたいくらいだ！ そもそもあんたたちは何者だ！」

途端、二人の男は押し黙る。

すると突きつけられた剣が白く輝き出した。そして白い冷気が放たれ、小さな竜巻のように細長い剣の周りを渦巻く。

魔法を撃つ気だ！　そう判断した瞬間、クシュウは素早く側にいるアンナを掴み上げ、右方に大きく飛び上がった。

男達の剣から放たれた氷の魔法が、そこを通り抜け、後方の図書館の凍りついた扉に、更に氷を張らせた。

「離れて！」

「はっ、はい！」

着地後、アンナがその場を離れると、クシュウは即座に抜刀した。剣の刃全体が風の魔力で強化されており、緑色に発光している。

男達が更に魔法を撃つと、クシュウも剣に力を込めて、魔法を放った。クシュウの前方に風の壁が発生し、二本の冷気の矢をたやすく弾き返す。その後すぐにクシュウは剣を構え直し、男達に突進した。

真正面から接近してくるクシュウに、三撃目の魔法攻撃が放たれた。普通なら直撃であろうが、クシュウは剣を風車のように回転させながら振り回し、二つの氷の魔法を受け止めた。冷気の矢は撥ねられ、煙のように散乱し、かき消される。

これに動揺した男達は、直に剣で斬り付けようとしたが遅かった。懐に到着したクシュウは一人の男の腹を力一杯斬り付けた。

同時にもう一人の男が仕掛けてきた突きを、身体を大きく屈めてかわす。そしてその姿勢のまま、剣を男の心臓目掛けてやや上向きの方角に刺突した。

渾身の力と最大出力の魔力で繰り出された緑光の剣が、青い甲冑をぶち抜き、心臓に深々と食い込む。

男は「グガッ！」と蛙のような小さな断末魔を上げる。

クシュウは小さく息を吐くと、剣を男の腹から引き抜いた。ズルッ！と嫌な感触を感じた。刺したときも似たような感触が合ったはずだが、必死だったせいかはつきりと思いつけない。

同時に男は人形のように、クシュウの左横に力なく俯けに倒れた。近くの木の裏に、下手なやり方で隠れていたアンナは、今のクシュウの姿に呆気にとられていた。木から離れ、クシュウに近寄っていく。

「……強いんですね」

「ええ、鍛えてますから」

生まれて初めて人の命を奪った事に、強い嫌悪感を感じながら、クシュウは苦笑いをして答えた。

「！？ アンナ様離れて！」

何処からか殺気を感じ取ったクシュウは、再びアンナに避難を促す。

前方を見ると、図書館の正門の真ん中に、先程の謎の兵士と同じ甲冑を来た人物が三人立っていた。どうやら他にも仲間がいて、今こちらに到着したようだ。

謎の兵士達は次々と剣を抜き、クシュウに向けて踏み込んだ。これにクシュウも剣を構え直す。

「上等だ！ 行くぞ！」

「撃て、撃てえ！」

「やめろ！　でたらめに撃つな！　同士討ちになるぞ！」

「一斉にかかれ！　……ぎゃああああああ！」

数時間前まで美しく整えられた王宮の庭園は、今や血で染まった死闘の場と化していた。

敵兵は一人。こちらの手勢は最初三百二十人であった。だがその数はその一人の敵兵によって半数近くが倒されていた。

敵兵たる怪人は、大柄な図体に似合わぬ軽快な動きで、近衛兵や衛兵達を次々と斧で切り裂いた。魔法も銃弾も全てかわされるか、斧で受け止められる。敵に近接し魔法剣で直接攻撃しようとしても、斧でたやすく弾かれるか、叩き折られた。

敵が人間でないのは明らかであったが、それでもこの身体能力はおぞましいものであった。

「皆一旦引け！」

近衛隊長の言葉に、既に逃げ腰であった兵士達が、怖い犬から逃げ出す子供のように、一斉に怪人から距離を取る。

同時に近衛隊長は、己の自慢の槍を地面に向けて勢いよく突き刺した。一連の行動に怪人は困惑したように動きを止め、近衛隊長の方に顔を向ける。

槍が深々と土に潜り、隊長が独り言のように何事か呟いた瞬間、一瞬地面が揺れた。身体がグラグラと小刻みに震えるような奇妙な感覚を、その場に居る全員が感じ取った。

地震か？　と思われた時、怪人の立っている地面が爆発した。正確には怪人の立っている地点から直径十メートルの範囲の地面が瞬時に砕け、小麦粉のように一斉に宙を舞い上がったのだ。

「埋まれえっ！」

怪人の身体は大量の土と共に、空中に投げ出された後、重力に導かれて再度地面に戻っていく。そして怪人よりも上を飛んでいた細かい土が、上からドシャドシャと積み重なり、怪人は あっという間に生き埋めになった。

「皆攻撃態勢に戻れ！ 奴が出てきた瞬間に一気に仕留める！」

近衛隊長の土魔法で、一瞬は捕らえたが、あれで死ぬような相手とは思えない。

近衛兵たちは敵が埋没した地点に向けて構えを取る。手錬れの近衛兵は、剣に魔法を放つための力を溜め、衛兵達は小銃を構えて、怪人の這い上がる瞬間を待った。

だが予想外なことに怪人よりも先に、土から飛び出すものがあった。

「ぎゃあ！」

目標地点の土が僅かに弾けたと同じく、一人の近衛兵が、何かに撃たれた。

左胸に啄木鳥の巣のような綺麗な丸い穴が開き、傷口付近が黒く焦げて煙が浮いてきている。近衛兵は何が起こったのか判らぬまま、グボツ！ と血を吐き倒れた。

「なっ、何だ！」

攻撃してきた者の正体は判っているのだが、隊長を思わずそう言ってしまった。

敵を生き埋めにした地面から、青い光弾が土をえぐって放たれ、魔

法を構えていた一人の近衛兵に着弾したのだ。

攻撃はそれだけでは止まず、地中から次から次へと光弾が飛び出る。

正確に狙って発射されているわけではないようであったが、敵のいる位置は大体判っているらしく、横に並んで密集し攻撃準備をしていた兵達に高確率で当たっていた。八発のうち六発が命中し、うち二発が前後に並んでいた衛兵二人分を貫いた。

その光弾は、先程竜騎兵達を追い払った攻撃と同じものであったのだが、錯乱した兵士達にそれに気付くものは少なかった。

「全員地面に伏せろ！」

近衛隊長は焦りながらも、兵達にそう指示を出した。

光弾は地中から地上へ、上向きに放たれている。それならば射高を下げれば命中しないはずだと判断したからだ。兵の半数が命令に従い地に伏せ、残りは聞こえなかったのか、より遠くに一目散に逃げ出す。

だがそれが敵に対し、大きな隙を与えた。

突如、敵が埋められた地面の土が、少し盛り上がったかと思うと、いきなり怪人の上半身が地上に現れた。舞い上げられた土の雨が、周囲に一斉に降り注ぐ。

そしてウサギのように飛び跳ねて、緩くなっていない隣の地面に、屋根から飛び降りた猫のようにスタツ！と降り立った。足元はまだ相当な量の土に埋まっていたのだが、どれほどの力があれば土の重量を乗り越えて、あれほどの跳躍が出来るというのであるのか？

これに驚いた兵達が、攻撃を加えようと立ち上がる。だがその一瞬の隙に、怪人は馬の足に匹敵するほどの走力で、兵達の目前に接近していた。

「うわあああああつ！」

兵達はもはや我武者羅だった。無我夢中で怪人に剣で攻撃を加える。だがむなしくも、速度も力も圧倒的に勝る怪人の斧に、たやすく薙ぎ払われていった。

「このっ！ 化け物めえっ！」

近衛隊長が暴れまわる怪人に向けて、槍を構えて突撃した。

槍の一撃は背後から怪人に直撃しようとしたが、気配に気付いていたのか、怪人は身体を右に大きく回転させて、槍の刺突を交わす。だがそれだけは終わらず、怪人の斧はその巨体と共に、弧を描くように回転し、振り返りざま近衛隊長の首を叩き切った。

近衛隊長の首がダツチと同じようにスポン！ と空を飛んだ。

「たっ、隊長！ うわあああつ！ もうだめだ！」

隊長の死と共に、兵達は泣き叫びながら逃げ出した。

見逃す気は無いようで、怪人は背を向けて逃げ出す兵達に向けて、光弾を放った。

怪人の左肩に装着されている銀色の短筒から、奇妙な発射音と共にその青い光弾が放たれる。怪人の左肩に付けられていた銃のような物体は、本当に銃だったのだ。

その銀色の銃は、生き物のように左右に回転して動き、広い庭園の中を散り散りになって逃げ出していく兵達を次々と射殺していく。また怪人の仮面の左目の上の辺りから、蜘蛛の三眼のような赤い点光が放たれており、攻撃が当たる直前の兵に、必ず指しつけられていたが、その赤い光の意味は誰にも判らなかった。

庭園は戦場から、殺戮の場へと変わり、阿鼻叫喚と化した。

「なっ！ 何だあ！」

クシユウはあまりに予想外な光景に、今日何度目かの驚愕を受けた。

さっき自分がいた王宮の裏門はすぐ目の前にある。その裏門は現在大きく開かれて、何人もの衛兵がそこからワラワラと飛び出し、必死になって逃げ出していた。

「ちよつと！ 何があつたんですか！」

「お前も早く逃げろ！ 殺されるぞ！」

クシユウは一人の衛兵の肩をつかんで問うものの、衛兵はそれだけ言つてクシユウの手を振りほどこうとする。

「待つて！ 陛下は！？ 陛下は無事なんですか！？」

クシユウは職務上、自分が一番安否を気遣うべき人物のこと聞く。

「知らねえよ！ 離せ！」

衛兵はクシユウの手を引き剥がし、再び街の中へ走り去つていった。

（どういうことだ！？ 敵はさっき皆逃げていったのに！？ さっき屋根を飛び越えていった奴？ あれは味方じゃなかったのか？）

あまりに多くの疑問にクシュウはしばし身体を固めてしまった。
だが少しして、ふと気がついた。

「あああ！ アンナ姫！」

一緒にいたアンナは、周囲を見渡しても既にどこにもいなかった。

第四話 輕鴨

「あああああ！ たっ、助けてくれ……」

国王キース・エルダーは仰向けに座り込んで硬直していた。

目の前には、さっきまで自分の兵達を殺戮していた怪人が立っている。返り血で元の色が判らなくなるくらい赤くなった怪人は、無防備の国王をその大柄な体躯で見下ろしていた。

国王の恐怖は既に絶頂を越えている。この怪人は自分の命を狙って来たに違いない。そう判っていても、逃げ出したくても腰が抜けて全く動けない。

「お父様！」

突如対峙する二人の真横から幼い声が聞こえてきた。

「ア、アンナ！」

唐突に現れたアンナの姿に国王は目を丸くする。国王の想像を超える緊急事態に、王宮内に姿を見なかった己の娘の存在をすっかり忘れていた。

だがアンナはそれ以上の言葉を言わなかった。二百人を超える兵の死体と、眼前の血みどろの怪人の姿に恐れおののき、固まってしまったからだ。ただかすかに「ああ……」と震える声を上げるだけであつた。

怪人は当然声に反応して、少女の方に振り向いていた。

『もう駄目だ』と二人が思った瞬間、怪人はなんともおかしな行動を取った。

少女に顔を向けていた怪人は、今まで手に持っていた斧を背に差し戻し、後ろに身を回したのだ。丁度アンナを左横に、国王に背を向けた姿勢である。

怪人は二人には何の興味もないといった様子で、先程自分が兵達と戦っていた地点、兵の死体が密集して転がっている場所に、急ぐ様子も無く足を進めていった。この意外な行動に二人は呆気に取られてしまった。

（何なんだ？ 私の命を奪いに来たのではないのか？ ……んっ？
そういえば、こいつのこの鎧姿、どこかで見たような……？）

少し冷静さを取り戻した国王は、前方で大量の死体をゆっくり見渡している怪人を、注意深く見ながら、何とか音を立てずに立ち上がろうとする。

ふいに視界に、ある長い物体が目に入った。

自分のいる位置から少し右手前に、一丁の小銃が投げ捨てられていた。小銃の三メートル前方には、怪人の光弾で頭を吹き飛ばされた兵の死体が、うつ伏せに倒れている。倒れ込んだ拍子に腕から離れ、こちらに転がってきたようだ。

「アンナ様！」

再び来訪者が現れた。アンナの真後ろに彼女を追ってきたクシュウが剣を片手に走ってくる。

声が放たれた途端、怪人は再度アンナの方を振り向いた。今度はアンナとは違い、低い唸り声を上げ、左肩の銃が真つ直ぐクシュウの方向に動く。同時に仮面から三点の赤く小さい光が放たれた。

赤い光は背の低いアンナの頭の上を通り、クシュウの顔面、目と目の間に照射された。危機を感じたクシュウは、咄嗟に滑り込むようにして、うつ伏せに体勢を変え、身を低くした。

その瞬間、怪人の銃から光弾が放たれた。

光弾はアンナの頭上と、姿勢を低くしたクシユウの真上をすり抜け、真後ろにある裏門の横の柱に命中する。

間一髪であった。ほんの一瞬でも反応が遅れていたら、クシユウの顔面は光弾によって粉々になっていたであろう。

二人の距離のど真ん中に立っていたアンナは、今の攻撃のショットの所為か、失神してフワリと身体をふらつかせ、その場で仰向けに倒れる。

クシユウは身を起こし、怪人の次なる攻撃に身構えた。

すると怪人の仮面から発せられていた赤い光が消えた。そして右腕の手甲から、ジャギン！という音と共に、二本の鉤爪が一気に伸びる。銃は使わず、接近戦で挑むつもりようだ。

クシユウは真ん中で倒れているアンナに危険を及ばないようにと考え、敵がかかってくる前に、今の位置から真横に移動しようとする。

その時だった。ドオン！と怪人の使っている物とは違う銃声が鳴った。

「陛下！？」

クシユウは目を丸くした。

クシユウの見える位置から、怪人の右横に、国王が銃を構えて立っていたのだ。

その銃口からは白煙が吹いており、国王は怪人が自分に視線を外したすきに、発砲したのだと判った。

弾丸は見事に怪人に命中していた。運よく鎧が着いていない左横の腹部に当たり、怪人は一瞬怯む。この結果に国王は少しながら歓喜の表情を浮かべた。

「やつ、やったか!？」

だがそれは直ぐ絶望に変貌した。

実弾をまともに受けた筈の怪人だが、それで倒れることはなく、怒りの籠った唸り声を上げて、国王の方に振り返った。

左腹からは、明らかに人間のものとは違う、緑色に発光する血液が微量ながらも流れていた。だがそれだけで、大した痛手は受けていないようだ。

慌てた国王は二発目を撃とうと、銃の用心鉄を引く。同じくクシユウも魔力を込めた剣を怪人目掛けて大きく振る。だがそれよりも怪人の発砲の方が速かった。

光弾が国王に向けて撃たれ、国王は胸を貫かれ、ゴゲツ! と蛙のような声を上げて絶命する。それと同時に、クシユウが撃った魔法の風の刃が、怪人に命中した。

今までの近衛兵が使っていた技とは、威力が倍近くはある魔法攻撃に、怪人の巨体が弾けるように吹き飛んだ。

「陛下! くそう!」

クシユウは悔しさで胸を強く痛めた。

撃たれ飛んだ怪人は、庭園の池に落下した。先刻の戦闘が元で、兵の死体が浮かび、ワインのように薄っすらと赤くなった池の水が、噴水のように大量の水しぶきを舞い上げる。

「アンナ様!」

クシユウはアンナに駆け寄り、名を叫んだ。そしてまだ気絶しているアンナを抱えて、裏門へと駆け出す。

（まさかあれで死にはしないだろうな。今は何とか逃げ延びないと！）

クシュウはこの王宮で、いやこの街全体で何が起こっていて、何が本当の敵なのか、未だに判らなかった。ただ一つ判るのは、このケルティックが何者かの手によって陥落したということだけである。ただひたすらクシュウは街中を走りぬけた。向かう先は一つ。ケルティックの南方の巨大人工池、ジャイアントダックの大型飼育場である。

「なっ、何だ！？　これは！？」

クシュウが立ち去った後、すぐに九人の青甲冑の兵士達が庭園に走りこんできた。

当然のことながら、彼らは園内の事態に愕然とした。氷竜騎兵部隊が討ち取れなかった、王宮に籠る敵兵たちは、無残にも惨殺され、変わりに見たこともない銀色の甲冑を着た人外の兵士が、池の淵に立っているのだ。

全身に付着していた血は、池の水で大分洗い流されたようで、かなり薄くなっていた。だがまだ落ちていない血色が、この惨事の犯人はこの者だと主張していた。

「お前がやったのか？　何者だ？　我々の味方か！？」

肯定の言葉は無かった。代わりに出たのは銀の銃による発砲であ

った。

瞬時に一人の兵の胸が、頑丈な甲冑もろとも光弾にたやすく貫かれる。これに対し残りの兵達が、次々と氷の魔法を怪人に放った。

怪人はこれを左横に走ってかわす。兵達の攻撃は動揺しているためか、各々の攻撃は統率が無く、滅茶苦茶に放たれていた。

怪人は真っ直ぐ走ったその先、眼前には高い塀があった。

兵達は「追い詰めた！」と一瞬勝機を感じ取ったが、だが怪人は助走をつけた状態で、大きく跳び上がる。そして六メートルもの高さの塀を飛び越え、塀の上に軽々と着地して見せた。

兵達は構わず魔法を撃った。怪人は塀の上を走り抜けながら、次々と銀の銃を撃つ。赤い光印を差した銃の命中率はとても正確で、一人、また一人と兵達が倒されていった。

兵達は恐怖で半ば発狂した状態で、魔法を撃ち続けたが、遂に最後の一人が光弾に倒れた。

怪人は動きを止め、塀の上に立ったまま、背に差した斧を抜いた。そして何となく誇らしげ様子で斧を天空に向けて見せる。

すると怪人は大きく力を溜め、グオオオオオオオオ！ と町全体に響く勝利の雄叫びを上げた。

「なっ、何てこった……」

気絶したアンナを抱いたまま、クシュウは呆然と立っていた。

そこはこの国の航空力の要である巨大水鳥、ジャイアントダックの大型飼育場があった場所である。

クシュウは数年前にも両親や従者達と一緒に、この王都に來たことがあった。その時にこの町の名物とも言えるこの場所を見学したのだ。

その時の記憶では、そこには見渡す限りの巨大な人口池が存在していた。いや人口湖と言ってもいいかもしれない。

岸は全て石造りで固められ、陸地にはジャイアントダックを管理する為の施設が立ち並んでいる。そして池の中には、千羽を超えるジャイアントダックがプカプカと浮いているのだ。

池にはいくつもの柵が張られており、ダック達は軍用・運輸用等の様々な用途に合わせて区画されて生活している。

彼らは普段は何もせず浮いているか、柵の中の限られた空間を適当に泳いでいるだけであった。だが餌の時間になると、一斉に岸辺の飼育員の所に集まる。我先にと撒かれる餌を求めて、鯉の群れのような勢いで押し合い、飼育員に詰め寄るのだ。

その時に一遍に放たれる無数の鳴き声は、耳を劈く程の凄まじい音量で、この様子を見学していた時の記憶は、幼かったクシュウにとっては悪夢のような思い出であった。

また池の水面には、区画ごとに大きなダック用の牧舎が建てられていた。それらは皆、池の底から柱を組み上げ建てられており、一見すると建物が水に浮いているようにも見える。

クシュウは見なかったのだが、ダック達は夜間寝るときや、雨天の日にはこの牧舎の中に引き籠もるのだそうだ。もちろん牧舎の中も床は無く水面で、ダック達は仕事と訓練のとき意外は、ほとんど水上で生活しているのだ。

数百年前から、全く変わらずにこの形でダック達を営んできた飼育場は、たった今歴史上例を見ない大改装が施されていた。

飼育場の池の水面は見事に凍り付き、水上には無数の大きな水鳥

の氷像が建てられていた。もちろんそれが、本当は氷像等では無い事は判りきっている。

おそらく先程の氷使いの魔道士達が、魔法で池をダック達もろとも氷漬けにしたのだろう。何ということか、敵は先んじてこの国の制空権を破壊していたのだ。

（くそ！ こうなったら足で逃げるしかないのか！）

クシュウは焦った。ダックなら実家でも何羽か飼われており、幼い頃からダックに触れて暮らしていたクシュウは、ダックの騎乗にはかなりの自信があつた。

だからこそ最優先に、この場所に駆け込んだのだが、これではどうしようもない。

まだ街の中や外に、敵兵が残っている危険を承知で地を走るしかないのか？ そう諦め気味に考えた時、不意に小さなダックの鳴き声が聞こえた。

一般人には絶対に聞こえないような遠い声であつたのだが、常人以上に鍛え上げられたクシュウの聴覚は、確かにその鳴き声を捉えていた。

「えっ！？」

ダックはもう全滅したものだと思ひ込んでいたクシュウは、驚きのあまりアンナをずり落としそうになった。だが何とか持ちこたえ、慌ててアンナの容態を見ようと、その幼い顔を覗き込んだ。

まだ目を覚ましていないものの、少女の身体は寒さで震えていた。街や池がこれほどの氷に覆われたのだから当然である。

クシュウは、自分の体温がしっかりと伝わるようにアンナを強く抱きしめ、鳴き声の聞こえた方向に向かった。

池の岸边を歩き、周囲を注意深く観察する。やがて期待していたものは見つかった。

警備員の寄宿舍である、岸に沿うような形の横に長い建物があった。その建物の、池側とは反対方向の裏の壁に、一羽のダックがいた。

よく見るとまだ若いダックである。着けられている鞍と首輪の色を見ると、まだ仕事を与えられる年代でない幼体であるようだ。

壁に寄りかかってうずくまり、猫のように寒さに震えて動かずにいる。

何故こんな所にダックがいるのか？ 理由は大体見当はつく。大方管理員が目を話した隙に池から逃げ出したのだろう。飼育場から逃げ出したダックが、街の中に現れて住民を驚かせる事件は大昔からよくある話である。

池から離れた間に街が襲撃され、どうすればいいか判らず、ずっとここに縮こまっていた、といった所であろうか？

ダックはクシュウの存在に気付いていたが、特に怖がる様子は見せず、何かを訴えるかのような目で、ただじっと二人を見詰めていた。

暴れる様子は無いと判断したクシュウは、そっと近寄って、ダックの首に巻かれた白い首輪に手をかけた。

「頼むぞ……。お前だけが頼みの綱なんだ」

ダックを脅かさないように、丁寧にゆっくりと首輪を外す。

その途端、今までの硬直振りが嘘のように、ダックは立ち上がり、翼を大きく広げ、力強く羽ばたかせた。

ダックの首輪には拘束用の魔法がかけられており、それがダックの飛行能力を抑え込んでいた。もちろんダックが街の外まで逃げ出さないための処置である。

ダックはクシュウに首を向けて、グエツ！と小さく鳴くと、白い鞍が着いた背中をクシュウ達に向けた。乗せてくれるようだ。

「ありがとう。助かったぞ」

クシュウは先ずアンナを前に乗せた。その後で自身が乗り込み、アンナの身体を自分とダックの首の間に挟みこむ形で手綱を掴んだ。

「行くぞ！」

手綱を大きく引つ張ると、ダックは大きな鳴き声を上げ、翼をバタつかせながら駆け出す。ダックの強靱な脚力で助走をつけ、一定の距離を走ると、一気に地面を蹴った。

すると人間二人分の体重を背負ったダックの巨体が、宙に浮いた。大きく羽ばたかれた翼が風を生み、ダックは空へと飛び立った。

「やった！ 飛んだ！」

まだ完全に成熟していないとはいえ、このダックは騎乗するのに十分な飛行能力を持っており、クシュウは大きく歓喜した。だが……

（どこへ逃げればいいんだろう？）

クシュウは街から脱出した、その先を全く考えていなかった。

そもそも敵が何者で、どの範囲にまで敵の手が及んでいるのかも、さっぱり判らない。下手な場所に行つて、敵が待ち伏せしていたら、たまったものじゃない。

こちらは一国の王女を抱えてしまっているのだ。敵が自分達を追ってくる可能性は充分ある。

（とりあえず実家に戻るか……。父さんならあいつらが何か判るかも）

そう思い立ち、クシユウは後ろを向き、地上を眺める。

自分達はたつた今、街の城壁を飛び越えたようで、上空からは小さく見える街の建物が徐々に遠のいていた。

クシユウは故郷に向かうために、手綱を引き、ダツクの飛ぶ方向を変える。すると真正面の広い空の中に、二つの点が見えた。

大分遠方にあるようで、こちらからは虫のように小さく見える。クシユウは集中して、遠方にあるそれを注意深く見た。

「あれは!？」

徐々にこちらに接近するそれは、二頭のアイスワイバーンだった。白い大きな身体と翼が、この距離からでも見える。背にははつきりとは見えないが、人が乗っているのが確認できた。

どう考えても先程の青い甲冑の兵達の仲間である。さっき逃げた竜騎兵がまた戻ってきたのか、後続の兵が追いついてきたのかは判らないが、敵に違いない。

「うおおおお！」

クシユウは急いで手綱を大きく右に引き、飛行方角を百八十度変えようとする。あまりに強く引つ張ったせいで、ダツクが小さい悲鳴を上げたが、何とか真後ろに向きを変えることが出来た。

「悪い！でも今はとにかく急いで飛んでくれ！このままじゃやられる！」

ダツクは力強い鳴き声を上げ、ぐんぐん速度を上げていった。ア

イスワイバーンとダックの異種族競争が始まった。

だがダックの懸命な羽ばたきにも関わらず、相手との距離はどんどん縮まっていく。もう既に敵の青い甲冑がはっきり見える距離にまで、敵は接近していた。

飛行速度はダックよりもワイバーンの方が遥かに速い。始めから勝ち目の無い競争であった。

だからといって逃げるのをやめて、戦って勝つことは難しいだろう。ダックにはワイバーンのような攻撃に適した鋭い爪も無ければ、ブレスのような特殊な技も無い。しかもこちらは一騎で、相手は二騎だ。戦う、という選択肢は賢明ではないだろう。

（だったらー！）

後ろのイスワイバーンが大きく口を開け、騎乗している竜騎兵が魔道剣の切っ先をこちらに向けた。ブレスと魔法の同時攻撃を仕掛ける気だ。

だがその前に、クシュウが跨るダックは思いもよらない動きをとった。

飛ぶ向きを下に向け、地上へ突進していったのだ。魚を狙って空から水面に突入するカワセミのように、一直線に地上、大木が生い茂る森の中に突っ込んでいった。

竜騎兵は慌てて、突っ込んだ方向の森に攻撃を放った。四連の凍てつく白い矢が数本の大木を一瞬のうちに凍りつかせる。

森の中に潜り込んだダックは無事着地していて、森の中を走っていた。その速さたるや軍馬にも負けない程である。

ただ速いだけではない。無数の大木の間を機敏に潜り抜け、森の中に転がっている大きな石や倒木に道筋を邪魔されると、ダックは軽く跳躍し、それらの障害物を難なく飛び越えて見せたのだ。

ジャイアントダックがワイバーン等の竜族に勝る点、それは空中

だけでなく地上・水上も高速かつ俊敏に移動できることである。

先程敵が攻撃してきたようだが、光を遮り地上を薄暗くしてしまうほどに生い茂った木々の葉や枝が、上手い具合に盾になってくれたようだ。この様子だと自分達の姿も、敵には見えていないのかもしれない。

クシュウは自分達の動きを追ってこれないようにするため、走る方角を少し変えた。

「上手くいきそうだ！ 何としても逃げ延びるぞ！」

ダックは相槌を打つように小さく喉を鳴らし、暗い広葉樹の森の中をひたすら駆け抜けた。

すると今度は竜騎兵達がとんでもない行動に出た。先程ダックがそうしたように、竜騎兵もまた森の中に突っ込んだのだ。

上空からだ敵が木々の枝葉に隠れて見えないので、直接森の中に入って追撃しようという判断だった。

だがダックを遥かに超えるアイスワイバーンの巨体は、間抜けにも森の木に激突してしまった。

太い幹に顔面からぶち当たり、アイスワイバーンは猟銃に仕留められた鳥のように、地面に転がり落ちる。そしてここからは薄っすらとしか見えない太陽に向かって、死んだ蜥蜴のように白い腹を見せて気絶してしまった。

騎兵はそのアイスワイバーンの背に、格好悪い姿勢で下敷きにされることとなった。もう一騎の方は、反動が原因で、不運にも二度も大木に叩きつけられる。

見事に自滅した竜騎兵達に気付かず、クシュウたちはとにかく全力で逃げていった。

第五話 異世界

エルダー王国は制圧された。

突如現れた竜騎兵の部隊は、ケルティックだけでなくエルダーの各主要都市に現れ、その氷の技で、瞬く間に凍りつかせ、去っていったのだ。

敵の正体は翌日判った。竜騎兵の所属国家は“ウェイランド王国”である。

エルダーの北方にある隣国で、ウェイランドとほぼ同規模の領土を持つ国であるが、過去の戦争や地形の影響もあって、もう六十年も交流が無い国であった。それが突然エルダーを襲撃したのだ。

あまりに唐突な出来事に国中が騒然とした。更に数日後にエルダー領内に、約七千人のウェイランドの大部隊が押し寄せてきた。

これだけの人員を、長い山脈に隔てられた国境をどうやって通り抜けたのかは、全くの謎であった。だが既に竜騎兵に壊滅的な被害を受けた各諸侯は、勝ち目が無いと悟り、次々とウェイランドに降伏していった。

「なんということだ……」

王都ケルティック。その街のかつて王宮の庭園だったその場所で、他の兵達とは異なり、金色の着色が細部に施された、青い甲冑を着ている一人のウェイランドの将校が驚愕の声を上げた。

その後ろに居並ぶ兵達も同じ感想のようで、一つの言葉も出せずにいる。

一国を制圧するためには、もちろん王都を抑える必要がある。ウエイランド軍はエルダーの各領地に兵を送り、ついさっき中心部隊である彼らがケルティックに到着した所であった。

彼らがそこで見たもの。それは十数騎にもおよぶ墜落した自国所有のワイバーンの死体。あちこちの建物の中に無残にも吊り下げられた、生皮を剥がされた味方の兵の死体。そして眼前に広がる大量のエルダー・ウエイランド両軍の死体が横たわる光景であった。

「王都を落とすのには成功したが……。まさかこちら側にもこれだけの被害が出るとは……。やはりもう少し慎重に作戦を練るべきであったのだろうか？」

ここには竜騎兵の他に、潜入部隊として、三十六人の精鋭部隊が入り込んでいた。だが彼らはほぼ全滅したようである。牛豚のような扱いで吊るされた血みどろの亡骸が、明確にそれを物語っていた。将校が嘆く中、傍らにいた彼と同じ鎧を着ているもう一人の将校が、物憂げな表情を見せていた。金髪で三十代ぐらいの若い将校である。

「ブレイン様。本当にこれはエルダーの者たちがやったのでしょうか？」

「どういう意味だ？」

ブレインと呼ばれた年配の将校は、顔をしかめる。

「ここで両軍戦闘を行って、痛み分けになったと考えるには……。死体の倒れ方や傷跡があまりに不自然です。それにあの皮を剥かれた死体。何十年も戦争を体験していない国の兵に、あれほど猟奇的

なことができるものでしょうか？　そもそもあそこまでの目的は何でしょう？」

「では誰がやったというのだね！？　我々以外にも、この国に攻め寄せてきた者がいるとも言うのか！」

「判りません。そのあたりも念入りに調査が必要でしょう」

ブレインはフンと鼻を鳴らすと、後ろにいる兵達に指示を出した。

「これより王宮に入り、制圧本部を建てる！　その前にお前ら、この屍共を片付けておけ！」

王都ケルティックより、北方に存在する山の中に“ベティ”という村があった。養蜂を行っている小さいながらも豊かな村である。村内には木造の建物が大小まばらに立ち並び、村から少し外れた草原には、沢山の蜜蜂の巣箱がお互い間隔を開けながら、小さな村のように置かれていた。

そんな戦争とは無縁なのどかな村の宿屋に、珍しい客人が泊まっていた。

「アンナ様、朝食です。入ってよろしいですか？」

「はい、お入り下さい」

早朝。宿の中の二階の客室の前で、クシユウはトントンと扉を叩いて呼びかけ、中から弱々しい少女の声で返事が成される。クシユ

ウは扉を開けると、そこにはアンナがベッドに腰掛けていた。

身なりは王族だとばれないように、一般人用の安物の布服を着ている。庶民向けにしても、年頃の娘が着る服にしては粗末なものであったが、今はどうしようもない。

ちなみにクシュウも、王都に来る前に来ていたものと、ほぼ変わらないデザインの服を着ていた。

あの日、かつて自分の住まいであった王宮の庭園で、おびただしい兵の死体と、返り血で真っ赤になった異形の怪人兵の姿にショックを受けたばかりか、後に父親が殺されたことを知ったアンナは、ここ数日この宿の中で塞ぎこんでいたのだ。

食事はクシュウが部屋まで運んでいる。今日も片手に階下の食堂から持ってきた朝食を置いた盆を掴んでいた。

「申し訳ありません。今日からはきちんと食堂に参りますので……」
「いつ、いえ大丈夫です。アンナ様もあまり無理をなさらないように」

アンナは申し訳無さそうにクシュウに、頭を下げるアンナにクシュウは困惑して答える。

一応身分を飾らない良い人柄のようであることは、ここ数日一緒に過ごして充分わかつているのだが、それでもやはり動揺するものだ。

「私これからどうすればいいんでしょう？」

クシュウが部屋の中にある小さい机の上に朝食を置いた時、今になって初めてアンナが、現在自分を取り巻く核心的な問題を口にした。

クシュウは言葉に詰まった。何しろ僅か数日で、国そのものを奪われたのだ。元々国を治めていた王族を敵が丁重に扱ってくれると

は思えない。

頼りにしていた実家も、もはや当てにならない。何しろ父も含めたエルダー全ての諸侯が、ウェイランドの軍門に下ったのだから。もちろんこういう状況の打開策など軍学校でも習ったことはない。

そして何より問題なのは、今自分達がいる村がウェイランドとの国境付近にあるということだ。あの時方角など全く考えずに、でたらめに逃げ回ったせいか、気がついたらこんな所にいた。

幸い村に敵兵は駐屯していなかったが、いつアンナを見つけ出されるか判らない緊迫した日々を送る羽目になった。

王都に着く前日のことといい、自分は道を間違いやすい人間のようだ。最もあの時は敵がウェイランドだとは、まだ知らなかったのだが……

「やはりウェイランドに投降したほうが……」

「駄目です！」

クシュウは声を張り上げた。アンナがビクツ！と身体を震わせ驚く。これに慌ててクシュウは謝罪した。

何がそんなに駄目なのか。それはアンナの身を案じているというより、やはり自身の個人的なプライドなのだろう。今日の前にいる追い詰められた少女を敵に引き渡したりしたら、永久的な罪悪感を抱えて生きることになる。

それにクシュウには、ウェイランド以上に気になるものがあつた。

「それに、あの異形の暗殺者の正体も気がかりです。少なくともウェイランド側の者ではないようでした。もしウェイランドがあなたを生かしたとしても、奴があなたの命を狙ってくるかもしれせん」
「それはありません」

アンナは確信を込めた口調できっぱりと言いつつ放った。これにクシユウは首を傾げた。

「私が王宮に入った時、あの人は私に何もしてませんでした。もちろん父様にも。最初から私達なんて眼中に無いといった感じで、とてもエルダー家を狙ってきた暗殺者とは思えません」

さっきの物憂げな表情は大分薄れ、テキパキとした口調でアンナは喋り出す。

でも陛下は、と言いつつになつて、クシユウは慌てて口をつぐんだ。父を失った娘にこのことを触れるのは良くないだろう。

それに思い返してみれば、あの怪人が陛下を殺したのは、陛下が怪人に向けて発砲した後だった。確かにあんなことをされれば、殺す気が無かったとしても怒るであろう。

怪人はそれ以前にも、ウェイランドの竜騎兵達を撃墜している。もはや敵味方お構いなしだ。だが陛下やアンナ姫に対しては、相手側から攻撃を仕掛けられるまでは何もしなかった。

この奇怪な行動は何を意味するのである？ 殺人狂者とも違うのであるのか？

しばし考え込んでみると、目の前のアンナが自分を真顔で見詰めているのに気がついた。

「でっ、ではご朝食はこちらに置いておきますので、それでは失礼しました！」

アンナが「あっ！」と何か言いたげな声を上げたが、構わずクシユウは部屋を飛び出した。

クシュウは階下にいる宿の従業員に軽い挨拶を交わし、宿の外に出た。

外には澄み切った空気と、綺麗な森に囲まれた村の、木造の家々が広がっている。後ろを見上げると、ウェイランドとエルダーを二分する巨大な山脈が、西から東へと世界の果てまで続くのかと思ってしまうぐらい、長々と連なって聳えていた。

あの山脈をウェイランドの軍勢はどうやって通り抜けたのか？未だに謎であった。

普通に考えれば竜の飛行能力を使って、兵を少しずつ、山を超えてこちら側に運搬してきた、ということである。とても根気のいる作業であるが、決して不可能ではないだろう。

クシュウはしばらく村を散歩しながら村人達に色々と聞きまわった。ウェイランドの動向について何か情報を掴もうしているのだ。

最もこの辺境の村に来る良い情報は、あまり期待していなかったケルティックが陥落したという話すら、昨日来たばかりだったのだから。だが今日は様子が違った。

村の広場で、村人達が何十人も集まり、何か騒いでいる。この様子に尋常でないものを感じたクシュウはそれに聞き耳を立てた。

「どういうことだ！？ ウェイランドがこの村までやってくるのか！？」

「接收か！？ ベティはどうなっちまうんだ！？」

（何だって！？）

クシュウは即座に彼らに駆け寄った。

「おい！ ウェイランドがどうしたと言ったんだ！？」

相手が目上の人物というわけではないので、地の口調で、かつ少し焦った様子で村人に問いかける。

村人はその様子に特に驚くことも無く、話し始める。

「ウェイランドの兵隊が森を切り開いてるんだよ！ 大体この村の方角に向かってだ。地竜を何十匹も使って物凄い速さで森の木をなぎ倒してるんだとよ！ やつらこの森にでかい林道を造る気だ！ 何のためにそんなことを……」

聞いた瞬間、クシュウは宿に向かって駆け出した。

（なんてこった！ 奴らもうここまで追ってきたのか！ くそっ！）

普通に考えれば王女一人を追うのに、わざわざ林道を造るなどという、ややこしいことはしないのだが、クシュウの頭はそこまで回っていなかった。とにかくアンナを連れて、この村から逃げ出そうと考え、必死になって走った。

宿に到着すると、宿の者の挨拶を無視して急ぎ足で階上に向かい、ノックなしでアンナの部屋のドアを開けた。

「え！？」

部屋には誰もいなかった。先程出した朝食の皿だけが、テーブルに置かれている。

（まさかもう捕まって！？ …… いやそれはないか。となると気分転換の散歩か？ そういえば今日から部屋から出るようにすると

っていた様な？)

早速宿の者に話を聞くと、やはりアンナは自分が外出してしばらくしてから出て行ったという。どこかと聞いたら、宿の隣にある客用の牧舎に行くと言ったと聞かされた。この宿に泊まる際に、ケルティックからの脱出に使ったあのダックを預けておいた牧舎である。

そこに向かうと本当にアンナはそこにいた。長い一階建ての建物の中、そこは中央の通路を左右にいくつもの木の柱による区画がなされている。そこに宿泊客が持ってきた、多くの馬やダックが居座っている。

その一画にいる、自分が飼っている(厳密には違うが)ダックの真ん前の通路にアンナがいた。口ばしを手で触り、それに対するダックの反応を見て遊んでいる。

「あつ！ クシュウさん！ 待ってました！」

さっきまでの暗い表情はどこへやら、クシュウに気がついたアンナは、明るい声でクシュウに呼びかけてくる。

「ええ、ちょうど良かった。追っ手がもうすぐ来ます。アンナ様、すぐにこの村から脱出しましょう！」

早口でかつ簡潔に事態を説明したクシュウは、やや強引に、ダックを牧舎から引っぱり出した。そして困惑するアンナを、有無を言わず持ち上げて、ダックの背中にある鞍の上に乗せる。そして建物から出て、自らも乗り込もうとする。

「ちょっと待ってください！ どこに逃げるのですか!？」

「判りません！ でも少なくとも、この村からは遠く離れておかな

ければいけません！」

以前と同じくアンナを前側に挟んで乗り込んだクシユウは、すぐに飛び立とうとして手綱を引き、ダックの腹を軽く蹴った。

ダックが甲高い鳴き声を上げて、翼を羽ばたかせて走り出そうとする。前方には家々が建ち並んでいるが、そんなに多くはない。土地は草原のようにかなり開けているので、問題なく飛び立てるだろう。だが……。

「ちよつ！ 待つてください！ お願い、待って！」

アンナが突然制止の声を上げたので、クシユウは驚き、慌ててダックの足を止める。その急停止に、一時ダックがバランスを崩し、転げそうになるが何とか持ち堪えてみせた。

アンナは何やら必死な様子で、クシユウとダック双方に侘びを入れてきた。

「ごめんなさい！ でもどうしても行きたい所があるんです！」

「行きたい所？ どこか安全な場所でも？」

「いえ、そうじゃないんです」

クシユウは訳が判らず、首を横に曲げた。この状況でどこへ行こうというのであるのか？ そうしている内に、アンナは少し落ち着きを取り戻してようで、事情を説明した。

「確かこの近くに、いかい異界魔まに関わる遺跡が一つあるはずなんです。そこへ向かっていただけないでしょうか？」

「異界魔？ 何でしょうかそれは？」

今度はアンナが「え！？」と当惑した様子で、後ろ側にいるクシ

ユウを見上げた。そして何故か、すまなそうな表情に変わる。

「申し訳ありません。今までみんな知っていることなのかと……」
「いえ、別に構いません。よければそのことについて詳しく教えて頂けないでしょうか？」

質問してから、クシユウは何とか自分の記憶を掘り起こそうとした。だが“異界魔”という単語に関しては、聞いたことがあるような気はしたが、それが何なのか全く判らない。

王族しか知らないような伝説なのか？ それとも自分が物知らずであるだけののだろうか？ そう考えているうちにアンナが質問に答えてきた。

「異界魔とは呼び名の通りの意味で、異世界から来た魔物のことです」

「異世界？」

「はい。詳しいことは知らないのですが、この世には私達が知らない別次元の世界というものが、いくつもあるそうなんです。そこには、この世界の人達には及びもつかないような文明や魔物が沢山あるとか……。そしてこのエルダー王国は昔、その異界魔によって何度もある大きな危機に晒されたそうなんです。そのことを示す遺跡は、今でもこの国のあちこちに残っています。私も何度か父に連れられて、その遺跡を見たことがあるんです」

いきなりの規模の大きな話に、クシユウはどんな反応をすればいいのか判らず、「へえ……」と小さい言葉を返した。

だが“異世界”という言葉を頭の中で連呼しているうちに、はっ！ とあることに気がついた。

「それではあの時、王宮にいた怪物は、その異界魔だということです」

か？」

確かにあの奇怪な姿・能力をもつ怪人は、別世界の者だと言われれば、何となく納得できそうな気がする。

それにあの怪人が放っていた光弾。外面はどう見ても魔法であったが、どういうわけか発射される後にも前にも、魔法なら本来感じ取れるはずの魔力の波動を一切感じ取れなかった。もし魔法で無いなら、あの力はいったい何なのだろうか？

「はい、多分……。昔見た魔物図鑑の中に、あの怪物にそっくりな絵があつたんです。何となく覚えがある姿だと思っていたのですが、今朝になってようやく思い出しました」

「その魔物の名前は？」

「知りません……」

クシュウはアンナに対する王族への配慮も忘れて、堂々とがっかりとした顔をアンナに向けた。それを見たアンナは、気まずそうに顔を俯ける。

「すみません……。あの時はただ適当に本を流し見ていただけで、詳しいことはよく覚えていないんです。ただ覚えているのは、それが異界魔だということぐらいで……」

「いえ、いいんですよ。こちらこそすみませんでした」

敵の正体が知れるかと、一瞬期待させておいて返答がこれでは、いつもなら文句の一つくらい言ってしまったであろう。

だが相手は王族で、しかも幼い少女である。いちいち怒るのも大気ないと思い、何とか心を落ち着かせる。最もクシュウ自身もまだ、まだ子供といえる年代なのであるのだが……。

「それで……。その遺跡に行けば、あの怪物について何か判るのですか？」

「それも判りません……。でも何か手掛かりがあればと思って……。私どうしても知りたいんです！ あれが一体何なのか、この国で何をするつもりなのかを！ だからお願いです！ 私を遺跡まで送ってください！」

クシュウは少し悩んだが、意外とあっさりとアンナの言葉に頷いた。どのみちこの村から出なければいけないのだし、あの怪人の正体と目的が気になるのは、クシュウとて同じであつたからだ。

「判りました。して、その遺跡とはどちらに？」

その返答として、アンナはある場所を指差した。顔を向けるとそこには二国を二分する長い巨大な山脈が連なっているのが見える。その山々の中に、一際高い、まるでどんぐりのような形をした高山があつた。

「あの山の麓のあたりです」

山の麓……。ようするにウェイランドとの国境に、更に近づくということであるが、クシュウは大して悩みもせず首を縦に振った。どうせここまで来てしまったのだ。今更少し接近したぐらいで大して差はないだろう。

「細かい位置は忘れたのですが、とても大きな遺跡なので、すぐに判ると思います。クシュウさん、よろしくお願いします」

「判りました。では行きますよ」

クシュウとアンナを乗せたダックは再び駆け出した。異界魔の存

在に関わるという山脈の遺跡に向けて。

（なんとか隠れ家にできそうな遺跡だといいいんだけどな。まあ行ってみれば判るか。……しかし異世界とは。父さんの話しも本当だったりするのかな？）

クシュウにとって“異界魔”というのは初耳だが、“異世界”という言葉は実家で聞きなれた言葉だった。

一自治区の領主を勤める父は、自分達の祖先は実は異世界の人間なのだとよく自分に言い聞かせていた。何でも魔法の船に乗ってきて、この世界に降り立ったのだそうだ。

（名前は何だったっけ？ ……確か『スペースシップヤマト』とか言ったかな？ 何ていうか変な名前だ）

そんな考えを張り巡らせながら、二人を乗せたダックは宙に舞い上がった。

第六話 遺跡

言われたとおり、その遺跡は呆気なく見つかった。

遺跡が大きかったということもあるが、何よりその遺跡の周りの広大な森林が、人間の頭によくできる円形脱毛症のように綺麗に伐採されていたからだ。

切られた木々は既に取り払われているようで、無数の切り株だけが山地の真下にある、僅かに傾いた野原に立ち並んでいた。

上空にいる二人は啞然として、その可笑しい風景を眺めていた。アンナもこの光景は初見のようであった。

「この近くに山村があつたのでしょうか？」

「さ、さあ。それらしきものは全く見当たりませんけれど……。とりあえず降りましょう」

降り立った二人は、その辺一帯を詳しく見た。草があまり生えていない地面や、切り株のまだ新しい切り口から見て、伐採が行われたのはつい最近だということが判る。その中でも何より目を引いた物は、伐採地帯と森林地帯の合間にあつた。

「これは……なんでしょう？」

アンナが何とも不思議そうにクシュウに尋ねる。

「生ゴミですね」

「それがどうしてこんなに？」
「判りませんよ」

そこにあつたのは、何とも大量に積まれた生活廃棄物の山だった。多くの食べかす・廃材等が一箇所にまとめて捨てられている。大きな動物の糞らしきものもあり、それらが一緒になって猛烈は異臭を放っている。かなり健康に悪そうだったので、クシュウはアンナをそこから遠ざけた。

またそことは別に、大きな焚き火の後等もあつた。伐採した木材を利用したらしく、多くの灰と炭の山の隣に、未使用の木や枝が適当に積まれている。

「ここで大規模な野営が行われていたようですね。おそらくは数千人規模の、しかも動物等も沢山連れていたようです」
「それって……」

あまり考えたくは無いが、状況から見てウェイランド軍だと考えるのが妥当だろう。あの大量の糞はアイスワイバーンのものであるのか？

どこから国境を越えてきたのか謎だった軍勢は、エルダーへの侵攻直前に、ここで野営を取っていたようだ。

「とりあえず遺跡に行きましょう。もう判りますよね？ あそこにあるのが、私が言っていた異界魔に関する遺跡です」

そう言つてアンナは、一直線に遺跡に向かって走り出した。例の遺跡は、既に目に見える距離にある。

クシュウは当初、遺跡と聞いて古ぼけた石造りの寺院や砦の姿を連想していた。だが実際にそこにあつたものは、想像とは全く違つ

ていた。そこにあるのは建物ですらない、巨大な洞穴だったのだ。

山の麓の急な斜面、いや崖と言ったほうがいいかもしれない。その長く高い岩の壁に、それはポツカリと開いていた。

信じられないくらい巨大な大穴で、入り口の形は正確な長方形になっていた。目測で高さは三十メートル、長さは八十メートルといったところであろう。これより大きな洞穴がこの世界のどこかにありえるだろうか？

洞穴の入り口や内部の壁は、見るからに頑丈そうな石材で固められている。内部は暗くてよく見えないものの、洞穴の大きさに見合った、長く太い柱が三本、ある程度間隔を開けて並んで立っているのが判った。明らかに人口の洞穴である。見た目の雰囲気は、丁度城砦内部の通路の、超巨大版といったところであろうか？

(……ていうか、これって！)

これを見たクシュウは、とてつもなく嫌な予感が胸の中に湧きあがって来た。己の予想通りだとしたら、あの洞穴は……。

「アンナ様、待ってください！　うかつに入ったら危険です！」

力いっぱい叫んだが、アンナは止まらない。というか既に二百メートル先の洞穴の入り口前に到着している。

いつかの鬼ごっこの時といい、何とも驚かされる運動神経であるクシュウは頭を抱えながらも、しかたなくアンナの元についていた。

洞穴の大きさは、近くで見ると更に圧巻であった。石の壁や柱の表面は滑らかで、どうみてもレンガ造りではなく、組み立ての際の

継ぎ目らしきものも無かった。

洞穴の奥はかなり深い。当然内部は暗く、かろうじて入り口付近にある物と同じ形の柱が、奥の方にも立っていることが判る。

クシュウは洞窟内部を眺めていたアンナの前に出て、剣を抜いた。そして切っ先を頭上に掲げ、小さく「灯火……」と呟く。すると刀身が淡く赤く発光し、同時に切っ先から言葉通り灯火のような強い火が発生した。

これにより剣は、丁度たいまつと同じ役割を持ち、洞穴内部を明るく照らした。即席でかがり火を造る、火の魔法の初歩術である。

「行きましようか。すっかりついてきてくださいね」
「は、はい！」

最初アンナが中に入るのを止めようとしたクシュウだったが、入り口についた途端、もうそんな気は無くなっていった。クシュウ自身も、中がどうなっているのか気になって仕方が無いのだ。

二人はただ無言で中を進んで行った。三本柱は一定の距離を置いて定位置的に立っており、地面も壁も天井も、ずっと滑らかな石造りだった。二十分ほど歩いてから、初めてクシュウが口を開いた。

「アンナ様は以前にもここにいらっしたんですね？」

「はい。二年ぐらい前に来ました。ただ、その時は入り口の前を見ただけだったので、中がどうなっているのかは判らないんです」

「陛下や調査官からは、何かしらのご説明は無かったんですか？」

「あったかもしれませんが……。ただ本当に言いにくいのですが、私その時遺跡にあまり興味が無くて、途中で眠りこけてしまったんです。すいません……」

「そうでしたか……」

「でもこの深い遺跡……、何かありそうな気がします。もしかした

ら異次元の門があるのかも……」

アンナは何処まで続くのか見当もつかない長い洞窟の奥を、緊迫した面持ちで見据える。クシュウの方は、何か悩んでいるような面持ちでアンナを見下ろした。

「異次元の門？ なんですかそれ？」

「別世界同士を繋ぐ魔法の門のことですけど？」

「異界魔とは空から飛んで来るものではないのですか？」

「……？ どうして空からと……？」

怪訝な顔で質問するクシュウに、アンナは同じく怪訝な顔で質問で返した。

「いえ……。どうもあの魔物は空から飛んできたようなので」

「えっ？」

「実はケルティックに着く前の夜に、あの魔物らしきものが流れ星みたいに降ってきて、山の何処かに落ちるのを見たんですよ。ここに来る途中まで忘れていました」

「それは本当にあの魔物なのですか？」

「さあ……？ その後聞こえた鳴き声が、あいつに似ていたので、そうではないかと……？ ただの思い過ごしかもしれませんが」

アンナはよく判らないといった様子で「はあ……」と言だけで返事をした。クシュウはそこで話を止めようとしたが、今度はアンナが話しかけてきた。

「関係ない話なんですけど……。もしまたあの魔物が襲ってきたら、クシュウさんになら倒せますよね？」

クシュウは思わず「はあ!？」と呆れと驚きが混じりあつた声を大きく上げた。これにアンナは不思議そうな顔をする。

「はあつ、て……。クシュウさんなら、勝てそうな気がしたのですけれど?」

「まさか! あんなのに勝てると思うんですか!? 近衛や衛兵が皆奴一人にやられたんですよ! 俺みたいな新米が勝てますか!」

クシュウは敬語を使うのも忘れて、アンナの言葉に強く反論したがこれにアンナは、ますます首を傾げる。

「確かに新米かもしれませんが……。私クシュウさんより強い人なんて、正直見たことありませんよ? 多分ハリガン隊長より強いと思いますけど……」

「そんなわきゃ ! ……いえ、すいません。そんなはずですよ。私が隊長より強いなんて……。きっと勘違いですよ」

クシュウはそれだけ言つて、この話を打ち切り、足を進める。アンナはまだ納得できずにいたが、これ以上追及せずにクシュウの後ろをついていった。

ところがその途中、クシュウがふとあることを思い出した。

「これもさつきまでの話とは全く関係ない事なのですが、いいでしょうか?」

「はい、何でしょう?」

「初めてお会いしたとき、アンナ様はどうして王宮から出ようとしたんですか?」

アンナは少し返答を躊躇った。しばらく時間を置いてから、控えめに答える。

「それは……、王宮の中が怖かったんです」

「怖かった？」

「はい。あの日から数日前に、二人の近衛隊員が私をどこかに連れ去ろうとしたんです」

「連れ去る？ どこへ？」

「判りません。庭の池を眺めていたら、いきなりやってきて私を取り押さえようとしたんです。そのまま私を袋に隠して、王宮から出るつもりだったみたいです」

あまりの話しにクシユウは思わず飛び上がりそうになった。未遂とはいえ、一国の威信に関わる大事件である。

「なっ！？ それって誘拐ですか！？」

「そうだったみたいです……。声を出さないよう、私の口を押さえようとしたその人たちの手を、私は思い切り噛み付きました。そして股間を蹴りつけて、もう一人の隊員の足を掴み上げて転ばして、魔法で焼き払ってから、必死に王宮の中に逃げ込んだんです。その後ダッチさん達が来て、二人は捕まりました」

「はあ……」

クシユウは驚いた、というより呆れた。なんとも体力溢れるお姫様である。しかも魔法も使えたのか……。

「その二人の処遇は？」

「その後すぐ解雇されたそうです」

クシユウは眉を潜めた。

「解雇？ たったそれだけですか！？」

「はい、それだけです」

「そんなはずないでしょう!? 王族にそれだけのことをしておいて……、普通は極刑ですよ!」

「確かにそうなのですが……、ダッチさんは『あの二人は仕事疲れできつと頭が緩んでいたんだろう。あれだけの灼熱地獄を味わえばもう充分だろう』とおっしゃってました。それに他の方々も、誰もあまり深刻に受け取っていませんでした。私が、そんなことない! と父上に訴えても『あまり神経質になるな』とだけ言われてしまつて、それで私、王宮の中がすごく怖くなつてしまつて……」

クシュウは愕然とした。自分も王宮の平和ボケぶりを見て驚いていたが、このくらい呑気なのはこの国が平和な証拠だと考え、若干心地よく感じていた。

まさかこれほど治安上深刻な状態になっているとは思ひもよらなかった。一国の王女の身が危険にさらされたのに、何の対応もなされないとは、いかれているにも程がある。

前に王都に入り込んでいたウェイランドの尖兵を見た時は、彼らがどのような手で門の詰め所を通り抜けて、竜騎兵による襲撃前の王都に入り込んだのか不思議だった。だがこの様子では案外簡単に侵入できてしまったのかもしれない。

話しながら涙眼になつているアンナの顔を見て、クシュウはそつとアンナの頭に手を寄せた。

「大丈夫です。私はしっかりとアンナ様をお守りして見せますよ」

この言葉にアンナは「えっ?」と少し驚いたが、クシュウの顔を見て徐々に喜びの表情を浮かべ始めた。一方のクシュウは、適当に言つた王子様気取りの己の発言に、急に恥ずかしさがこみ上げて顔を赤くした。

それに気付いているのかいないのか、アンナは元気よく嬉しそう

に答えた。

「はい！　ありがとうございます！」

何時間歩いたであろうか。並みの人間ならば、大分疲れが溜まってくる頃であるはずなのだが、二人の体力はまだ余裕たっぷり、足取りに未だに乱れは無かった。

不意に奥の方に、今までのものとは違う何かが、両側の壁の辺りにあるのが見えた。

何も無い地中の廊下を、黙々と歩いてきて大分飽きが来ていた二人は、これに大きく反応し、一気にそれに走りよった。

それにすぐ側まで到着した二人は、眼前の物体に呆然とした。

「これが異界魔ですか？」

「はい、多分……」

洞穴の両側の壁の付近に、向かい合って立っているもの。それは精巧に作られた大きな動物の石像だった。

大きな四角い台座の上に立っているそれは、かなりの年数が経っている筈なのに、破損した部位は全く見つからない、見事な彫像である。最もその石像がどのような動物を象ったものであるのかは、全く判らなかつた。

どんな姿かと形容するには何と説明すればいいのであろうか……。
かろつじて言うのならは蠍さそりと蜥蜴とかげの複合体であらうか？　長い胴体

に鋭い爪のある四本の手足、尻の先から伸びる鞭のように長くてしなやかな尾。これだけ見れば爬虫類の一種にも見えるだろう。

だが全身に鱗は無く、背中からは四本の太い突起物が、左側・右側に二本ずつ、計四本が並んで生えている。また尻尾にも鋸の刃のような棘が、端から端までずらりと並んで生えており、先端は槍のような形になっており、片刃式の剣のような大きな棘がついていた。そして何よりもの特徴が頭部である。顔には口はあるものの、目・鼻・耳らしきものは全く無く、顔面に位置する部分から、後頭部にかけては、卵のように滑らかな皮に覆われている。そしてその後頭部はとても長く、背中 of 辺りにまで伸びていた。丁度背中の四本の突起物に挟まれた形になっている。

口は大きく開かれており、両顎には人間のものとよく似た切歯が生えている。そして開かれた口からは、これとは別の生き物（？）が飛び出していた。四本の尖った歯が生えた口を持つ、蚯蚓のような身体の長い小型の生き物。それがもう一つの大型の生き物の喉から伸びてきている。

いや、もしかしたらこれもこの蜥蜴のような生き物の身体の一部なのでは？ とそんな考えがクシュウの脳裏によぎった。

姿勢は蜥蜴などとは違い、二本足で前屈みに立ち上がっている。そして長い尻尾が、生き物の身体前方に向かって曲がって伸びており、先端の槍のような尾先を前に突き出している。見ようによっては、何かを威嚇しているような体勢に見えなくもない。

これまでの自分達の常識とは一線を越えた、その奇怪な姿に二人は唖然とした。確かに異次元の生物ばい姿ではあったが、二人が以前見た怪人とは全く異なる姿であった。

クシュウはその石像を隅から隅まで見渡した。台座には象形文字と思われる紋様が、台座を横に一周して刻まれている。クシュウはアンナの顔を窺ったが、アンナは無言で首を横に振った。読めない、ということのようだ。

次に石像の裏側を覗いたとき、台座の横の直ぐ側に、何かが落ちているのを見つけた。

（これは……、短刀？）

一見してクシユウはそう思ったが、手にとつてよく見ると、それは短刀と見るには妙な造りであることに気がついた。

まず刀身と柄の接続が随分と粗末だった。短い金属の棒と思われるものに、刀身の根元が、細い紐状の物で巻き付けられ固定されているのだ。随分原始的な繋ぎ止め方である。

そして刀身。近くで見ると、それが普通の刃ではない事は直ぐに判る。鎌のような形で前向きに反り曲がっているそれは、先端は鋭く尖つてはいるものの、刀身に刃は前にも後ろにもついていない。きちんとして加工して作られたものでは無さそうだ。

そして最も謎なのは、これそのものの材質であった。刀身の色は濃い青で、金属とも石とも全く異なるもので出来ていた。触った感触と重さから、動物の骨で作られているのでは？とも思ったが、しかし青色の骨を持つ動物などいるのであろうか？

それにしてもこの形、どこかで見たような気がする。いったいどこで見たのかだろうか？ そう思つてクシユウは背後にある石像に振り返った。

するとその疑問は実にあつさりと解消された。この短刀の刃は、この石像の生き物の尾先にそっくりだったのだ。

「これ何でしょう？ 竜の牙でしょうか？」

アンナはそれに気がついていないようで、奇異な目でその短刀を見詰める。

「ええと、多分これは……！？」

クシュウが説明をしようとしたその時、クシュウの耳にある音が聞こえてきた。

耳に手の平を当てて、その音をうまく聞き分けようとする。常人以上に鍛え抜かれた感覚能力を持つ彼には、洞穴の遙か向こうの、僅かな音を聞き取ることが出来た。

聞こえてくる音、それは複数人の足音であった。しかもかなり多い。数十人、いや数百人かもしれない。整列した規則正しい音がザツザツ！と軍隊の行進のようにこちらに近づいてくる。

（やばい……。やばいよ、これ！？）

それが何なのか見当をつけると、クシュウは剣にかけていた火の魔力を消してしまった。洞穴内部を照らしていた灯火が消えて、あつというまに周囲は元の闇の世界に戻る。

「え！？　ちよつ、どうしたん……！？」

何かを言おうとしたアンナの口を塞ぎ、クシュウは素早く石像の台座の表側に身を隠した。そしてアンナの口元に小声で話しかける。

「（静かに。向こう側から誰か来ます！）」

クシュウは静かに塞いでいた手を離す。アンナはクシュウと同じようにして、小声で呼びかける。

「（向こう側から？　ということは先に誰かがこの遺跡にいたのですか？　でもそれで何故隠れるのですか？）」

「（いえ、先程この遺跡の入り口前で、大規模な野営の後を見たいでしょう。私の予測どおりならウェイランド軍は……）」

その時だった。突如後方、クシュウたちが歩いてきた方向から、奇怪な光が現れた。

前にも見た、蜘蛛の目のような三点の赤い光線である。それがピツタリとクシュウの脇腹の辺りに照準を合わせている。

（やばい！）

クシュウがアンナの身体を掴んで、その場から身体を転がせて離脱したのと、青い光弾が放たれ、二人が隠れていた石像の台座を貫いたのは、ほぼ同時であった。危機一髪である。

「うおりゃあ！」

体勢を立て直したと同時に、クシュウは剣に風の魔力を注ぎ、後方の通路に向けて、勢いよく剣を振った。

渾身の力で振られた緑色に輝く剣からは、嵐のような強烈な突風が放たれ、広大な洞穴の中を、天変地異でも起きたかのような凄まじい音を立てて吹き荒れた。

視界は真っ暗で何も見えなかったのだが、クシュウは確かな手応えを感じた。遙か向こうから、何か大きくて重いものが、地面に叩きつけられ転がっていく音が聞こえてきた。敵がクシュウの風魔法で吹き飛ばされた証拠だ。

「今のはまさか！？ クシュウさん、どうしましょう！」

「仕方ありません！ 危険は承知で行きましょう！」

クシュウはアンナを抱え込んだまま、洞穴の奥の方へ駆け出した。

敵にうまく照準を合わせられないようにする為、真っ直ぐにはなく、ジグザグに洞窟の中を走り回る。

予想通り二発目は直ぐに来了。赤い点光が当たると、クシユウはすぐにその場でしゃがみこみ光線を避けた。避けられた光弾は、右側の洞穴の壁に着弾して消滅する。

暗がりで見えないのだが、おそらく壁にはとても深い円形の穴が開いただろう。

次いで三発目・四発目が放たれる。不思議なことに、この真っ暗で視界に何も映らない空間を、敵の射撃は全く迷うことなく、クシユウ達に向けて放たれていた。

敵はそれほどまでに気配を読むのが上手いのか？ それとも敵の視力自体が特殊なのであろうか？ クシユウはそんな疑問を浮かべながらも、全弾をギリギリでかわしていった。

また敵が光弾を放つとき、必ず先程の赤い点光がクシユウに放たれていた。暗い洞穴の中、その光は素人の目にもよく見えた。クシユウはその光を見て、発射の瞬間を先読みし、上手く回避していくことができた。

以前図書館でアンナと行っていたのとは次元が違う、まさしく命をかけた鬼ごっこは、そう長くは続かなかった。

徐々に前方から洞穴全体を照らす、広範囲の灯火の光が見えてきた。クシユウが先程気付いた、多勢の足音の主であろう。

「うおおおおおおー！！」

クシユウは獣にも負けない甲高い叫び声を上げて、そこに向けて全速力で走った。そこにあるものなど一寸も恐れることなく。

第七話 女王

「何者だ！？ 止まれ！」

投げかけられた予想通りの言葉に、クシュウは両足に思い切り力を込めて急停止した。

その勢いで靴がキインと音を立てて地面を削り、砂埃を上げる。

そして息を切らせ、目前にいる一団を睨みつけた。

「ク、クシュウさん！ この人達って！？ なっ、何でここに！？」

アンナは驚愕と恐怖で、悲鳴にも似た声を上げる。

（あゝあ、やっぱりそうだったか……）

洞穴にいる謎の一団の正体。それはウェイランド軍の大隊だったのだ。

青い甲冑を着た軍の上級兵に、白い服とサークレットを装備した下級兵が、整列して洞窟の中に並んでいる。その数はクシュウの視界からは、はっきりと特定できなかったが、もしかしたら千人以上居るのかもしれない。

いかにこの洞窟が広いとはいえ、これほどの大人数が詰まっているとなると、相当混雑しているようだ。実際に隊列が崩れている部分がいくつか見受けられた。

洞窟にいるのは兵士だけではない。食糧や武器を積んでいると思われる大きな荷車と、それを引っ張っている数十頭の馬。

両翼を地面につけて、格好の悪い姿勢で這い這い歩きをして洞穴の中を歩行している、十数頭のアイスワイバーンの群れ。

そして何より目を引いたのは、その大隊の先頭に立つ、白い馬に跨った一人の妙齡の女性だった。

その黒髪紅眼の女性は、周りにいる兵達とは明らかに身なりが違っていた。豪華な金銀の装飾が施された青を基調とした配色の礼服に、高貴な雰囲気漂わせる赤いマントを纏っていた。そして頭の上には、ウェイランドの紋章が刻まれた銀色の王冠が掲げられていた。

「静まれ、お前達」

女性は氷のような冷たい表情と、凍てつくような声で、クシュウ達に向けて武器を向けている兵達に、静かな声でそう告げた。

突然の奇妙な破壊音と、不審者の出現に動揺し、興奮しきっていた兵達は、その言葉一つで、一瞬で静まり返る。

その声にアンナは言い知れぬ恐怖を感じ、身動きが取れなくなる。女性は馬を降り、不適な笑みを浮かべて、二人にゆっくりと歩み寄った。アンナはその冷たい視線に怯え、ジリツと僅かに後ずさりする。

一方のクシュウは、アンナとは別の者の恐怖に怯え、焦っていた。
（何だよ？ 言いたいことがあるなら、さっさと見えよ！ こっちはあんたらの相手なんかしてやる暇は無いんだよ！）

そんなクシュウの様子を、自分に対する畏怖と受け取ったらしい女性は、魔女のようにニタリと笑ってクシュウに言葉をかけた。

「そう怯えなくていい、素直に武器を降ろせば、あなたたちを傷つけたりしない」

「あんたが何もしなくても、別の奴がしてくるかもしれないんだよ

！」

クシュウは少し挑発的に、かつ遠まわしに「そこをどけ！」といった態度で、女性の問いに返答する。

それに対し女性は、特に気を悪くすることも無く、相手を値踏みするような余裕の態度で言葉を返した。

「信頼を得られずに残念です。そんなに警戒しなくても、私の忠実の部下は身勝手な行動を取ったりしませんよ」

「いや、そうじゃなくて……」

「まあいいでしょう。自己紹介を致しましょう。私はウェイランド国王、ユタニ・ウェイランドといえます。」

「国王！？」

アンナは女性が口にした、その信じられない言葉に、怪人を目にした時以上に驚愕した。ほんの数日前に、自国を瞬く間に乗っ取ってしまったウェイランドの王が、何故こんなところに？

女性　ユタニ・ウェイランドは、アンナの反応に満足そうに頷く。

（国王？　そんなこと知るか！　いいからそこどけよ、お前ら！）

クシュウはチラリと背後を見た。ウェイランド軍の掲げた大量の灯火のおかげで、洞穴内部はかなりの広範囲で明るくなっているものの、自分達を追ってきているはずの怪人の姿は未だ見えない。多勢に警戒して、どこかに隠れているのだろうか？

「あなた、エルダー王国王女のアнна・エルダーですね？」

その言葉にアンナは更なる恐怖で、危うく気絶しそうになる。

「その様子だと、投降されてきた訳ではないようですね？ ではこの遺跡に何の御用で……」

ユタニはそこで一旦言葉を区切った。

なにやら妙な事が起きた。突然視界に青い光が映ったと思ったら、腹部に何やら変な感触がした。そして急に身体から力が抜けていく。また眼前にいる剣を差した一人の少年が、倒れこむようにその場で蹲っているではないか。

これは一体どういうことか？ ほんの少し前まで全身から放たれていた強大な威厳は急に薄れ、ユタニは眼をパチクリさせて少年を見詰める。

不思議そうに腹の辺りを見てみると、ユタニは絶句した。己の腹に綺麗な丸い穴が開いているではないか！？ 穴の周りからは白い煙が吹き、礼服の破られた部分と腹の肉が黒く焦げているのが見える。

不意に後ろから、バタバタと何かが倒れる音が聞こえた。恐る恐る背後を見ると、自分の真後ろに整列していた十人程の兵士達が、ドミノ倒しでもされたかのように一直線に倒れている。

そこまで見たところで、ユタニの意識は完全に無くなり、パタリとあっけなく倒れた。

「へっ、陛下ああああ！」

あまりに突発的に起きた非常識な出来事に、ウェイランドの大隊がざわめいた。そして明らかな殺意を込めて、クシユウとアンナを睨みつける。

「きつ貴様！ 陛下に何をした！」

「何もしてねえよ！」

クシュウは起き上がり、手をブンブン振って全力で否定する。
一体何が起ったのか？

説明すると、先ず初めにクシュウの背後から赤い点光が放たれ、クシュウの背中に照射された。

後ろを警戒していたクシュウは、すぐそれに気付き、そのまま倒れこむようにして、しゃがみ込んだ。

同時に例のごとく光弾が撃たれ、クシュウの頭上を通過した。

目標を外した光弾は、クシュウの頭上をすり抜け、クシュウの真ん前に立っていたユタニに命中した。

光弾はその凄まじい貫通力で、ユタニとその後ろにいる、数人分の人間の身体を突き抜け、彼らを即死させた。以上説明終了。

「やったのは俺じゃない！ 俺の後ろから来た奴だ！」

無駄と判りつつも、クシュウは必死に弁解した。だが怒りで気が立っている兵士達は構わず武器を向けてきた。

「黙れ！ 死ねえ！」

クシュウとアンナに向けて、無数の魔法が一斉に放たれた。とてもない数の冷気の矢が、雨嵐ように二人に襲い掛かる。クシュウはアンナを掴み上げて、左方に思いっきり飛び跳ねて、これをかわす。

その時だった。さきほどまでクシュウがいた地点後方、魔法が通り抜けていった所から、「グオオオオ！」と明らかに人間のものは違う、おぞましい悲鳴が聞こえた。

それにウェイランド軍は動転し、一時動きを止める。

（まさか……、魔法のいくつかがあいつに当たったのか！？）

しばらく洞穴の中は、その謎の存在に警戒し、時間が止まったように静かになっていた。

だが静寂はすぐに破られた。ウェイランド側から前方、灯火の光の届かない真つ暗な洞窟の向こうから、青き光弾が飛んできたのだ。今度はクシュウではなく、洞窟の中に密集しているウェイランド軍に向かって。

洞窟の中が再び青く照らされ、一発の光弾が前から後ろへと、串刺しにでもされたかのように多数の身体をぶち抜く。それ一発で即死する者もいれば、腕がもげて赤子のように泣き叫ぶものもいた。光弾は次か次へと飛び、ウェイランド兵達を撃ち抜いていく。一発で少なくとも十人以上は仕留めていた。飛んでくる方向は少しずつ変わっており、襲撃者も狙いを定められないようにある程度動いていることがわかった。

突然の襲撃に混乱したウェイランド兵達は、誰の号令も受けずに前方の洞窟に魔法を放つ。

最も暗闇の敵の居場所が判らない為、“下手な鉄砲も数撃てば当たる”の要領で、とにかく前方のあちこちを撃ちまくった。

いくつもの魔法がどこかしこを通り抜けていき、やがて襲撃者の攻撃は止んだ。

先程の悲鳴のような、魔法が命中したような手応えは感じられない。「逃げたか？」とその場の全員が思ったとき、前方から“何か”がとてつもない速さで突進してきた。

「なっ!?!」

先頭にいた数人の兵達が、何が起こったのか判らぬうちに、その

“何か”に首を刎ねられた。

「でっ、出た！？　ぎゃあああああ！」

「うわああああ！　こっちに来るなあああ！」

それは単騎でウェイランド軍に突っ込み、次々と兵士達を惨殺していった。兵士の首が、胴体が、草刈でもされるようにたやすく切り裂かれ、瞬く間に血の池と死体の山が、洞穴の中の冷たい空間に築かれていく。

（何だ、あいつは！？　あの時の怪物か！？）

クシュウは目にしたそれは以前見た怪人とは全く違う、見えない人型だった。

いや正確に言えば微かにだが、その存在は見えた。だがそれはガラスのように、ほぼ透明といってもいい姿で、よく目を拵えて見ないとその存在に全く気がつかない。

透明人間は、手に持った武器と思われる物を幾重に振り、ウェイランドの兵士達を斬殺していく。

混乱の中、ウェイランド軍が付けていた灯火は全て消えた。これはウェイランド軍からすれば最悪の事態であった。

何故かは知らないが怪人は暗がりでも、敵の姿をはっきりと視認できるようだ。一方のウェイランドは闇の中、半透明の敵を見つけ出し、集中して攻撃することは、ほぼ不可能である。

ウェイランド軍は暗闇の中、でたらめに魔法や銃弾を撃ちまくり、多くの兵士が同士討ちをしていった。

「クシュウさん、行きましょう！」

多くの攻撃と悲鳴が飛び交う中、さっきまでユタニの存在に怯え固まっていたアンナが、クシュウの手元から離れた。そしてクシュウの手を引っ張り、脱出を促した。

「え？ あつ、はい！」

一瞬惚けていたクシュウは、すぐに気を取り直し、再びアンナを抱え込もうとする。だがアンナは「大丈夫です！」と言って、洞穴の後方、自分が歩いてきた方向を逆戻りして走っていった。

クシュウは少し戸惑ったが、すぐにアンナを追って駆け出す。

アンナの走力は中々速く、疲弊していたとはいえクシュウの常人を超えた走力に充分ついていっていた。

後ろからはウェイランド軍のものと思われる無数の悲鳴が、闇の洞穴の中を、地獄の底のようにおぞましく響き渡らせていた。

どうやら敵は現在、自分を傷つけたウェイランド軍の相手をしているようで、まだこちらを追ってきてはいないようだ。この分なら逃げ切れそうだ。

やがて視界に一点の光が、闇夜の太陽のように姿を現した。入り口の光だ。

「やった！ もう少しだ！」

洞穴の中の太陽は徐々に大きくなっていき、ついにそれは視界いっぱいに広がった。

二人は勢いよく外に飛び出した。二人が洞窟に入ったのは五時間程度であったが、実際にはもう何日も地下に閉じ込められていたような錯覚を感じた。

だが舞い上がった二人の達成感は、外の光景を見た途端、一気に下降してしまった。

「え？　これって？」

「ど、どうしていつもこんな……、悪夢です」

アンナはもう散々だといわんばかりの悲嘆を口にした。

外に広がっていた光景。それは切り株だらけの野原に広がる、大量のウェイランド兵の血みどろの死体だった。

最初に洞穴に入る前にいた光景と、今日の前に広がる光景が、同じ場所とはとても信じられない有様である。

倒れたウェイランド兵の人数は、少なく見ても百人以上はいる。いや人間だけではない。

辺りには、翼の無いずんぐりした体型・全身を覆う褐色の鱗・額から前向きに生えている野太い角を持つ竜、“アースドラゴン大地竜”の死骸が何十匹と横たえていた。

体重十トンはあるこの竜は、主に土木工事等のために人間に飼われていることが多い。それが何故こんな所で、こんなにたくさんいるのか。

答えは森の奥にあった。

切り株の茂る野原の向こう、洞穴前にいる二人からは真正面の方
向に、直線状に森が無くなっていた。そこには来る時は存在しな
かった、とてつもなく長い林道が、まるで大河のように大地に伸びて
いたのだ。

どうやらアースドラゴン達はこれを造る為に集められ、ここまで
到達したようである。

また野原に生える切り株が、三分の一ほど引き抜かれているのが
見えた。おそらくこの場所を綺麗な平地にするための工事をしてい
たのだろう。

何のためにそんなことをしたのか？　そして何故皆死んでいるの

か？ 後者の原因は直ぐに判った。

クシュウが注意深く見ると、ほとんどが刃物で切り裂かれて死んでいる中で、何人かそうでない傷を持っているのが認められた。腹や胸などに焼け焦げた風穴がある者達がいたのだ。見間違うはずも無い、あの怪人の光弾に撃たれた跡である。

「あいつ……、ウェイランドに何か恨みでもあるのか？ ていうか俺達はいつまでこんなものを見せられなきゃいけないんだよ！？」

向ける相手の判らない憤りを腹の底に溜めながら、クシュウは更に辺りを見回す。逃走のために必要な大事な翼、あの若いダックの姿を懸命に探した。

だが残念ながら、あのダックの姿は何処にも無かった。一瞬あいつもあの怪人にやられたのか？とも考えたが、生憎その場所にダックの死骸は一つも見当たらない。

（あいつ……うまく逃げ出せたのか？）

クシュウは己の右横で、未だ茫然としているアンナに方向に首を曲げた。

「アンナ様、まだ走れますか？」

「え？ はいっ、大丈夫です」

アンナは息を切らし、全身から汗を垂れ流した状態で、何とか元気を込めて言い放った。あの怪人から逃げるために、今までの洞穴の中を全力疾走していたのだ。無理に言っているのがバレバレである。

「駄目なようです。また私が運びましょう」

「えっ！　ちよつと待って！」

クシユウは再びアンナを強引に横抱きし、林道の脇にある森に向かって駆け出した。

第八話 激突

夜が更けて、明日には満月になるであろう大きな月が空に麗しく輝き、山を大分降りた街近くの森を照らしているとき、一人の少年・クシュウが森の中の本の木の根元に、ぐったりと背中を預けていた。

少したつてその場所にアンナがやって来た。両手には、近くの川原で汲んできた水の入った大ぶりの椀を持っている。

クシュウがそれに気がつき、アンナに向けて頭を持ち上げると、アンナが「はい」と言つて水を差し出した。

「ありがとうございます。すみません、あなたにこんなことをさせてしまつて……」

「いえ、いいんです。私にはこんなことしかできませんから……」

あの後クシュウは、アンナを抱えたままひたすらに森の中を全速力で走つた。

どこに向かうかなど一切考えず、あの怪人のいる洞穴から少しでも離れるために、無茶苦茶に走りまくつた。数日前にケルティック付近の森で行つたことと、全く同じことをしてしまつたわけだ。

結果、疲労の蓄積で、以前と同様見事にぶつ倒れることとなつた。アンナを手を持ったまま俯けに倒れ、その後何とかクシュウの身体から這い出たアンナが、クシュウの身体を引っ張つて手ごろな木に座らせ、そして現在に至る。

「あの姿の見えない人みたいなの……。私達が王宮で見た、あの怪物だつたんでしょか？」

アンナがクシュウのすぐ隣に座り、力なく話しかける。クシュウは「ううん」と唸り、気難しそうな声で答える。

「まず間違いないでしょうね。あの魔法に似た光の弾は、以前奴が放っていたものと全く同じでした。姿をあんな風に消すなんて一体どういう魔法なのでしょう……。それに私が洞穴で見たあの石像、あれもやはり異界魔なのでしょうか……」

「判りません。あんな蜥蜴とも虫ともつかない姿のものは、私も初めて見ました。でもあの遺跡にあったということは、そうなんじゃないかと……」

その言葉に、クシュウはアンナとは別の理由で異界魔に関して困惑していた。

（父さんが言っていたことが本当なら、俺の祖先もあんな変な生き物だったのか？）

「はあ、そうなんですか。なんというか……変な生き物なんです。異界魔というのは……」

それだけ言って、クシュウは頭を木にへばりつかせ、ゆっくり目を瞑った。これにアンナはすっ飛ぶように驚いた。

「えっ！ クシュウさん！？」

「大丈夫ですよ。少し疲れたのでもう寝ますね」

アンナはほっと息を吐いて、胸をなでおろした。上を見ると僅かに欠けた綺麗な月が、木の枝の合間から見えてくる。もしかしたら、あの遺跡でクシュウが言っていた流れ星が現れるのではないかと思いながら、じっと空を眺める。

しばらくの間そうやって空をボーッと眺めていたが、やがて思考は別の方向に変わっていった。アンナは未だ解決していない問題、この先の自分の行き先を考えて、深く溜息をついた。

ケルティックから今の時点までは、クシユウが自分を守ってくれた。何度も酷い目にはあったが、幼い頃に物語で見たカッコいい騎士に助けに来てもらえる囚われのお姫様みたいな気分になれて、少しだけ、本当に僅かだけでも嬉しかった。

だがウェイランドに占領され、エルダー王国政府が完全に解体されれば、自分はもう王女ではない。そうしたら自分がクシユウに守ってもらう理由は無くなる。

クシユウはそれでもずっと自分を守ってくれるだろうか？　やはり途中から自分一人で道を進まなければいけないのだろうか？

ウェイランドは王族の生き残りである自分を見逃してくれないだろう。そうなるとう然クシユウもずっと危機に晒され続けることになってしまう。ならばやっぱり……。

そこまで考えた時、アンナはあるとんでもないことを思い出した。

（ウェイランドって！　そういえばあの遺跡で！）

その記憶の驚愕の事実には、思わず声を上げてしまいそうなるが、隣で眠り始めているクシユウの為に何とかこらえる。

（そういえば私達会ったんだっただわ！　ウェイランドの王に、あの遺跡の中で！　何で！　どうしてあんなところに！　ていうかあの人もう死んじゃってるんだけど！）

そう。自分達はあの遺跡の洞窟で、現状の自分達の最大の仇敵とも言えるウェイランドの女王と遭遇していたのだ。あの怪物の存在

感が大きすぎて、今の今まですっかり忘れていた。

それだけではない。その女王はあの洞穴の中で、あの怪物に殺されているのだ。

一國を攻め入り、陥落させた王が、これから占領当地を始める矢先に死ぬ。よく考えなくてもとんでもない事態である。自分は正にその場に立ち会っていたのだ。

そこまで考えた所で、アンナは全身の力が抜けて、パタリと後ろの木に背中と頭を預けた。

（色々ありすぎて疲れちゃった……。もう寝よう）

アンナは隣で眠っているクシユウの肩に頭を乗せて、スヤスヤと寝息を立て始めた。

しばらく時間が経った。まだ夜は明けておらず、月と星の光に照らされた静寂の森の中、今までスピーと寝息を立てていたクシユウが唐突に目を開けた。

（これは……殺気！？）

クシユウは身体を極力動かさず、眼球を動かして辺りの様子を窺う。

隣にはアンナが自分に肩を寄せて静かに眠っている。女の子にこんなふうにしてもらえるのは中々体験できることではないが、今はそういうことに神経を割いてはいられない。

クシュウは腰にかけた剣にそつと手を触れる。

正にその時だった。クシュウの胸にいつぞやの赤い点光がいきなり照射された。

「はあ！」

クシュウは隣で眠っている少女を勢いよく突き飛ばし、一気に右側に倒れこむ。少女が「ふぎゃあ！」と間抜けな悲鳴を上げたのとはほぼ同時に、あの青い光弾が森の奥から飛び、いままで寄りかかっていた大木に丸い穴を開けた。

「またお前か！　ここまで追ってきやがったのか！」

クシュウはまっすぐに光弾が放たれた方角を、飢えた狼のように睨みつけた。

そこには一見何も無いように見えて、実は何かがいた。森の中の風景の一部が微かに歪んでいて、しかもそれは人型をしていて動いていた。あの時の姿を消せる怪人だ。

その人型はクシュウの前に一歩踏み込むと、頭の辺りから再び赤い点光をクシュウに向けて放った。

「ぬあああ！」

クシュウは素早く体勢を整え、迫り来る光弾を回避する。そして光弾とすれ違いざま、剣に思いっきり魔力を込めて抜刀し、居合い斬りの剣撃で最大出力の風刃を放った。

迫りくる風の飛剣を、怪人は大きく跳躍して避ける。避けられた刃は後方にある木々を竹のように何本も切り倒した。

クシュウは次に怪人に向けて“突き”を放った。剣が真っ直ぐ前

方に突き出たと同時に、風の矢が生まれ、一直線に標的目掛けて飛んだ。

怪人は即座に身体をくねらせ、紙一重で風の矢を避ける。そして再び飛び上がり、真上にある樹木の太い枝を右手で掴んだ。

「なっ！？ こいつ！」

驚いたことに怪人は枝にぶら下がった状態から、鉄棒のようにぐるりと回転し、枝の上に乗рикаかった。そして更に跳躍し、隣の木に飛び乗って光弾を放ってきた。怪人の身体能力の高さは判っていたが、まさかここまで俊敏な動きが出来るとは……。

突然の行動に動揺しながらも、クシュウは何とかこの攻撃を回避する。怪人は枝から枝へと、猿のように身軽に飛び乗っていき、次々と攻撃してきた。

クシュウは何とかそれらを避けることができたが、相手の素早い動きに狙いをつけられず、全く反撃できない。周りの森がガサガサと音を立てて動いており、敵のある程度の位置は掴めるが、それでも魔法を撃つための隙は一切見つけられなかった。

その途中、クシュウはあることに気がついた。

（こいつの狙いは……もしかして俺一人か！？）

前と違って自分は今アンナを手元に置いていない。そもそも最初の攻撃も明確に自分だけを狙ったものだった。以前王宮で喰らわせた一撃の仕返しであろうか？

「クシュウさん！」

その呼び声にクシュウはハッ！と気がついた。先程突き飛ばした

アンナが、真っ直ぐここに駆け寄ってきているのだ。

「駄目だ、アンナ！ 来るんじゃない！」

敵の攻撃をかわしながら必死に放たれた敬語無しの言葉に、アンナは驚いてビタリ！と足を止めた。

「俺に近づくな！ 今すぐここから離れろ！ こいつの相手は俺がする！」

言い終わると同時に、クシュウはその場から森の奥へ脱兎の如く駆け出した。怪人もそれを追って木の上を飛び移りながら追う。残されたアンナはポカンと口を開けて、その場に立ち尽くしていた。

クシュウはとにかく森の中を駆け回った。後方からは木々が激しく揺れ、そこから光弾が次々と発射され、クシュウが走っていた地面にポコポコと穴を開ける。

（これじゃあキリがない！ 何とか開けた場所に行ければ！）

だが深い森の中にそのような場所は中々見つかるものじゃない。確かこの近くに街があったのを思い出したが、さすがにそこに向かうのは不味いだろう。敵に対して攪乱は出来るかも知れないが、大勢の人を巻き添えにしてしまうかもしれない。

そんな絶望的な状況の中、意外すぎる救援者が現れた。

敵が追ってくる後ろの木のあたりから、突然ドカツ！という何か大きなもの同士がぶつかるような大きな音が聞こえた。

クシュウが「え？」と思った瞬間、隣の樹木に何とあの透明怪人がボールのように飛んできて、木の幹に派手な音を立てて激突したのだ。

「ええ！？」

クシュウは思わず足を止めて、音がした方向に振り返る。

「グエエエエエ！」

振り返った方向の木の上、生い茂る枝の合間、そこには何と一羽のダックが翼を大きく広げてホバリングしていたのが見えた。

暗くてはつきりとは識別できなかったが、クシュウは何となく判った。目の前にいるのは自分達と一緒に王都を脱出し、遺跡の前で行方不明になっていた、あの若いジャイアントダックだ！

クシュウは即座に剣に魔力を込めて、隣にいる怪人目掛けて風の矢を思い切り撃ち放った。

ガス！と金属が何かにぶつかるような音を立てて、怪人は後方に勢いよく飛んだ。怪人の体は奥にあった草むらの中に飛び込み、その姿が完全に隠れてしまう。

「ダアアアアア！」

逃がすものか！と言わんばかりに、クシュウはそこに向かって猪のように突進した。

剣の一振りで突風を舞い起こし、草むらを吹き飛ばす。そして姿

を現した透明怪人に渾身の力を込めて剣を振り下ろす。

森の中にガキイイイン！とけたたましい金属音が響き渡った。

（くそ！）

剣撃は怪人を仕留められなかった。透明で明確には見えなかったが、怪人は手に武器と思われるものを持って、クシュウの剣をすんでのところで受け止めたのだ。

「ぐは！」

瞬間、怪人は自分を見下ろすクシュウの腹部を蹴飛ばした。常人を遥かに上回る筋力で放たれた蹴りは、クシュウの身体を弾き飛ばし、高く宙に舞い上がらせる。

地面を二度三度バウンドし、仰向けに着地したクシュウは、痛む腹を我慢し立ち上がるうとする。

眼前にはあの怪人が既にこちらを向いて立ち上がっていた。そしてバチバチと全身から電流を放っている。するとさっきの痛手で魔法（？）の効果が切れたのか、透明な姿が徐々に実体化し、その姿が露になっていった。

そこにいたのは右手に斧を構え、全身を銀の鎧で覆った怪人。間違はなくクシュウが以前王宮で見た、あの謎の暗殺者である。

左肩に装着された銃身がキュイインと音を立てて、こちらに銃口を向ける。ハツとしたクシュウは素早く横に動き、放たれた光弾を回避する。

だがその時、何とあの怪人がすぐ目前に迫っていた。光弾を避けるために動いたほんの一瞬のうちに、怪人は一気にクシュウとの間合いを詰めたのだ。

怪人は右手に持った斧を、重くクシュウに向けて振り下ろした。

クシユウは剣を構えて、その斧の一撃を受け止める。

その瞬間、手が千切れんばかりの衝撃がクシユウの身体を襲った。怪人の力は凄まじく、風の魔力で威力を増大させているにも関わらず、クシユウの剣は力負けして、今にもへし折れそうになる。

「があ！？」

先程蹴り飛ばされ、強烈な痛みがまだ残る腹に、再び凄まじい衝撃が走った。あまりの痛みに意識が飛びそうになる。

怪人が体格差のリーチを利用して、剣を交えた状態のまま、クシユウの腹に再度蹴りを打ち込んだのだ。

クシユウの身体は真っ直ぐ前方に飛び、またもや地面を何度かバウンドしてからゴロゴロと転がっていった。

「がっ！ うがあああ！ こんちくしょうが！」

二度の蹴撃で受けた、気を失いそうな痛みと嘔吐感を、思い切り精神力を振り絞って耐え抜き、クシユウはヨロヨロと起き上がった。一方の怪人はクシユウの様子をしばらく眺めると、止めの一撃と言わんばかりにクシユウに銃口を向けた。

「だありゃあ！」

まさに光弾が放たれようとする瞬間、クシユウは魔力を最大限に高めた剣を敵に向かって振った。いや違う。投げつけた！

まさか武器を直接飛ばしてくるとは思わなかったのだろう。怪人の反応は一瞬遅れ、矢のように飛んでくる剣の刃先をまともに受けた。

怪人の身体ではない。今まさにクシユウに照準を合わせていた、

左肩にある魔法の銃に、である。

剣の切っ先は、銃口の真ん中に嵌まり込むように命中した。発射直前だった銃は暴発を起こしたがごとく、怪人のすぐ横で「ボム！」という音を立て、青い炎を吹いて爆発した。

「グオオオオオオオオ！」

爆発の余波を至近距離で受けた怪人は、痛みで狂ったように踊り、近くの木に激突し、右手に装備していた斧を落とした。

「はあああああああ！」

その隙にクシュウは全ての気力を開放して、怪人に豪快な体当たりを喰らわせた。

クシュウは右手からグサ！と肉を刺す感触を受けた。

クシュウの手にはあの洞穴で見つけた、異界魔の尾先で作られたと思われるあの短剣が握られ、それが怪人の腹に突き刺さっていた。武器を自ら捨てたクシュウは、この短剣で一か八かの勝負に出たのだ。

短剣の硬度と鋭さは信じられないほど高かった。この世界で業物と称される数々の武器も、この粗末な造りの短剣には敵わないかもしれない。

それは魔力強化等を一切行っていないにも関わらず、銃弾を受けても物ともしない怪人の強靱な肉体に深々と突き刺さったのだ。力を込めると短剣は怪人の腹に更に喰い込む。怪人は緑色に光る血液を大量に噴き出し「グホ！ グホ！」と声にならない悲鳴を上げた。仕留めたか？とクシュウが思った矢先、怪人の右手が素早く動いた。クシュウは怪人から激烈な張り手を受けて、今日三度目に宙を

舞った。

「げはあ!」「グオオオオ!」

近くの木に叩きつけられたクシユウと、動いた勢いで倒れこんだ怪人の、二人の苦悶の音が同時に鳴った。

クシユウの身体が地面に落ちて仰向けに倒れ、怪人は短剣が突き刺さった腹を必死に押さえながら立ち上がる。

意識が薄れていく中、クシユウは怪人が異色の血を垂れ流しながら、森の奥へと逃げていく姿を目にした。

(……やった? 勝ったのか?)

近くからダツクの悲痛な鳴き声が聞こえてきた。ああ、そういえばこいつに助けられたんだった……。とクシユウは声が聞こえるほうに首を曲げようとしたが、身体が思うように動かない。感覚が麻痺してきたのか、先程のような痛みは、あまり感じられなかった。

(アンナは……? うまく逃げられたかな?)

そこまで考えたのを最後に、クシユウの意識は途切れ、ゆっくりと目を閉じていった。

薄暗い夜の森の中、そこには怪人が落とした銀色の斧・闇夜の中に実に目立つ光る血痕・そして全く動かなくなったクシユウの傍で、必死に鳴く若いダツクの姿があった。

第九話 監獄

ケルティックの中央に存在する、この国の政治の中心部、エルダ
ー王宮。

夜が明けて、光輝く太陽に照らされたばかりの時刻に、現在はウ
エイランドの統制本部になっている、この大きな建造物のかつて王室
だった場所で、二人のウエイランドの将軍が居座っていた。将軍の
一人・ブレインは随分興奮しきった様子で、狂人のようにその辺を
行ったりきたりと歩き回っている。

傍らにいるもう一人の将軍が、その様子を見て大分呆れ顔になっ
ていた。

「もう少し落ち着かれたらどうですか？ ブレイン将軍」

「なにを言うかマック！ もうすぐここに陛下が来られるのだぞ！
落ち着いていては、それこそ不敬というものだ！」

特に嫌味を言われた訳でもないのに、ブレインは子供のように喚
き立てる。

これにマックが「やれやれ」と口にして深い溜息をついた。だが
その直後に、いきなり真顔になってブレインに話しかけた。

「しかし……何やら様子がおかしくありませんか？」

「何がだ？」

「予定では昨日の夕方頃には、陛下の御一団は、すでにあの遺跡を
抜けられたはず。王都への到着が多少遅れているのはいいとしても
少なくとももう領内に入られたのは確かなはず。それに関する伝達
が全く来ないのはどうも……」

ブレインが訝しげな顔でマックを睨みつけた。

「貴様は何が言いたいんだ？」

「あの遺跡で陛下の身に何か起きたのではないかと……」

この言葉に先程の緊張振りはどこへやら、ブレインは腹を抱えて笑い出した。

「おいおいマツク。陛下に屈強の精兵が何百とついているのだぞ。何か問題が起こるはずもなからう」

「そうは言い切れませんよ。そもそもあの遺跡自体、未だ謎の多い場所なのでから」

ブレインは鼻を鳴らした。

「仮にそうだとしたら、それはそれで奉迎隊・開拓隊からの連絡が来るはずであろう。あまり不吉なことを言うもんじゃない！」

先程の緊張振りは大分解けたようで、ブレインは部屋の奥にある豪華な仕立てが施された机に向かい、その椅子に腰掛けた。そして机上にある書物を拾い上げ、何やら鼻歌を吹いて、やる気無そうに眺めている。

この様子にマツクは更に深い溜息をついた。コロコロと態度が変わる人だ……。

そう思いながら、マツクは今回の侵攻に利用したあの遺跡に思いを張り巡らせた。

ウェイランドとエルダーの国境を跨るあの巨大な山脈。その山の一つの麓に、半年前にある古い遺跡が発見された。

遺跡といっても、それは一般にイメージされるような古城や寺院等ではなかった。それはとてつもなく長く、そして恐ろしく巨大な

入り口を持つ、人口の洞穴だったのだ。

元々あった洞穴に壁石を詰める、といった補強を施したのか？

それとも最初から人の手で掘られた洞穴なのかは未だに不明である。後者だとしたら、一体どれほど大掛かりな土木工事を行ったのか見当もつかない。

何故ならその洞穴は、あの巨大な山の地下を突き抜けて、山の反対側、何とウェイランド領にまで延びていたのだから。

長い年月、二国の行き来を困難にしていたあの山脈に、まさかこんな大きな穴がポツカリ開いていたなどと誰が予測できただろうか？ ウェイランドの地竜を総動員させても、あれだけの穴を開けるのに何年かかるだろうか？

一体いつ、誰が、何の目的で、どのような方法であの洞穴を造ったのか？ 洞穴の入り口付近の壁に、一応の答えが書き記されていた。

かなり古い時代の文字が、片側の壁に奇妙な生き物の絵とともに刻まれていた。翻訳すると内容はこうだった。

『大昔、戦乱に荒れ狂っていたこの大地に、異世界から獯猛な狩人達がやってきた。戦闘欲の強いその狩人たちは、次々とこの世界の強者達を殺していった。やがて狩人たちは、この世界の人々の命を生贄にして、更に凶暴な怪物を自らの手で生み出した。そして狩人達はその怪物達を最強の獲物として、この洞穴の中に放った。狩人達はその危険地帯と化した洞穴に自ら入り、中にいる怪物たちと死闘を繰り広げながら、洞穴の中を突き進んでいった。襲い来る怪物達を全て倒し、洞穴の奥の最終地点、山向こうの出口に辿り着いた時、狩人達は空に向けて勝利の雄叫びを上げた』

とまあ要約すればこんな感じである。

“異世界”とは随分壮大な話である。常識的にはそんなものは御伽噺の世界の話だ。だがあの遺跡が尋常でないものは確かで、研究者達がこれを王室に報告した。

すると女王陛下はとんでもないことを言い出した。「その遺跡を使ってエルダーへ進軍する計画を立てる。これは天がこの国に与えた大いなる好機である」とのお達しだ。

前人未到の遺跡の発見に、最初に考え付くのは軍事利用とは……。無礼な考えだろうが、これは呆れるより他に無い。大昔の謎多き文明の探索を最優先しようとは考えないのだろうか？ まあ所詮あの女王も権力の亡者に過ぎないから仕方が無いのだろうか……。

結局女王の命令通り、ウェイランド軍はあの遺跡洞穴を通って、エルダー領に難なく侵入して見せた。そしてウェイランド空軍の主力である氷竜騎兵団を使って各都市を襲撃し、不意をつかれて混乱している最中に侵攻を実行し、見事エルダー制圧に成功した。

ちなみにその進軍の際、遺跡の中から色々な遺物が発見された。それらは発見後すぐにウェイランドの魔法学部に送られ、現在研究が進められているはずだ。

そして今日、ウェイランド本国から女王陛下自らこの国に来訪し、視察を行う予定なのである。その迎賓のために、エルダー全土にいる地竜達を掻き集め大規模な工事を行った。女王陛下御一行が苦なく通るための専用の長い林道を、二日前から大急ぎで造っていたのだ。

だがその開拓隊及び、同行した奉迎隊からの連絡が昨日から全く来ない。

彼らは千里鏡を持っているから交信はすぐに出来るはずだ。これはどういうことか？ もしかしたら彼らの身にも何かあったのだろうか？

そうやって思考を深めていた所、突如王室のドアがバタン！と豪

快に開けられ、一人の兵が大声を上げて飛び込んできた。

「ブレイン様！ マック様！ ご報告です！」

これに今まで部屋の飾り付けをいじって遊んでいたブレインが、歓喜の表情を浮かべて立ち上がった。

「おお！ 遂に陛下がご到着したか！」

「いつ、いえ違います！ つい先程北方の町ガニソンに、エルダー王国第一王女アンナ・エルダーが捕らえられたとの報告がありました！」

ブレインは一気に落胆して、気のない返事を立てる。

「王女？ ああ、そんなのもいたな。そうだなあ……、とりあえず適当な牢屋にぶち込んでおけ」

ブレインは欠伸をして再び椅子に腰掛ける。だがマックは怪訝な顔をして、頭を下げて部屋から出て行こうとする兵士を呼び止めた。

「さっきガニソンと言いましたね？ 何故ウェイランドの国境に近い町に彼女が？」

「さ、さあ……。何でも駐屯していた兵士に捕らえられる前は、何やら町の者達に助けを求めているようです」

マックは更に眉を曲げた。

「助け？ 何に対する助けです？」

「それも判りません。捕まった後は、一言も口を利いていないそうです……」

途端ブレインが割って入ってきた。

「大方我らが怖くて自暴自棄になっていたのだろう。そんな奴大して気に留めるほどでもない。報告が終わったのなら、さっさとこの部屋から出て行け。目障りだ」

それを聞いた兵士は慌てて礼を取り、急ぎ足で部屋を出て行った。これを見たマックは、上官のいい加減な仕事ぶりに、本日三度目の溜息をついた。

（エルダー軍の腑抜けぶりも大したものだったが、我が国も負けず劣らずだな……）

ケルティックの町の西側のすぐ近くの森の中、そこには黒い塗装が施された石造りの要塞のような堅固な建物が聳え立っていた。

箱のような形の巨大な建物の回りを、頑健な高い塀が四角く囲んでおり、ケルティックに負けないレベルの城門が据え付けられている。その城門前の左右横には、ジャイアントダックに跨った二人の戦士の銅像があった。それらは右側の物は剣を、左側の物は槍を持って、勇ましく（カルガモに乗った戦士に威厳を感じるかは人によるだろうが）天に掲げ建てられていた。

この建物の名前は“フューラー”。この国の中央地区の刑務所である。

かつては戦争の捕虜や、反乱者・重大な汚職官僚等を主に収監していたこの国にとって、非常に重要な場所であった。

だが百年近く戦乱がなく、経済豊かで際立った汚職事件などない現在では、収監者はほとんどおらず、一人の老看守と二人の軽度の窃盗犯（要するにこそ泥）がいるだけの寂しい場所であった。

だがこの日物珍しいものがこの刑務所にやって来た。

「なっ、なんじゃあ!？」

この刑務所を管理する唯一の看守は、門前で設置数百年経つ歴史ある番人の石像に向けて立小便をしていた。

だが後ろから遠く聞こえてきた何かを引き摺るような奇妙な音に驚き、ズボンを下ろさぬまま慌てて後方に振り返った。

「ただっ、大蛇!？」

振り返った先、門前の林道からとんでもない者がこちらに近づいてきた。

先頭にいるのは六騎の馬に乗ったウェイランド兵。ここまでは良かった。そういえばこの国はウェイランドに占領されたんだっとな、と祖国を蹂躪された事実を特に感慨なく老看守は思い出した。

だがその六人の騎兵に後ろからついてきている者はとてつもなくった。

それは一匹の蛇だった。もちろんただの蛇ではない。体長は二十メートル近くあり、その太い胴体から、体重は大体五トンはあると考えられる。その竜にも負けない巨体には、灰色の硬い鱗でびっしりと覆われていた。頭から尻尾の先までには、釘のような細く鋭い背びれが、後ろ向きになって一直線に綺麗に並んで生えている。そ

の背びれの各々長さは、最前部の頭部に生えているものが一番長く、最後部の尾の部分に生えているものが一番短かった。

顔にある凶悪な眼の色は赤く、二本の毒牙が生えた口が、拘束具等は一切取り付けられず、剥き出しになっていた。

老看守はそのおぞましい怪物の姿に怯え、腰が抜けてしゃがみ込む。

怪物は別段暴れる様子はなく、おとなしく騎兵達に付き従っていた。やがて彼らは老看守のすぐ目の前までやって来た。

「お前はここの看守だな？」

「はっ、はい！」

老看守は恐怖に震えながらも、何とか力を振り絞って答える。すると一人のウェイランド兵が後ろにある何かを掴み上げて馬を下りた。よく見るとそれは人だった。このウェイランド兵は後ろに小さな少女を乗せていたのだ。

「新しい収監者だ。牢に入れておけ」

ウェイランド兵は両手足に枷を付けられた小柄な少女を、物を投げるかのように、老看守の前に突き出した。

「ええっ！？　こんな子供が何をしたというのですか！？」

「そいつはアンナ王女だ。お前も国に仕えていた者ならすぐ気付け」

咄然とする老看守に向けて、もう一人のウェイランド兵が、後ろにいる怪物を指差して話しかけてきた。

「それと今日から我々も、ここにいるバジリスクと共に、ここの警

護に就くこととなった。これから先にここにぶち込められる者が増えるだろうからな」

青くなる老看守の前では、手枷足枷を付けられたアンナが先程から全くの無表情で立っていた。眼前にある門を見て、一言何かを呟いたように見えたが、誰もそれに気付くことなく、アンナは刑務所の中へと通されていった。

「ふぁあああ〜」

昨夜まで異形と死闘を繰り広げていたとは思えない、気の抜けた声を上げて、クシユウは目覚めた。そして寝ぼけた眼で、頭を掻き揚げながら周りの様子を眺める。

（病院？）

それがクシユウの第一印象だった。正確には病院ではなく診療所である。

それほど広くない木造の部屋に、カーテン付きの白いベッドが二列五つずつ、合計十個並んで置かれている。クシユウはその列の片方の一番右側に寝かされていた。

自分のベッドも含めてカーテンは全て折りたたまれたままで、中の様子は隅々までよく見える。

患者は自分以外にもう一人いた。自分の右横の二つ向こうのベッ

ドに、胸の辺りを包帯でくるんでいる中年の男性が、折りたたんだ布団に両足をかけて、ふて腐れた眼で天井を眺めて寝そべっている。あの包帯は恐らく火傷によるものである。火事にでも巻き込まれたのだろうか？

起き上がって自分の身体を眺めてみると、腹や顔などに一応の手当てが為されていた。

「こんにちは」

とりあえずクシユウは隣の男に挨拶をしたが、意識が無いかのように男は何も答えない。仕方がないので再びベッドに寝転び、色々と思案する。

（うゝん。どうしたんだっけ、俺？）

一瞬記憶喪失？と不安に思ったが、そんなこともなく、直ぐに昨日の出来事が頭の中に蘇ってきた。

（あつ、そうだ！ 確か俺、あの怪物と戦って……）

怪人の攻撃で痛手を受け気絶したのだ。そこまで思い出してクシユウは跳ねるように起き上がった。今まで黙っていた隣の男がそれに僅かに驚き、クシユウに振り向く。

そんなことは気にせず、直ちに病院を飛び出しそうになるが、病室のドアに手をかけた辺りで、頭が冷えてきてピタリと動きを止めた。

（一体何を急いでいるんだ、俺は？）

心配すべき相手はアンナであるが、どうもあの怪人の狙いは自分

の方で、アンナではないらしいことはクシュウには大体判ってきた。そもそもあの怪人は、あの時に自分が深手を負わせたのだ。今自分が無事であるということは、あの怪人はまだ再襲撃できる状態ではないということである。いやもしかしたらその怪我が元で既に死んでいるのかもしれない。

状況を見る限り、どうやら自分は森で倒れた後、町の医療施設に運び込まれたらしい。アンナを探すのはこのことを片付けてからでいいだろう。

夜間は町の明かりや音が、森の中からも確認できるほどであったので、あのまま森で迷子になっているということは恐らくないはずだ。

そこまで考えたクシュウは大分落ち着いて、あまり音を立てないように（病室にはほとんど患者がいないので、あまり意味が無いのだが）ゆっくりとドアノブを回して隣の部屋に入ってしまった。

隣の部屋、診察室と思われる場所には、白衣を着た三十代ぐらいの赤髪の男性が一人いるだけだった。

この主治医と考えられるその男性は、机の上でクロスワードパズルに懸命になっていたが、ドアを開けたクシュウに気がつき、一旦それを中止し、親しげな口調で話しかけてきた。

「おお、眼が覚めたか。おはような」

「ええ、どうもありがとうございます」

とりあえずタメではなく丁寧語でクシュウは挨拶する。早速状況を知るためにその医者に質問した。

「ここはガニソンの病院ですね？」

「ああそうだ。それで私がこの唯一の医者のカレメンズだ。初め

ましてだな」

クレメンズは部屋の片隅にいくつか置いてある小ぶりの椅子を持ってきて、クシュウの前に置いた。クシュウは一礼して、なるべく礼儀正しくそこに座る。

「それで……、私はどういう風にしてここに？」

「森で倒れていたのを町の者達がここに運んだんだよ。小さい女の子が一人、町の中を走り回って君を助けるよう言ってきたな」

クシュウは「そうでしたか」と満足げに頷いた。どうやらアンナは、あの後自分を探し出して、町に急患を求めたらしい。

「一体あそこの森で何があったんだね。何だか相当な戦闘の跡があったようだが？」

「ええ……その、森で魔物に襲われまして」

訝しげに聞くクレメンズに、クシュウは少し苦々しく答える。嘘ではないが、詳しく説明すると色々と面倒なことになりそうだ。この返答に、クレメンズは顔に明らかな恐怖を表した。

「やはり魔物なのか！？ この町の近くに魔物が出たのか！」

「ええ、でも大丈夫です。もうやっつけましたから」

クシュウは迷わずそう口にした。

実際にはあの怪人が死んだのかどうかは判っていない。だが例え生きていても、あの怪人がこの町の一般市民を襲うことはないだろう。根拠はないが、クシュウは何となくそれを確信していた。

だが何故かクレメンズは未だに安心していないようであった。

「やつつけた……？ 他にはいなかったのか？ 君を運ぶ途中で、森の奥から物凄い鳴き声が聞こえたんだが？」

「鳴き声？」

「ああ。雄叫びというより悲鳴に近い感じだったな。あれは何だったのか……？ 狼とはどうも違うような気がするんだが」

クシュウは当惑した。あの怪人はまだ生きていたのか？ しかしだとしたら“悲鳴”とはどういうことだろうか？ 自分と戦った後で、また別の敵とでもあったのだろうか？

まあ考えても仕方がない。クシュウは思考をアンナのことに切り替えた。

「ところでさっき言ってた子……、“アン”はどこにいますか？ この病院にはいないみたいですけど……」

アンナがこの国の王女と知れるとまずいので、名前を少し暈してクシュウはクレメンズに問うた。だがそれに、クレメンズは何故か気難しい顔をして見せた。

「あの子はこの町にはいないよ……」

「いない？」

「私達が森の中で君を助けに行っている間に、どういうわけか、この町に立ち寄っていたウェイランド兵に連れて行かれてしまったんだ。なにやら『大手柄だ！』とか言っていたようだが……」

クシュウは愕然とした。あの怪人への警戒に気を遣うあまり、クシュウはウェイランドという大きな敵の存在をすっかり失念していた。

クシュウは掴みかかるようにして、クレメンズに詰め寄る。

「一体何処だ！？ 何処に連れて行かれた！？」

「すまないが知らん。そのウェイランド兵は竜騎兵でな、ワイバーンに乗せられて空へと連れて行かれたよ」

クシユウは息を呑んだ。それだけ聞けば、アンナの行き先は十分推察できた。

恐らくそのウェイランド兵はアンナの正体に気付いたのだろう。

だとしたら連れて行かれるところは一つ、王都ケルティックだけだ。

クレメンズが「ちなみに病室にいるもう一人の患者は、そのウェイランド兵の一人でな、その子を捕まえようとして返り討ちにあったそうだ。いやあ、見かけによらずやるもんだ」と続けて口にしていたが、それは焦ったクシユウの耳には届かなかった。

「悪い！ 俺はここで退院するわ！ 俺の服とかはどこだ！？ あと治療代は！？」

クシユウは冷静に聞いたつもりだったが、その声はどう聞いても落ち着きのかけらもなかった。

クレメンズの方は特に慌てず、ゆっくりと立ち上がると、すぐ傍にあった別の部屋のドアを開けて中に入っていた。クシユウは跡を追おうとしたが、クレメンズはすぐに戻ってきた。

手にはクシユウの荷物一式が抱えられていた。怪人に襲撃された時に、全部あの木の下に置いてきていたのだが、どうやら見つけて回収してくれていたようだ。

「ああ、ありがとう！ ええと、金は……」

クシユウは奪い取るようにして、クレメンズから荷物を取ると、必死に財布を探した。するとその荷物の中に見慣れないものがあっ

た。

それは斧だった。布で刃の部分が包まれているが、形と大きさからして戦闘用の物だと判った。一瞬「何でこんなものが？」と口にしそうになったが、途中で気がついた。これはあの怪人が使っていた武器だ。

「あの森に落ちていたんだが……、お前のじゃないのか？」

「いつ、いや俺のだ。ありがとな」

本当は違っのだが、大した問題ではないとクシュウは考えた。どのみち自分には武器が必要だ。

すると唐突にクレメンズは真顔になって、クシュウに問いかけた。
きた。

「あんたの事情はさっぱり判らんが、空気読む限り、あの女の子を今から助けに行くということか？」

「ああそうだ。それがどうした？」

クレメンズは何やら値踏みするような視線でクシュウを見詰めたが、突然背を向けて先程クシュウの荷物を取りに言った部屋に再度入っていた。

クレメンズの意図が判らずクシュウは戸惑った。しばらくしてクレメンズは戻ってきた。今度は何やら手にボールのような物を持っている。

「これは？」

「あの病室にいるウェイランド兵の荷物にあったもんだ。なんか知らんが凄い武器らしいぞ。これを取った途端、『絶対にピンは取るな！』ときつく言われてしまったからな」

先程の話を聞いてなかったクシユウは、あの患者はウェイランド兵だったのか、と意外に思いながら、クレメンズの手にあるその武器（？）を用心して見た。

丁度手で握れる大きさのそれは、一見水晶玉のように見えた。水色の半透明な球体に、変なものが一本生えている。それはカラクリのゼンマイのような形をしていて、この水晶に似た物体には明らかに不似合いな物である。これがその“ピン”というものだろうか？ 良く見るとその玉からは僅かに魔力が感じ取れる。恐らく魔道具の一種なのだろう。最もこれのどこが武器なのかさっぱり判らないが……。

「あんたにやるよ」

「はい？」

やる？ 患者の物を勝手に？ ますます意図が判らずクシユウは更に戸惑った。

「なんだか面白そうなことしてるみたいじゃないか。さつき言ってた魔物というのもウェイランド関係だろう？ あいつら魔物を沢山手なずけて兵力にしてるそうだからな」

「ああ……、まあ、そんなところだ」

恐らくは違う。奴がウェイランドと関係あるのかどうかは判らないが、少なくともあの怪人はウェイランドの兵ではないのは確かだ。だがこれも面倒な話になるので、クシユウはとりあえず肯定した。

「さっさと行けよ、囚われのお姫様を助けにな！ お前の白馬は外で待ってるぞ！ あのム力つく外人どもを蹴散らしてきな！」

何やら少々熱くなっているらしいクレメンズに、クシュウは苦笑をした。“白馬”という言葉に疑問符を浮かべながらもクレメンズに礼を済ませ、見の支度をその場で整え始める。

クレメンズがくれた変な玉を、背負ったシヨルダーバックに入れて、クシュウは病院の出口を強引に叩き開けた。すると病院の真ん前、町の道の真ん中に、まるで石像か番犬のようにして、あるものが佇んでいた。

「グエツ！」

それは一羽のダックだった。もちろん今までクシュウ達と行動を共にしてきた、あの少年ダックである。

どうやら外でずっとクシュウを待っていたらしい。ダックは嬉しそうに尾羽を振って、クシュウに近寄ってきた。クシュウは安堵の息を漏らし、ダックの頭をやさしく撫でる。

「よろしくな、相棒」

第十話 大蛇

日がそろそろ沈み始める時間、昼頃に新しい受刑者を迎えた刑務所フューラーに、突如一人の襲撃者が現れた。

門番をしていたウェイランド兵は、門前の石像に先程の老看守と同じように立小便をしていた所を、突然その襲撃者に後ろから斬られた。

獲物は鋭利な斧で、その兵は脳天から尻の先まで、野菜を切るように身体を綺麗に真っ二つにされたのだ。恐ろしい切れ味と容赦の無さである。

その襲撃者は鋼鉄製の門の錠を叩き斬り、思い切り門を蹴飛ばして強引に開門させた。こそこそするようなことは一切しない、堂々とした侵入である。襲撃者の正体は当然の如くクシュウであった。

「何者だ！ 貴さ……ぐぼお！？」

突然の来訪者に、慌てて駆け寄ろうとするウェイランド兵を、クシュウは瞬時に詰め寄り、ためらいなく首を刎ねた。

同じ刑務所前の庭にいた三人のウェイランド兵は、クシュウに次々と魔法による氷の矢を放った。だがクシュウはそれらの攻撃を全て斧で弾き返し、凄まじい走力で急接近して、一人一人斬り払っていった。

最後の一人を倒し、刑務所の入り口前に顔を向けると、そこにはとんでもない番人がクシュウを睨みつけていた。

（あれは……蛟竜？ いやバジリスクか！？）

それはウェイランド兵がフューラーの番犬として連れてきた大蛇、

「ギシャアアアアアア！」

技を破られたと知るや、バジリスクは鋭い牙を向けて、猛牛のよう
にクシュウに突進してきた。クシュウはそれを右に横転して、紙
一重で避ける。

何もない空間を噛みつけたバジリスクは、即座にクシュウが避け
た右側に首を曲げる。だがその時既にクシュウの一撃が眼前に迫っ
ていた。

「だりゃあ！」

クシュウはバジリスクの眉間目掛けて、大きく斧を振り下ろした。
この一撃で勝負は決まった。クシュウの斧は、銃弾や魔法をも跳
ね返す頑強なバジリスクの鱗と頭蓋を、スイカを割るようにサク
リと叩き割ったのだ。

バジリスクは悲鳴一つあげることなく絶命した。多くの伝承や物
語で語られるおぞましきとはかけ離れた、実にあっさりとした最後
だった。

クシュウは斧を引き抜き、血と脳汁がたっぷり付着した刃を、不
思議そうな顔で眺めた。

（何で出来てんだよ、これ？）

この斧は魔道具ではないようで、魔力を増幅させる効果は無かつ
た。だが魔法の力を纏わなくとも、この斧を切れ味は信じられない
ものであった。

金属製には間違いないが、鉄製とはどうも違う。どういう製法を
とればこんな業物が造れるのか、クシュウがそんなことを考え込ん
でいる最中、刑務所の建物から何やら話し声が聞こえてきた。

（しまった！ まだいたのか！？）

クシュウは即座に刑務所の扉を蹴り壊し、内部に潜入した。刑務所に入つてすぐの部屋、恐らく受け付けを行うためのものと思われるそこには、一人のウェイランド兵が鏡に向かって何かを喋っていた。

クシュウの侵入に気付き、背後に振り向いた瞬間、鏡面がチラリと見えた。そこにはこのウェイランド兵とは明らかに違った人物が映っていた。しかもその鏡から「どうした！？ 何があった！？」と声が聞こえてくる。どうやら千里鏡で遠方の人物と連絡をとっていたようだ。

ウェイランド兵は怯えながら何とか剣を引き抜こうとするが、その前にクシュウは間合いに入り、ウェイランド兵を千里鏡ごと一刀両断した。肉が裂かれる音と、パキンと硬いものが割れる音が刑務所内に同時に鳴る。

クシュウはまだ止まらなかった。部屋の中にはもう一人分、人の気配がしたからだ。クシュウは即効でその気配の主に接近し、部屋の机の下に隠れたそれを無理矢理引っ張り出した。

「ひひひひひひ！ やめてくれえ！」

それはエルダー兵の制服を着た老看守だった。魔物にでも襲われたかのように、クシュウに助命を求めている。

どうやらこの刑務所の以前からの勤務者らしいと判断したクシュウは、老看守に少し落ち着いた声で話しかけた。

「アンナはどこだ？ ここに連れてこられたんだろう？」

「あ、ああいる」

「だったら案内してくれ」

クシュウなりに優しい口調で話しかけたつもりだが、先程の戦闘に全身に血を被ったクシュウの姿に、老看守は今にも心臓が止まりそうな様子であった。

怯えて何も喋らない老看守に、クシュウがグツと顔を近づけると、老看守は慌ててブンブンと首を縦に振る。クシュウは老看守を強引に立ち上がらせると、引っ張るようにして監獄への道に同行させた。

「何だと！ それはどういうことだ！」

フューラーで事が起きるのとほぼ同じ時間、エルダー王宮にブレインの怒号がスピーチのように響き渡った。執務室の中、それを聞いたウェイランド兵が僅かに怯えながら返答する。

「どういう事といわれましても……、お伝えした通りです。奉迎隊・開拓隊はあの遺跡の前で壊滅していたんです。まだ正確に解析できていませんが、状況から見てもほぼ全滅かと……」

「馬鹿な……。犯人はまだ判っていないのか？ そうだ！ 陛下はどうされた！ 遺跡から出てこられた様子は！」

「はっ、はい。それがまだ判りません。いま探索の兵が中を調べている所です……」

ウェイランド兵はブレインの剣幕におどおどしながら答える。そ

の時、別のウェイランド兵が執務室の中に飛び込んできた。

「大変です！ 先程千里鏡からの報告で、ケルティック近隣の刑務所フューラーが何者かに襲撃されたようです！」

今まさに怒声を上げようとしていた最中のブレインは、この報告に鬼のような目でギロリとそのウェイランド兵を睨みつけた。数時間前のお気楽ぶりとはかけ離れたブレインの剣幕に、先程の兵と同様に彼もまた恐怖で立ちすくむ。

「襲撃……？ ほう、誰がだね？」

「そつ、それが判りません。報告の最中に後ろから攻撃されたようで、その後通信が途絶えました」

ブレインは「そうか……」と静かに呟いた。一瞬落ち着いたかと思うと、いきなり火山が噴火しかたのような豪勢な声で、眼前の二人の兵に命じた。

「ケルティックに在中している全ての兵に伝えろ！ いまからフューラーに向けて進軍する！ フューラーはこの町のすぐ近く、多少足並みが乱れても構わん！ ありったけの兵を早急に向かわせろ！ 襲撃者を絶対に逃がすな！」

二人は逃げるようにして、命令のために執務室を出た。その後ブレインはすぐ傍に置いてあった武器を取り、出発の準備を始める。この様子に今まで部屋に一緒にいたマックが惚けたようにブレインが問いただした。

「話が見えないのですが……、なぜフューラーに？」

「あの女だ。あいつはあの遺跡の近辺の町で捕まったんだ。きっと

あの小娘が何かしたに違いない。とっ捕まえて全部吐かせてやる！」

マックは「そうでしょうか？」と言いそうになった。だが腹の底が煮えたぎるような怒りに震えるブレインに対し、変に刺激を与えない方がいい思い、口をつぐむ。

「お前もさっさと準備をせんか！ 敵に逃げられるぞ！」

こっちに怒りの矛先を向けられてはたまらないと考え、マックはやる気無さそうに答え、さっさと部屋を出て行った。

フューラーの監獄内。過去の情勢が元で、そこには実に多くの牢部屋があつたが、現在そのほとんどが使われていない。そのせいで各々の部屋の手入れは全くされておらず、錠前が錆び付いていてちゃんと開け閉めが出来なかったり、壁の一部が脆くなつて崩れてしまつていたりと使えない部屋が沢山あつた。

だが一部のある区域の牢は、何年放置されても全く老朽化が見られず、見た目は新築同然（ちゃんと掃除をしていれば）の部屋が並ぶ場所があつた。

魔法による特殊な建築法で造られたその場所は、かつての上級収容施設、すなわち政治的に重要な人物を閉じ込めておく場所であった。現在では受刑者は大概この部屋に放り込まれる。何故ならこの刑務所の牢の中で一番保存状態が良いからだ。

だがこの日、過去の受刑と同じぐらい重要な人物が珍しくこの場所の一室に収容された。アンナ王女である。

「ふあああああゝあ」

白い壁と鉄の骨組みで囲まれた部屋の中で、今まで猫のように地べたに横向けに寝ていたが、唐突に起き上がって、気の抜けた声を上げて欠伸をした。

（あれ？ 私どうしたんでしたっけ？）

寝ぼけが元で記憶がはつきりせず、何かを思い出そうと頭を動か始める。

だがクシュウの時と違って、全てを思い出す前に事は起こった。左右対面して並んでいる牢室の真ん中の廊下、その先の別通路の入り口へと続く扉が、突然強引に開け放たれた。いや叩き破られた。

「クシュウさん！？」

そこにいたのは見間違いなくクシュウだった。

「アンナ！」

クシュウは即効でアンナのいる檻の前に駆けつけた。

「どうしてここに！？ ていうかここはどこでしたっけ？ ああつ、そうだ！ 私捕まってこの刑務所に送られたんでした！」

「ああ、そうだ。それで俺が助けに来たんだ！ 以上説明終了！」

クシュウは鉄格子の扉に手をかけ、思い切り力を込めて開けよう

とする。だが当然の如く扉は開かない。

「駄目です！　ここは魔法による封印が施されていて、簡単には壊せません！　同じ魔力を宿した鍵を探さないと！」

アンナが鉄格子に掴んで、「鍵を探して！　多分執務室にある！」と言ってきた。だが……

「鍵ならある。ちょっとそこどいてろ」

クシュウの言葉に、アンナは戸惑いながらもサツと鉄格子から離れた。するとクシュウは両手に斧を構えて、檻の錠に向けて振り下ろした。

その一撃で結界強化が施された錠と鉄格子の一部が、実にあっさり、その銀色の斧に粉碎されてしまった。支えが無くなった扉は、玩具のようにたやすく開かれる。アンナは少し驚きながらも、迷わず檻から出てきた。

「すごいですねそれ……。あの異界魔が持ってた得物ですよね？」
「ああそうだ。とにかく早く出るぞ！　さっき俺のことを報告した兵がいたんだ。すぐ増援が来るかもしれない」

するとアンナは何やら嬉しそうな顔で、スツとクシュウに向けて右手を差し出した。これにクシュウは訝しい顔をする。

「どうした？　足が悪いのか？」

その言葉に、急にアンナは恥ずかしそうな顔で、手を引っ込めた。この奇怪な態度にクシュウは当然ながら首を横に曲げた。

「いえ、そうじゃないんです！ そつ、そつですよ！ やつぱり自分で走ったほうがいいですよ！ はははははっ！」

「はあ……？」

「だってほら……、何かこう……すごくいい雰囲気じゃないですか！ 囚われのお姫様がこうして、かつ……カッコいい騎士様に助けに来てもらえるなんて。多分滅多に体験できないと……何となく思えますし……、それで……ええと」

あたふたしながら喋り倒すアンナの姿に、クシュウは呆れて深い溜息をついた。

ちなみに今のクシュウの姿は、質素な布の服を着ており、背中には細長い青のウエストバッグを背負い、右手には斧を持っている。随分簡素な身なりである。そして何よりも目立つのは、先程の戦闘の返り血により、今のクシュウは全身が真っ赤に染まっていたことだ。

その地獄の鬼のような姿は、物語に登場する騎士のイメージとは大分違っていた。だが今までの経験で、血や人が死ぬ場面を何度も見てしまったアンナは、その程度の残忍な様は、ほとんど気にならなくなっていた。

普通なら一生のトラウマを持ってしまっても不思議は無いのだが、やはりこの王女は見かけによらず神経がかなり太いのもかもしれない。

「ご期待を裏切るようですが、アンナ様……」

「はい？」

突然いつもの丁寧語に戻るクシュウに、アンナはキョトンと表情を変えた。

「私はそんな騎士になれるほど勇敢ではありません。以前あの怪物の雄叫びに怯えて、山の中をせわしく逃げ回った経験があります

ので」

「そうなんですか？」

『それがどうしたの？』と言わんばかりの困った顔をアンナは見せる。クシユウは真剣な目線で話を続けた。

「それに今は私と一緒にいる方が危険なのかもしれません。どうやらあの怪物は私に狙いを定めているようです……。このままだとアンナ様を無用な危機に晒す可能性があります」

「え！？ 危険って……、じゃあその斧は？」

「ただの落し物ですよ。多分あいつはまだ死んでません。いつまでも私と一緒にいたらアンナ様も死ぬかもしれませんね」

恐ろしいことを特に感傷無く言うクシユウに、アンナは息を呑んだ。

「とにかく今はこの刑務所から出て、ウェイランドの陣地から離れることを優先しましょう！ こんな所でいつまでも無駄話はできません！」

クシユウはいきなり声を高くして、呆然とするアンナの手を引っ張って駆け出した。アンナもすぐに我に返り、クシユウと共に刑務所の出口へ自ら駆けて行った。

刑務所のすぐ外には凄まじい光景が広がっていた。元々クシユウが六人のウェイランド兵を血祭りに上げた時点で、この刑務所と高堀の合間の空間は殺伐とした光景と化していたのだが、現在はその面積と密度が格段と上がっていた。

そこらにはクシユウが殺した数を遥かに上回る、何十人というウェイランド兵の、真っ赤に染まった死体が転がっていた。

そしてその死体が転がる風景の真ん中に、何とあの怪人が多勢のウェイランド兵と交戦していた。

「あいつ……、ついにここまで来たのかよ……」

こういう事態にすっかり慣れてしまったらしい。クシユウは特に驚く様子も無く、大きく息を吐いた。

戦況は怪人一人に対し、おおよそ三十人のウェイランド兵が圧倒的に押されていた。

十人のウェイランド兵が配列を組み、一斉にかつ連続して、氷の魔力を纏った槍を怪人に向けて次々突き出してきた。

だが怪人はそれを曲芸師のように身軽な動きで、容易く交わしていく。そして一瞬の隙を突いて、槍と槍の間に入り込み、ウェイランド兵達の間近に接近した。

ウェイランド兵は慌てて、距離を取ろうとするが全ては遅く、怪人の右手の鉤爪でズタズタに切り裂かれていった。

槍兵達を全員葬った矢先、怪人の背後から二人の馬に乗ったウェイランド兵が、不意を狙って突進してきた。

馬上から槍で串刺しにしようとするが、これも難なくかわされ、すれ違いざまに怪人は一騎の馬の足を蹴りつけ落馬させた。馬の足は見事に叩き折られ、この馬はもう二度と草原を駆けることは叶わないだろう。

落とされて横向きに倒された騎兵は、直ちに起き上がろうとして

首を真上に向けた。その瞬間、あの怪人の足の裏が視界いっぱいに映し出された。直後にグチャ！と嫌な音を立てて、騎兵の頭は卵のように怪人の足に踏み潰される。

残った一人の騎兵が、その隙に怪人に魔法を放とうとしたが、発射直後に喉元に何かが突き刺さり、あっさりと絶命した。

怪人は一人を踏み殺したと同時に、騎兵の持っていた槍を拾い上げ、一分の隙も無くもう一人に投げつけたのだ。

残りの十数人のウェイランド兵はすっかり腰を抜かし、一目散に門の向こうに逃げ去っていった。

何人かが外に出た後「バジリスクを放て！」という声が聞こえてきた。どうやら外にまだ待機している兵がいるらしい。しかもバジリスクとは……。

怪人が彼らを追おうと一步踏み込んだ途端、何かの気配を感じ取り、門の上の空を急に見上げる。その空から飛行する何かが、こちらに向かってきているのが見えた。その正体は直ぐに判った。それは二騎のウェイランドの竜騎兵だった。

怪人は即座に腰から何かを引き抜いた。怪人の両手には奇妙なグリップが握り締められていた。怪人はそれを、ふりかけを振るようにしてシャッシャッと振ると、グリップから収納されていたらしい刃がジャキン！と飛び出た。

それは世に武器と呼ばれる物品の中では、いったい何に分類すればいいのか、かなり迷う形をしていた。少なくとも剣や槍ではないだろう。

それはグリップの周りに、銀色に輝く六本の片刃式の剣が、螺旋を描くようにして取り付けられていた奇妙な物だった。その形状は武器というより風車の羽根車のように見える。

怪人はそれを持ったまま両腕を交差させ、前方の上空からどんど

んこちらに向かってくる竜騎兵に向けて力いっぱい投げつけた。

するとどうだろう。その風車のような武器は、見た目どおり風車のように高速で回転して、真っ直ぐに竜騎兵に向かって飛んでいったのだ。あれは何かの魔法の効果なのか、それとも原理的にあいう飛び方が出来るものなのかどうか、傍観しているクシュウとアンナには全く判らなかった。

二つの回る刃は、今まさに怪人に向けてアイスプレスを当てようとした騎兵達に見事命中した。空中に二人の首が、ほぼ同時に高々と舞い上がる。騎兵を殺されたアイスワイバーン達は、命令を見失い、何処へともなく飛び去っていった。

目標を倒した二つの刃は、不規則な動きで空中を旋回し、怪人の方へと戻っていく。怪人はそれを、ボール遊びでボールをキャッチするかのような実に自然な動きで、回転する刃のグリップを掴み受け止める。

これを見たクシュウは「（やはり魔法の力か）」と納得した。普通の武器があんなおかしな動きをし、尚且つ使い手を一切傷付けずに、使い手の掌にピッタリと受け止められるなど、常識的にまずありえない。ありえるとしたらやはり魔法の力であろう。最もあの風車刃からも、銀の銃と同様に魔力の波動が何一つ感じられなかったが、まあそういう武器も世の中にはあるのだろう。

そう考えている矢先に、新手はすぐにやってきた。騎兵を倒した怪人が、早速門に顔を向けると、そこには三頭の巨大な蛇・バジリスクが怪人を睨みつけていた。

先程クシュウが倒したバジリスクとは体格がひと回り小さかったがそれでもあれだけの大きさの魔物が、三匹揃って敵意を向けている様は、先程のバジリスクを遥かに上回る威圧感がある。

だが怪人はそれに一切動じることなく、両腕の風車刃を構える。

「アンナ！ 眼を閉じる！」

言うが速くクシュウは眼を瞑り、傍にいるアンナの両目を右掌で塞いだ。

その直後。バジリスクの「ギシャア！」という鳴き声が放たれたと同時に、一帯の空間がほんの一時的に真っ赤に変色した。

バジリスクが三匹同時に魔眼を放ったのだ。これだけの光をまともに見てしまえば、身体を固められない者など常識的に考えてまずありえない。それどころ硬直が強すぎてショック死することもある。

しかしそのありえないことが、今まさにこの場で起こった。何とあの光を真っ向から見たにも関わらず、怪人は平然としていたのだ。少し前にここでクシュウが、バジリスクの魔眼を精神力で跳ね除けるといふ大技をやったのけたが、それでも少しの間肉体を硬直させられるという、相応の効果を受けていた。だがこの怪人は、その光に対し、何らかの影響を受けた様子は微塵も感じられなかった。

何らかの防護策をとったようにも見えない。怪人自身は相手が何をしてきたのか判らず、困惑している様子だった。あの銀色の仮面に何らかの特性があるのだろうか？ いや、もしかしたらこの怪人は、元々こういった“余計な光”は一切見えない視覚を持っているのかもしれない。

己の最大の技がひとかけらも通じないことにバジリスクが動揺している隙に、怪人はバジリスクに向けて風車刃を、先程の竜騎兵達の時と同じ動作で投げつける。

猛烈な速度で飛んでくる刃に、二匹のバジリスクの太い首が丸太のように切り落とされる。だがすぐに残りの一匹が、強い怒りを表し、怪人に突っ込んでいた。

怪人はその突撃をジャンプして回避する。もう見慣れてきたもの

ではあるが、あの巨軀であの身軽さはつくづく恐れ入る。だがこの時はただかわしたただけではなかった。

先程投げられ旋回して戻ってくる二本の風車刃を、怪人は空中でキャッチして見せたのだ。サーカスの曲芸のように、怪人はクルクルと空中で回転し、見事血ですっかり濡れてしまった地面に着地して見せた。

攻撃を避けられたバジリスクは、眼前にいるクシュウとアンナの姿を一切無視して、直ちに真後ろに頭を向けた。そこには両手に風車刃を掴んだ怪人が、両腕を上向きに大きく開き、剣舞を舞うような構えでバジリスクと対峙していた。

バジリスクは迷わず怪人に向かって再突撃した。怪人はそれを、身体を大きく回転させて避けて、すれ違いざま右手に持った風車刃で、バジリスクの喉を右側から直接斬りつけた。

大量の血がシャワーのように喉元から噴出し、バジリスクはそこでバタリと倒れた。

血を流しながらヒクヒクと痙攣するバジリスクの喉を、怪人は容赦なく踏みつける。血がさらに噴出し、怪人が更に足に力を込めると、ベキベキと木材を割るような音が聞こえてきてバジリスクは完全に息絶えた。

バジリスクに止めを刺した怪人は、ようやくと言いたげな雰囲気です、後方の刑務所入口に立っているクシュウに向かって振り返った。

「ああっ！ こっち向いた！」

強い恐怖を感じたアンナは、そそくさとクシュウの背後に隠れる。だがクシュウは何かを諦めたような表情をして、アンナを横に引き離れた。予想外な行動に意表をつかれたアンナは、不思議そうな顔でクシュウを見上げる。

「離れてろ……。何もしなければ、多分あいつはアンナを襲ったりしない……」

「……え？ でも……」

「いいから離れる！ 正直言って邪魔だ！」

心配そうな顔をしながらアンナは、言われたとおりにゆっくりとクシュウから離れていった。クシュウは斧を棒切れのようにブンブン振り回し、ズカズカと怪人に近づいていった。

そして昨日の夜に、自分が刺した怪人の腹を見詰める。怪人の腹には多少の痕はあったものの、傷口自体は完全に塞がっていた。

あれほどの傷、人間ならば例え魔法治療を行っても、かなりの日数がかかるはずである。この怪人は相当治療能力が高いのか？ それともこの世界にはない特殊な治療でも行つたのだろうか？

まあ大した問題じゃないと、クシュウは怪人の顔に視線を戻す。

「何となく判ってきたよ……。ようするにお前は戦いがしたいだけなんだな？ そんなに俺を仕留めたいんなら、いいだろう。受けて立つぜ……」

そう言うときクシュウは素早く斧を構えなおした。何やら外から大勢の人間の足音が、この刑務所を囲うように聞こえてきたが、この場の誰もそんな些細なことは気にしなかった。

「来い！ 化け物！」

第十一話 巨人

クシュウがそう一声叫んだ直後、怪人は風車刃を両手に持ったまま、クシュウに向けて左手を突き出した。同時に左手の手甲に取り付けられている装置から、何かが発射された。

銃か？と判断したクシュウは守備のために斧を前に突き出し、素早く右横に動く。

紙一重で回避し、風車刃を投げる前に間合いを詰めようとしたのだが、その機転は外れた。その発射された何かは、こちらに到着する前に一気に広がったのだ。まるで傘を一気に開く場面を正面から見たときのように、それは突如として蜘蛛の巣のような大きな網に変わったのだ。

「なあ！？」

突然のその現象に、当然対処などできるはずも無く。クシュウはその網に捕らわれた。

捕らわれたままクシュウの身体は網と共に後方に吹き飛び、入口の扉を壊し、内部の広間に転がっていく。

「うおりゃあつ！」

クシュウは一時、漁で獲られた魚のような状態になったが、即座に斧で網を断ち切り、脱出する。すると目の前にあの風車刃の一つが接近していた。

「！！！！！！」

クシュウは瞬時に上半身を仰け反らせ、一寸の差でそれを避けた。風車刃はブリッジの姿勢になったクシュウの真上を通り抜け、そのまま持ち主に帰ることなく広間の壁に突き刺さる。

そこで風車刃の動きは完全に停止した。どうやら狭い場所では反転できないようだ。

全身を起き上がらせると、もう一つが飛んできた。クシュウは即座にそれを斧で弾き返す。

弾かれた風車刃は横の壁に激突し、石壁にめり込んで動きを止めた。

入口に視線を戻すと、今度は怪人本人が鉤爪を構えてこちらに接近していた。

「ぐっ！」

右横から振られた鉤爪を、クシュウは斧で受け止める。耳に響く金属音が、刑務所の広間に広がっていった。

怪人は間髪入れず、次々鉤爪による攻撃を繰り返した。クシュウはそれを全て斧で受け止める。だが身体能力において、クシュウでは怪人に到底敵わず、必然的に防戦一行となった。

例えうまく反撃の機会ができたとしても、以前のように体格差を利用したカウンターを受けることは間違いないだろう。両者は手足の長さが全く違う。身長が百六十三センチのクシュウと、二メートルを軽く超える怪人とのリーチの差は、戦況においてかなり深刻な問題であった。

そのためクシュウは、怪人に上手く接近できず、常に一定の距離を取らなければならなかった。大柄な図体にも関わらず、重い攻撃を軽快な動きで打ち出す怪人に、クシュウは形勢を動かす隙を全く見つけることが出来なかった。

場所は刑務所内の通路の廊下に移り、その廊下の中をクシユウは後ろへ後ろへと追いやられていく。不意に怪人が攻撃を止めて、クシユウの方向から見て一步後ろに下がった。

「え？」

戸惑いで僅かな隙が出来た途端、クシユウの腹部に怪人の豪快な蹴りが直撃した。

クシユウは「ぐほ！」と喉を鳴らし、数メートル先まで吹っ飛んだ。てっきり相手は力押しのみでかかって来ると思っていただけに完全に不覚であった。

廊下に転がり落ちて、クシユウはうずくまる。怪人は止めを刺しに、鉤爪を真つ直ぐ向けて近づいてきた。クシユウは何とか起き上がろうと全身に力を込めるが、腹部の痛みがそれを妨げる。

（やばい！ やばすぎる！ ちくしょう腹痛え！）

怪人が目前に迫ったその時、唐突に怪人の背中の中が光った。いや爆発した。

（……へ！？）

ボム！という地味な爆音と赤い光が、極小の太陽のように薄暗い廊下内を一瞬照らした。それと同じく怪人が前方に盛大に吹き飛ばれるクシユウの上方を素通りし、廊下の更に向こうの曲がり角の壁に激突した。怪人の身体が一時壁にめり込み、その後直ぐに地面に仰向けに倒れた。

「アンナ！？」

前方の廊下に目を向けると、何とそこにはアンナが怯えた表情で立っていた。両手にはウェイランド兵達が持っていた魔道剣が握り締められ、しかも刀身が火の魔力を宿して赤く発光していた。

先程の爆発はアンナが放った魔法だと理解するのに、クシュウには少し時間がかかった。

「はあああああああ！」

アンナは恐怖をこらえ、勢いをつけて廊下を走った。クシュウのすぐ後ろに立つと、切っ先を怪人に向けて、飛びっきりの魔法を放つ。

強力な極太の火炎熱線が、洪水のように勢いよく怪人に近づいていく。だがその時すでに怪人は起き上がってしまっており、廊下の右の曲がり角に入って熱線を回避しようとした。

火炎は壁に直撃し、跳ね返った火と熱が瞬く間に散乱した。自分が放った魔法の熱を浴びて、アンナは悲鳴を上げて倒れる。するとクシュウが即座にアンナを掴み上げ、入口へと駆けて入った。

外に出た途端、塀の向こうから拡声の魔法で増幅したと思われる、野太い声が聞こえてきた。

「観念しろ！ フューラーは完全に包囲した！ 抵抗は諦め、おとなしく出てこい！」

なるほど確かに兵の外側から、無数の人間の気配が感じ取れる。先程の兵達の後から、続々と部隊が集結したらしい。

どうやら現在ここは、完全にウェイランド軍によって袋の鼠のようだ。ここはケルティックのすぐ近くなのだから、こんなに到着が早くても別に不思議ではない。

クシュウに抱えられたままアンナが先に口を動かした。

「クシュウさん、どうします？」

「さあな……。いつそのこと、さっさと中に突撃してくれれば助かるんだけどな……」

絶体絶命の状態にも関わらず、二人は平静だった。

二人が今一番問題としているのはあの怪人の存在。追いやるとき刑務所内部に入り込んでしまったため、今奴が何処にいるのか見当もつかない。これではいつ外に出てきて、こちらが狙い撃ちされるか判ったものじゃない。

あの遺跡の洞穴のときのように、怪人の襲来とウェイランドの突入が同時に起こってくれば、混乱に乗じて逃げることも不可能ではないのだが……。

クシュウはちらりと左手側にある広間の木に目を向ける。その木の裏にはあのダックが隠れていた。この刑務所の門のすぐ近くの森に隠れるように言っていたのだが、ウェイランドの軍勢が近づいてきたのに驚いて、ここまで入ってきたようだ。

「来ないな……。ようし突入しろ！」

「な！ ちょっと待ってください！」

ブレインが指令を出そうと声を上げる直前に、マックが慌てて制止をかけた。

「もう少し学習というものをしてください！ 初戦で大量の犠牲者を出したのを忘れたのですか？ 聞いたでしょう、ここに先陣を切って突入した部隊が全滅したと！ バジリスクまでやられたんですよ！ 敵はそんな容易い相手ではないはずです！」

珍しく強い剣幕で話すマツクに、ブレインは「ぬう……」と言って徐々に熱を下げた。

「じゃあどうするっていうのだ？ このままずっと包囲していても仕方ないぞ？」

「勿論です。ですが味方の犠牲は少ないに越したことはありません。それなりに慎重な攻撃を加えましょう」

クシュウは殺気を感じ、アンナと共に左横に飛び上がってその場から離れた。

ズボ！という音が聞こえ、さっきまで自分達がいた地点を見るとそこにはさっきまでは確かにいなかったはずのあの怪人がいた。

しゃがんだ姿勢で右手の鉤爪を地面に深く突き刺している。この怪人は刑務所の屋根から飛び降りて、真上からクシュウに攻撃してきたのだ。

怪人は爪を引き抜き、クシュウと再び真っ向から対峙する。クシュウもまたアンナを手放し、身構えた。

そのときだった。彼らのいるその堀の内側の広間に、何かが飛んできた。その水色の玉のようなものは、カランカランと気の抜ける

音を立てて、こちらに転がってくる。しかも一つではない。

外側から塀を飛び越えて、その小さな物体は次々と内側に投げ込まれているのだ。

「何これ、玉？ 卵かな？」

この緊迫した場に不似合いなものが、いきなり飛んできたのに、アンナはポカンとして首を捻る。だがクシュウにはこの球状の物体に見覚えがあった。

それはあの時ガニソンでクレメンズが自分にくれた、ウェイランド兵が持っていたという妙な形の武器と同じもの。クシュウがそれに気がつくと、直感的に危機を感じ、再度アンナを抱き上げ、その物体から離れた。

その直後に、その物体は爆発した。

爆発と言っても、火薬のように火と爆風を吹いた爆発ではない。それは針を刺された風船のように破裂し、中から膨大な冷気が飛び出したのだ。

「何ですこれ！？ 毒ガス！？」

あまりの出来事に、アンナは絶体絶命とも言つかのように激しく狼狽する。だがクシュウは、これがただの冷気だと判ったので、わりと冷静だった。

あつというまにその場は白い冷気で包まれ、視界はゼロになった。もちろんあの怪人の姿もクシュウ達には見えなくなったが、豪快な悲鳴が怪人の現在地を判りやすく教えていた。

冷気の強さはとてつもなく、その空間は瞬く間に極寒地獄となった。もしあの爆発を至近距離で受けていたら、常人なら一瞬の内に凍死だろう。

別の方角からは、「グエエー！ グエエツ！」とダツクの悲鳴が聞

こえてくる。とりあえず今は無事でいることだけを願おう。

すぐに次の変調がやって来た。丁度門があるであろう方角から、ドゴン！と何かを破壊する大きな音が聞こえてきた。

クシユウは咄嗟に左手に魔力を集中し、魔法で突風を起こす。相応の鍛錬を積んだ魔道士ならば、魔道剣のような増幅器が無くとも、ある程度の魔法は扱える。

風に煽られ、冷気はあつという間に掻き消える。

「今度は何です……あれ？」

驚くのも飽きた、とでも言いたそうな顔でアンナは口を動かした。その音が聞こえた門の前には、何と二人の巨人がいた。

見ると後ろにある門の屋根が、下側から壊れている。この巨人達が門を通ったときに、頭部がぶつかって削れてしまったようだ。

その巨人は、よく見なくてもそれが生き物でないことは誰にでも判った。身長は両方七メートル程。姿はウェイランドの重装の甲冑に似た姿をしており、一体は大剣を、もう一体は鉞を右手にまさかり持っている。そして全身の表面は白く、ガラスのように薄っすらと透き通っていて、僅かながらも白い冷気が立ち昇っているのが見えた。

（アイスゴーレム氷製魔道人形か……。厄介なもの連れてきやがって！）

難題な横槍を入れられて、クシユウは腹を立てた。

相手がたった二体では、混乱の中を掻い潜って逃げるといふ手口は到底使えない。勿論だからといって文句の付けようもない。クシユウはやむを得ず、アイスゴーレムに対して戦闘態勢をとった。横を見ると、あの怪人もまた眼前の氷の巨人に対して、威嚇するようにして身構えている。

二体のアイスゴーレムは、それぞれ同時にクシュウと怪人に襲い掛かった。

巨大な武器が、二つ同時に振り下ろされ、二人は同時にそれを避ける。ドゴオオオン！と雷が落ちたかのような轟音が重なってなり、地面に二つの穴が開いた。

勿論一撃かわされただけで諦めるはずがなく、アイスゴーレム達はそれぞれの敵を追撃した。

一体のアイスゴーレムが鉞を怪人に向けて振り払った。怪人はそれを跳躍して回避する。

アイスゴーレムが二撃目を加えようと、鉞の持ち手を変えた。その一瞬の隙に怪人は一挙に間合に入り、アイスゴーレムの右足の付け根を鉤爪で切り裂いた。

アイスゴーレムの足は、その太さゆえ切断までには至らなかったが、氷製の肉が大きく削れ、全身がバランスを崩して膝を突いた。何とか倒転を避けようと、アイスゴーレムは鉞の柄を杖にして身体を支えたが、怪人はその柄を容赦なく切り落とした。

アイスゴーレムは一気にバランスを崩し、うつ伏せに倒れこむ。頭頂が低くなったアイスゴーレムの頭を、怪人が鉤爪で躊躇いなく突き刺した。

「こんちくしょう！」

一方のクシュウはひたすらに、アイスゴーレムの大剣を避けるばかりであった。

巨体ゆえ俊敏性や攻撃速度はこちらよりも劣るのだが、武器の長さゆえ攻撃距離は圧倒的に相手が上だった。

そのためクシュウはなかなか反撃の為の間合を取れず、ただひたすらアイスゴーレムの攻撃から逃げ続けた。

すると突然、アイスゴーレムの背が爆発した。

爆音と共に強い熱が辺りに広がり、冷え切ったその空間の温度を急上昇させる。

クシュウも今度は驚かなかった。アイスゴーレムの後ろにはアンナが魔道剣を構え、刀身に次の魔法を撃つための魔力を溜めている姿が見えた。

さつき怪人を攻撃した魔道剣は、クシュウに抱えられたときに落としたままだ。だが生憎代わりの武器は、この場には死体と共に、そこらへんにたくさん散らばっていた。

「クシュウさん！　そこから離れて！」

言われたとおりにクシュウは素早くアイスゴーレムの正面、魔法の道筋から離れた。

背を爆破されたアイスゴーレムは、大量の水を汗のように垂れ流しながら、ぎこちない動きでアンナの方向に振り向いた。

「くらいなさい！」

アンナの魔道剣から強力な火炎が放たれ、アイスゴーレムを膨大な炎で包んだ。

アイスゴーレムの全身は、急激な速度でドロドロと溶けていき、驚くほど呆気なく水になって消えてしまった。

怪人はアイスゴーレムの全身を、幾重にも突き刺していた。

アイスゴーレムは生物ではない、動く氷の塊である。そのため急所というものが存在せず、物理的な攻撃ではなかなか致命傷を与えることが出来なかった。

そのため、とにかく怪人は攻撃を繰り返した。鉤爪で突きを加えるたびに、氷の身体からはヒビが入っていき次第に脆くなっていく。ある一撃で遂にアイスゴーレムの身体は砕け、その巨体がボロボロと崩れ落ちていった。

乱入した敵を撃退した怪人は、己の標的である少年がいると思われる方向に振り向く。

ほぼ同時に怪人の視界に赤い炎が広がった。咄嗟に怪人は右に転がり落ちて、ギリギリの距離でその炎を回避する。

姿勢を戻し、立ち上がるうとする怪人の目には、今度はクシュウの姿が大きく映し出された。

「だありゃあああああああ！」

斧を頭上に握り締めたクシュウは、全力で斧を怪人目掛けて振り下ろした。怪人も素早く反応し、その場から横に一步引く。

直撃は避けたものの、斧は怪人の仮面の縁を、僅かにかすった。

怪人の仮面の目に当たる部分の縁には、二本の線が繋がられており、それが首筋まで伸びていた。だがその線は、クシュウの一撃が元で二本とも断ち切られる。

「へっ!？」

線が切断された途端、その断面から蒸気のような白い気体が、熱せられた薬缶のように勢いよく噴出した。

その蒸気（？）を顔面から浴びたクシュウは、動揺して一瞬怯む。その隙に怪人は、左手でクシュウの顔に強烈な張り手を浴びせた。その一撃でクシュウの身体は宙を舞い、怪人側から前方に吹き飛ぶ。

「クシュウさん！」

地面に転がり、叩かれた頬を、痛みで必死に手で押さえるクシュウに、アンナが駆け寄る。

「大丈夫だ。歯が折れたかも知んないけど……」

顔を押さえながら、クシュウは怪人のほうを見た。アンナも同時にそこに振り向く。

その瞬間、二人は驚きのあまり、動きが一時停止した。そこにあった信じられないものの姿に……。

最終話 決着

「あれが異界魔の顔……？」

「なんとまあ……」

怪人は怒りで震え、仁王立ちして二人を睨みつけていた。

クシュウに仮面の線を切られた後、怪人は自らの手で、今まで己の顔を隠していた仮面を剥がしとったのだ。

壮絶な素顔だった。

その顔には人間と同じ二つの目があった。だが皮膚は爬虫類と両生類を合わせたような、異彩な肌色であった。

額と前頭部は一体化しており、顔全体の六割がそれで占められている。そこに後頭部にあるような頭髮に相当するものは何も無かった。

またボツボツした小さな突起が、額全体を囲うようにして無数についている。その大きな額の真ん中には、まるで額と後頭部を二つに分断するかのような浅い凹みが、上下に線をなぞるように入っていた。

口元には四本の爪の様な器官が、上部左右・下部左右に二本ずつ生えている。しかもそれらは独自の生物のように動いていた。その形容は、蟹や昆虫の足を真下から眺めたときの様子にどこことなく似ていた。

その虫の足のような物に囲まれた口の奥には、人間と同じ形状の上下に開く口が、四本足の口とで二重に存在していた。ただし唇などとは無く、上下に並ばれた歯が剥き出しになっている。

この怪人が人間だとは最初から思っていなかったが、予想以上に人間離れしたその異形の素顔に、二人は恐怖を通り越して、ただただ呆然としていた。

「グオオオオオオッ！」

四本足の口を大きく開き、怪人は凶悪な唸り声を二人に浴びせる。アンナは咄嗟に怪人に剣を向けた。

「燃えなさい！ 化け物！」

剣から業火が放たれ、怪人に直線状に向かってきた。

だが怪人は前向きに飛び跳ねて、これをかわし、宙返りしながら二人の間近に降り立った。

怪人がアンナに鉤爪の一閃を与えようとしたとき、クシュウが割り込んで攻撃を受け止める。

「アンナ！ 俺につかまってる！」

言い終わる前に、既にアンナはクシュウの腰にしがみ付いていた。怪人は右手の爪が、クシュウの斧と鏑迫り合いを始めたと同時に、左手でクシュウの胸を殴りつけた。

だがこの手の攻撃を予測していたクシュウは、怪人の拳が命中する直前に、アンナ共々後ろに飛び跳ね、痛手を軽減させて吹き飛ぶ。

二人は数メートル先まで飛び、転がっていたバジリスクの死骸に激突した。

もう吹き飛ばされるのも大分慣れてきたクシュウは、激突する瞬間しっかり受身を取り、迅速に立ち上がる。

ただしアンナは、バジリスクの鱗にまともにぶつかって昏倒していた。

「喰らえ！」

こちらに近づこうと一步前に踏み込んだ怪人に、クシユウはある物を投げ込んだ。ガニソンでクレメンズ医師から貰った。あの魔法爆弾だ。球体についていたゼンマイのようなピンは外されている。これに気付いた怪人は、弾き返そうと右掌を爆弾に向けて振る。だが間に合わなかった。

掌が爆弾に接触する瞬間、爆弾は白い息吹を放射して破裂した。

「グゴオオオオオオオオオオー！」

冷気の爆発を、目と鼻の先で受けてしまった怪人の凍える悲鳴が、刑務所一帯に甲高く鳴り響く。

一方クシユウ達もまた冷気の余波を受けた。爆発の瞬間、クシユウは腰の下のアナを抱きかかえしゃがみ込み、強烈な冷風から身を挺して守る。

冷風が止み、低音の霧が徐々に薄れていくと、クシユウは胸の中にいるアナを離し、立ち上がった。極寒の風を浴びていたのだが、並の人間より丈夫な身体を持つクシユウには。さほど大した痛手ではなかった。

怪人はまだ生きていた。小麦粉を被ったかのように全身を白く染めて、クシユウを睨みつけている。そして鉤爪を、変わらずにこなれた動きで構えなおす。

クシユウもそれに応じて、両手で握り締めた斧を構えて、怪人を睨む。

二人はしばらく無言で、睨み合いを続けていた。双方共に敵の隙を窺ってなかなか動こうとしない。二つの殺気が充満した、精神的に息苦しい空間が出来上がった。

その膠着状態はしばらく続いたが、不意にクシュウが片足を微かにずらし、わざと相手に隙を作った。それに反応した怪人が、間髪入れずにクシュウに襲い掛かった。

（来た！）

幾重もの戦闘で刃先がだいぶ鈍くなった鉤爪が、クシュウに首を目掛けて急接近する。

だが先程の爆弾の威力が大分利いたのか、その一撃の速度は、今までの受けてきた攻撃よりも、少しばかり遅くなっていた。

クシュウは背を曲げて、全身を大きく仰け反り、すれすれの距離で怪人の攻撃から逃げる。

そしてバネのように一瞬で背を伸ばして起き上がり、力強く握り締めた斧の刃を、怪人の右の横腹に叩き付けた。

「グガアアアアアアアアアアッ！」

刑務所一帯に怪人の二度目の絶叫が轟いた。先程よりも強く、そして長く鳴り響く咆哮だった。

全身全霊を込めて打ち付けたクシュウの斧は、怪人の腹の肉に深くめり込んでいた。クシュウはそこで手を止めず、斧に更に力を加え、斧を怪人の肉体に押し込んでいく。

怪人の腹からは、緑色に光る不思議な色の血液が、果汁のようにドロドロと流れてきた。

怪人は咆哮を続け、やがてクシュウは限界まで押し込んだ斧を、思いつき引き抜いた。その反動でクシュウは身体バランスを崩し、その場で腰をつけた。

異色の血が雨のようにその辺に飛び散り、怪人は数歩下がった。やがて絶叫は収まり、怪人は壊れた人形のように後ろに崩れ落ちた。

「……勝った……のか？」

息を荒げながらクシュウは、半ば放心しながら目の前で倒れ付いた怪人を見据えた。

気が抜けたせいか、全身に溜まった疲労と痛みが一斉に巻き返し、今にも怪人と同じようにその場で崩れそうになる。だが何とか気力を保って立ち上がり、怪人に近寄った。

まだ息はあった。だがあれほど凄まじい力と、おぞましい咆哮を、これまで見せてきた怪人は、今は驚くほど静かだった。

どこかボンヤリした視線で、己を見下ろすクシュウを見詰めている。クシュウは気を緩めずに、怪人を睨みつける。やがて落ち着いた口調で怪人に声をかけた。

「お前……、何でこの腑抜けた国に来たんだ？ 狩場ならもつとい所があつただろう？ それとも……、ウェイランドが戦争を仕掛けてくることを、あらかじめ知ってたつてのか……？」

それがクシュウの最大の疑問だった。この国より戦乱の空気が漂った国はいくらでもあるし、魔獣が巢食う危険地帯も探そうと思えば簡単に見つかる。

それなのに怪人はこの国に来た。それは何故か？

考えられるのは、もうじきこの国で戦争が起こるという情報を事前に入手していたということだ。

だとしたらこの怪人は、この世界の情勢を詳しく読み取ることができるということだ。

この怪人の故郷は、この世界の人間達以上の文明力を持った世界なのかもしれない。

もう一つ考えられるのはウェイランド軍が、あの異界魔の遺跡を利用して侵攻を行ったこととの関係である。

あの遺跡に、この怪人をおびき寄せる引き金になるような物があるって、それをウェイランド軍が動かしてしまったとしたら……。

クシュウの問いに、怪人は何も答えなかった。前者の推理が正解であるのなら、もちろんこの世界の言葉も理解できる筈なのだが……。

不意に怪人は、ゆつくりと右手を持ち上げた。クシュウは即座に斧を構えたが、どうやら反撃のつもりではなかったらしい。

怪人は右手の人差し指を、左手の籠手の端に近づけた。そこにある籠手の窪んだ一部分を、怪人は指で押し付ける。すると「ピッ！」と奇妙な音が聞こえた。

同時に上腕を長方形のような形で覆っていた籠手の表面が、突然びつくり箱のようにパツクリと開いた。

「なっ、何だ!？」

怪人の思いがけない行動に、クシュウはどうすればいいのか判らず、その籠手の部位に視線を固める。

開いた籠手の内側の部分には、五枚の長方形の黒い部位が並んでおり、籠手の内側の大部分を覆っていた。

その形は、長く並べられたガラス窓に何処となく似ていた。それぞれの黒い四角の下には、銀色の細長い窪みのようなものが、内側の真下をなぞる様に入っている。

怪人は、今度はその窪みに人差し指を押し付けた。横から横へと単純なものではなく、何らかの意味のある順番があるかのように、それぞれの窪みを押していく。そのたびに「ピッ!ピッ!」と不思議

議な音響が聞こえてくる。

五つ全てを押し終わると、その黒い表面から、突如奇妙な模様が現れた。

その赤い光の模様は、楔形文字のような形状をしていて「ピピッ！ピピッ！」と、これもまた奇妙な音を鳴らして、各部位が一定の順序を経て点滅していた。

クシユウは直感で、それがとてつもない危機的なものではないかと考えた。

それを肯定するかのように、怪人が「ガッハッハッハッハ！」と笑い声と思われる声を愉快に上げ始める。

「相棒！ 来い！」

これでもかというくらい必死な声で、クシユウは味方のダックを呼び寄せた。近くにいたダックはその呼び声に答えて、即座にクシユウに傍にやって来る。

クシユウはダックに乗り込み、すぐに走らせた。そしてアンナに駆け寄ると、馬上からいきなり掴み上げて、かなり強引に相乗りさせた。

「ちょっと！？ どこに行くんですか！？」

事態がさっぱり飲み込めず、僅かに非難めいた声で、アンナがクシユウに問いかける。

「どこだっていい！とにかくここから離れるんだ！とにかく遠くにだ！」

「でも外にはウェイランド軍が！？」

「知るか！ そんなもん！」

怪人の笑い声が木霊する中、二人を乗せたダックは空へと舞い上がった。

「なっ……何だというのだ、いったい……？」

ブレインは呆然と刑務所の城壁の門を見据えていた。冷静を保とうとしているが、額から流れる汗が、その内なる恐怖を全く隠せずにいる。

「私にもさっぱり……。あれは……につ、人間の声ではないですよね!？」

マックもまた、珍しくうろたえた様子で答えを返す。

内部に送り込んだアイスゴーレムが倒されたことは、すぐに判った。理解できないのは、その後に二度に渡って聞こえてきた、地獄の底から聞こえてくるような恐ろしい咆哮だった。

聞き慣れたバジリスクや、アイスワイバーンの鳴き声とは明らかに違うそれに、刑務所を取り囲んでいた兵士全員が、内部で何が起きているか全く見当がつかず、激しく狼狽していた。

するとしばらく固まっていたブレインが、身体を震わせながら口を動かした。

「まあいい……。中にどんな化け物がいようが、このままここで立

ちすんでいても全く意味は無い。突入するぞ！ お前も文句は無いな！」

マツクは無言で首を縦に振った。それを認めるとブレインは右手を空にかざした。

「先鋒突撃！ 我に続け！」

号令と同時に、ブレイン率いる数百人のウェイランド兵が、次々と門を通っていく。

大きな影が塀を飛び越えて、刑務所の外側に姿を現したのは。ほぼ同時だった。

「なっ！ あれは！？」

それに気がついたマツクが慌ててその影に目をやった。その影の正体は、背に人を乗せたジャイアントダックだった。

「逃げるぞ！ 銃兵隊並べ！」

「何だ！？ この化け物は！？」

突入したブレイン達が見たもの、それは先ず大量に転がっているウェイランド兵とバジリスクの死体だった。それはほぼ予想していたことだったので、誰も驚かない。

彼らを驚かせたのは、それらの中に混ざっている、見たこともない醜い顔をした獣人（？）だった。

奇妙な笑い声を上げ、左腕の籠手から発せられた音は、変わらずに鳴っている。だが点滅していた赤い光はほとんど消えており、現在是一片の黒板に二、三本表示されているだけであつた。そしてそれも今まさに消えようとしている。

「何者だ！ 貴様！」

魔道剣を向け、ブレインがそう叫んだ瞬間、怪人を中心に視界全てが緑色の光に包まれた。

（……へ？）

何が起つたのか判らぬまま、ブレインの意識はそこで途絶えた。

「撃てえ！」

数十人の小銃を持った兵が一齐に、クシュウ達に狙いを定めていた。

マツクの命令と同時に、その引き金が引かれようとした瞬間、その場にいる全てが緑の輝きと共に無音で消し飛んだ。

「うわあああああああ！？」

後方から来る熱風と、耳が狂いそうになる爆音に、クシュウとア
ンナは二人仲良く絶叫していた。

遙か後方に存在していた巨大な刑務所が、突然緑色の光に包み込
まれ、瞬時にそれは赤い火球に変じて巨大化した。

薄暗い夜の世界が、一瞬昼に様変わりしたかのように明るくなる。
その光の正体は実に単純な物、爆発の光である。

工事や戦争などで使われる火薬によって生み出されるものとは、
天と地ほどの差がある大爆発が、刑務所を一瞬で爆破・消滅させた
光なのだ。

刑務所からはそれなりに距離をつけていたにも関わらず、その爆
風は空を飛ぶクシュウ達を飲み込み、遙か彼方へ送り飛ばす。

彼らは玩具の飛行機のようにクルクル回転しながら、遙か先の森
の中に墜落した。

木の太い枝に二度激突して横転して墜落し、クシュウ達は三者揃
って地面の土を顔面から被った。

彼らの動きはそこで一旦止まり、気絶したかのように思えたが

「ぬはあ！？」

水の中から這い出たかのように、二人はほぼ同時に、土だらけの顔を持ち上げた。

ダックの方は未だにのびたまま、一応生きてはいるようである。

疲れきった面持ちで二人はゆっくりと刑務所の方向を振り向いた。森の木々で刑務所自体は見えなかった。だがその方角に大型の爆発によって生じる、きのこ雲が立ち昇っているのが見えた。

刑務所フューラーは、取り囲んでいた三千のウェイランド軍もろとも、影も形もなく消えたのだ。たった一人の怪人の自爆によって……。

「……………」

二人は無言だった。ただ無表情で、遠方のきのこ雲を見上げている。

しばらくそれを見据え続け、次第に雲が晴れてくると、二人はまるで長い悪夢からようやく目覚めたかのような、清々しい感情が全身から湧き上がって来た。

二人はほぼ同時に倒れこみ、大の字を描くようにして仰向けに寝転がる。変わった所で息の合った動きをする二人であった。

爆発によって、一時は昼に変異した空は、とつくに元の薄暗い夜空に戻っていた。美しい月と無数の星の輝きが、太陽の無い闇の世界をいつものように照らしている。

夜空を眺めながら、クシユウは独り言のような小さな声でポツリと呟いた。

「また空から来たりしてな…………、流れ星みたいな光と一緒に…………」
「それは嫌ですね。もう終わりでいて欲しいですよ…………」

「何だ？ もう囚われのお姫様はいいのか？」

「一回体験したらもう充分です」

二人は笑った。何が可笑しいのか当人達も判らなかったが、とにかく心の底から楽しい気分になった。

しばらくして、遠くから大勢の人の足音と声が聞こえてきた。声を聞く限りではウェイランドの者ではないようだ。おそらくあの爆発に気付いたケルティックの住人達だろう。

「そんで……、アンナがいつかベティの宿屋で言ってたことが……、俺達これからどうする？」

「家に帰りましょう。悪夢は全部終わりましたから」

アンナは横に寝そべっているクシュウに、屈託の無い笑顔を向けて答えた。

やがて声を出すのも疲れたのか、二人はゆっくりと目を閉じた。目覚めたとき、久しぶりに気持ちの良い朝を迎えられると信じて……。

エルダー王国から遙か北方、ウェイランド王国領内のある場所に、その研究所は存在していた。

そこは標高が高く、寒冷地であるウェイランドでも、とりわけ気温が低い。

研究所周辺には強力な結界が張り巡らされており、近辺には集落などは一切無い。関係者以外は絶対に立ち入れない陸の孤島であった。

何故このようなことになっているかという点、万が一にもこの場所から“研究物”が逃げ出さないようにするための措置である。

ウェイランドの最高研究機関「オーリガ魔道研究所」、そこは名前の通りの魔法関連のもの他、危険をはらんだ珍獣・魔獣、各地の遺跡から発見されたオーパーツの保管・解析も行っている。

ここでは数週間前に運び込まれた二つの“巨大な棺”の研究で毎日慌しくしていた。

それはウェイランドとエルダーの国境を繋ぐ遺跡洞穴から発見された物品で、これまでこの研究所に運び込まれたオーパーツの中では、とりわけて大きなものであった。

“棺”とは形状からそう呼んでいるだけで、実際の用途は全く不明だった。それは大きな長方形の金属の箱で、上面には解読不能の象形文字が刻まれている。

あらゆる魔法を使い、その物体を調べたところ、その内部は零度以下のかんりの低温になっているのが判明した。それと同時に、この棺は魔法による製法が一切施されていないことも……。

魔法の力なしで、長期の年月内部を冷却できる不思議な箱。研究者達はこの棺の解析にやっきになった。

ユタニ女王陛下が亡くなったとか、エルダーに侵攻した自国の軍隊が降伏したとかで、国中が大騒ぎになっても、彼らは全く気を削ぐことなく、棺の研究に熱中した。

研究所で最も大きな部屋、天井・床・壁、全てが分厚い金属に覆われた密室。そこがこの施設の中央研究室であった。内部で何があっても大丈夫なよう、部屋の壁は頑丈で、中には屈強の戦士達が絶えず研究を見張っている。

その部屋の真ん中に、その棺があった。そして今まさに、研究員達はその棺を開けようとしているところであった。

一人の魔道士が強力な火の魔力を宿した剣状の半田こてで、棺の蓋についている錠前と思われる部分を焼ききろうとしている。

この棺はとてつもなく頑丈で、これまで幾度もその錠前を破壊しようとしてきた。そして実に多くの最高級の工具が、その棺の強度に耐え切れず壊れていった。

されど手応えはあった。少しずつだがその錠前は削れていき、今まさに、もうじきそれが完全に壊れようとしている。

突如ガキン！と鈍い音が聞こえてきた途端、棺の蓋のひずみから、大量の白い冷気が噴出してきた。

成功した！その場にいる全員が、歓喜に震えた。早速蓋を開けて、中身を確認する。

「これは……蜘蛛？」

真っ先に中身を見た研究者の一人が、ぼつりとそう呟いた。

棺の内部は、衝立のような薄い金属の壁で仕切りが付けられており、中は十の区画に分けられていた。そしてそれぞれの区画の中に、奇妙な生き物が一匹ずつ、氷漬けになって納められている。

その生物の姿は、確かに一見すると蜘蛛のようにも見える。だが

実際には、蜘蛛とは全く違う生物であった。

大きさは大体人間の顔面と同じくらい。全身は白く、短い胴体に節足動物によく似た長い足が、左右に四本ずつ、計八本生えている。蜘蛛に見えるのはそこまで、この生物は目や口に相当する部位が全く見当たらなかった。その小さい胴体からは、蛇のような長い尾が伸びている。

また胴体と尻尾の付け根には、人間の耳たぶのような、部位が左右二つ生えていた。

予想以上に奇怪な発掘物に、皆どう反応すればいいのか判らず、その場は一時凍りついた。だが主任が一言「解凍しろ」と命じると、皆慌しく動き回った。

生物を部屋の机に運び出され、二列に並べられる。火属性魔法に長けた一人の研究員が、魔法でその生物達に、熱風を送りつけた。

その作業に、誰も大した期待は寄せていなかった。

あの棺の中の低温度は相当なものだ。あんなふうに凍らされて生きていられる生物などまず存在しない。しかも凍らされていた時間は、最低でも百年以上は経っているはずである。

だがその考えは簡単に覆された。今まで置物のように固まっていた生物が、何の前触れも無く突然飛び跳ねた。

そして熱風を送っていた研究員の顔に張り付いたのだ。

だるそうな顔で傍観していた研究員達は、驚きのあまり声も上げられなかった。

長い足を後頭部まで回して張り付くと同時に、生物は長い尾を研究員の首に巻きつけて、凄まじい力で締め上げた。苦痛により研究員の声にならない悲鳴が、捕まえられた顔の口から漏れ出てくる。

他の九匹も間もなく動き出し、物凄い速さで動き回り、部屋にいる他の人間達に向かって次々と飛び跳ねた。

あまりに突然の出来事に、動揺した研究員達は何も出来ぬうちに、次々と生物に捕まっていった。

我に返った他の研究員や護衛兵達は、必死にその生物を研究員達から引き剥がそうとする。

だがその生物は、まるで張り付いた人間の身体の一部になったかのように、全く外すことができなかった。

所内はてんやわんやの大騒ぎになった。捕まった研究員達は医務室に運び込まれ、外科手術で何とか生物を引き離すことに成功した。研究員達は昏睡状態になってはいたが、全員生きていた。一方の生物は既に死んでいるようでピクリとも動かなかった。

生物の死骸は解剖に回され、研究員達は病室に収容された。

数時間後、医務室で一人の医師が、患者の容態を記した診療簿を見て、怪訝な表情を浮かべていた。不意に病室の中から、慌しい音が聞こえてきた。

患者のものと思われる多数の悲鳴と、いくつもの獣の鳴き声のような甲高い声である。その奇怪な大合奏は突然発せられたかと思うと、嵐のようにあっさりと止んだ。

医師は急いで病室に駆け込んだ。

「な……、何だというのだ……いったい!？」

医師は今、自分が何を見ているのか理解できなかった。

病室にいた患者は全員死んでいた。ただ死んでいただけではない。彼らの腹部に、円形の大きな穴が開いているのだ。辺りに血と肉片が飛び散り、穴の中からはへし折れた肋骨が飛び出ている。まるで内部から何かが飛び出たかのように、外側にへし折れているのだ。

医師は部屋の向こう側にある、もう一つの扉が壊されていることに気がついた。

扉は下部から豪快に砕かれており、地面には蛇の足跡のような細長い血痕が、ベッドから扉の向こうへと、いくつも辿るようについていた。

異界魔の悪夢は、まだ終わっていないようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2269f/>

アクセス・プレデター

2010年10月9日22時54分発行